

---

# IRIS//RAGNAROK

椰子カナタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IRIS / RAGNAROK

### 【Nコード】

N1091X

### 【作者名】

椰子カナタ

### 【あらすじ】

絆は、運命という言葉で断ち切れはしない。不良として恐れられる主人公、扇空寺京太。その真の姿は。pixivで連載中の作品に加筆修正を加えて転載したものです。

## 1 / 鬼龍の代紋

/ 1

町外れの廃工場はその存在が廃れて久しい。

町一番の高い生産率と職人技を以って栄えたそこは、より能率的な大量生産の波に吞まれて見るも無残な姿と化した廃墟でしかない。トタンの壁は剥がれ、外から屋内を覗き見ることすら可能なほど古びてしまっている。現在では寄り付く人間など皆無となった工場内は、町の不良たちの格好の溜まり場となっていた。

今日も建物内には十数人の若者の姿があつた。多くの者が髪を染め、ピアスを付け、煙草を吸っている。一人一人見れば個性を垣間見ることのできるであろうが、全員に共通しているのは押柄極まりない風体であつた。

なかでも奥の巨大なソファに一人で腰掛ける、一際柄の悪い少年がいた。彼こそこの不良グループ『鴉』をまとめ上げるリーダーである吉田轟棋だ。生まれつき恵まれた大柄な肉体は完全に他を圧倒しており、誰が見ても彼こそがこのグループを率いるボスであると認識できるだろう。

吉田は静かに煙草に火を付け、煙を肺へ流し込む。

これだけの人数がいながら、会話はほぼ皆無だつた。皆が思い思いに佇み、沈黙している。それはまるで何かを待っているようであつた。得も言えぬ緊張感がこの廃工場全体に張り詰めていた。

吉田は肺に溜まった煙を吐き出した。煙は工場内に霧散し、消える。厭な緊張感だつた。アジトにいるというのに、出入りに行くようなこんな感覚は初めてだ。どれだけヤニを吸っても気休めにもなりやしない。

「吉田！」

建て付けの悪いドアが大きな音を立てて開き、吉田の右腕である

山下健司が大声を上げて入って来た。山下には今見張りをやらせている。その彼が血相を変えて中に入って来ると言うことは、つまり。

「き、来たぜ！」

案の丈だ。程なくして、ドアの前に突っ立っている山下を押しつけてやってきたのは一人の少年だった。線の細い長身で、髪は整髪料で固めてある。学ランに身を包んだ姿は普通の学生のようなのだが、しかし彼の登場にこの場にいる全員が息を呑んだ。

「よう、久しぶりじゃねえか吉田。随分派手にやっってるみたいで何よりだぜ」

少年が口を開く。再会を喜ぶような口ぶりだがその低く唸るような声に、名前を呼ばれた吉田の身体が無意識に震えた。

少年？ そんな生易しい存在じゃねえ。奴は、奴は。

「けどなあ、ウチの組のもんに手え出したのは不味かったな。手え出されちまつたら、ケジメを付けなきゃならねえ」

少年は指を鳴らす。それはいかにも分かりやすい、臨戦態勢のサインであった。

吉田は運命というものがあるならこうして再び彼と相見えることになってしまったそれを呪いたかった。上手くやってきたはずだったのだ。かつて彼に叩きのめされてから、ここまでのし上がって来るまで長い時間が掛かった。自分を鍛え、山下を始めとした手下を集めて、『鴉』を築き上げた。勢力を伸ばし、この辺りでは知らない者のいない程の力も得た。

上手くやってきた、はずだ。彼の縄張りにだけは手を出さないように気を付けて来たはずだったのだ。だが、調子に乗ったメンバーがヤクザに喧嘩を売ったばかりに、結局俺はまた奴と関わる羽目になってしまっている。

「往生しな」

奴は、鬼だ。

寝不足の目をこすり、扇空寺京太はその場で大きく伸びをした。その場とは学校の屋上であり、その端のフェンス際であり、更に言えば彼の恋人の神埼空の膝の上である。

「あ、起きた起きた。ちゃんと寝れた？」

京太は彼女の質問に頷く。実際には深く眠れたわけではない。というより彼は軽度の不眠症のようなもので、眠りは常に浅い。だがわざわざ膝枕を買って出てくれた彼女の厚意を無下にしたくはなかったために京太は頷いて見せたのだ。

快晴の空には春らしく穏やかに雲が流れていく。気温は暖かで、桜の散り切った五月半ばである今、風は爽やかに吹き抜ける。

京太はむくりと起き上がり、立ち上がって首の関節を鳴らす。180を超える彼の長身は、座り込んでいる空からすれば見上げると首が痛いくらいだ。顔立ちには高校二年生となった今もまだまだあどけなさが残っているものの、どこか影の差す感じが年齢をぼやかしている。整髪料で固めたツンツン頭はこの年代特有の若さを感じさせるが、纏う雰囲気があるで仙人のようなものであるためにその印象をちぐはぐにしているのだ。

「よし」

京太は真剣な面持ちで一人頷く。その様子に空は敵かなものを感じたのか、固唾を呑んで次の言葉を待っている。京太はそのままの表情で告げた。

「今日は、すき焼きにするぜ」

「あらら」

空が盛大に肩を落とす様子を、京太は訝しげに見下ろす。

「あん、どうした？」

大事な夕飯の話じゃねえか、などとのたまう彼には空の反応の意味は分からないのだろう。

「うっん。もう、なんでもないよーだ」

空が首を横に振るのに合わせてそのボブカットにした髪が揺れる。京太と彼女の付き合い自体は長いのだが、未だに京太の発言に空は驚いてばかりだ。やはりその度に、自身の奇抜さには自覚が欠けている京太は空の反応の意味が分かりかねる。となれば必然、体よく折れるのは空の役割であった。

「ま、いいけどよ。よし、そうと決まりやあ早速紗悠里に連絡しねえとな」

京太は携帯電話を取り出して電話を掛ける。耳に当てた受話器から数度のコール音がした後、馴染みの声が聞こえたので、京太は今晚の献立を伝えるべく話し始めた。

「おう、紗悠里か。今日の晩飯もう決まってるのか？　そうか、まだか。なら丁度いいな。今夜はすき焼きだ。あいつらもめいっばい歓迎してやらねえといけねえしな。おう、派手に行こうぜ。ああ、んじゃあ足りねえ材料は買って帰るからよ、そっちの準備は頼んだぜ」

打ち合わせが終了した京太は電話を切る。満足げに空を見下ろす表情は実に楽しそうだ。

「今日は面白れえことになりそうだぜ。空も来るか？」

「うん！　行ってもいいなら行きたいな。……あ、じゃあお母さんに言っとかないと」

空は母親に向けてメールを打つ。その身体が微かに左右に揺れている所を見るに彼女もどこか楽しげであった。

メールを打ち終わり、空はまた京太を見上げる。

「んじゃあ晩ごはんまでどうしよっか？　また寝る？」

「いや、もう買い物に行っちゃったほうがいいだろ。量が多いから仕込みに時間掛かつちまうしな」

了解つ、と立ち上がった空を連れて、京太は屋上を後にするべくドアを目指した。もちろん鞆を教室まで取りに行った後はそのまま帰るつもりだ。彼らは自他ともに認める不良生徒で、授業をサボって早退など日常茶飯事なのだ。

だが、それが縁でこうした厄介者にも出会う羽目になっている。

「はいはいはい！ そのお二人さん、教室に戻ったらちゃんと授業に出なきゃダメなんだよ？」

どこからか颯爽と、京太と空にビシツと指を差す女生徒が現れた。小柄な体躯に、ツーテールにまとめた長い髪が特徴的なまるで小動物のような彼女の腕には、『生徒会』の文字が刻印された腕章がある。

「おう、朔羅。お前も来るか？ 今日はずき焼きだぜ」

「え、すき焼き！？ いいの！？」

朔羅と呼ばれた生徒会執行部員、風代朔羅は京太の言葉に途端に目を輝かせる。

「こら朔羅、乗せられてどうするのよ」

「あいたっ！」

朔羅の頭を後ろから小突いたのは、眼鏡を掛けた落ち着いた雰囲気気の女生徒だ。朔羅と同じく生徒会の腕章を付けた彼女こそ、この学校の現生徒会長、穂叢なぎさであった。

「扇空寺君、もうすぐ昼休みも終わって、五時間目が始まるわ。晚ごはんの準備もいいけれど、それは学校が終わってからも出来るんじゃないかしら。授業が終わった後なら私たちも手伝うから、大人しく授業に出てくれると嬉しいのだけど」

なぎさは真つ直ぐに京太を見つめて淡々と言う。やや吊り上がり気味の双眸からは明らかかな威圧が発せられていたが、京太はそれを特に気にした風もなく肩を竦めて笑う。

「はっ、じゃあ今日はそういうことにしとくか。荷物持ちも増えるみてえだしな」

京太はポケットに手を入れて、飄々と生徒会二人の脇を抜けていく。残された空は苦笑いを浮かべてなぎさを見る。

「あー……、あたしも？」

「当たり前よ、神崎さん」

「で、ですよねー！ あは、あははー！」

流石に京太のようにさらりと受け流すような真似はできなかった空は、苦笑いを顔に張り付けたまま京太に続いた。

2 .

日課を全うに終え、京太たちは連れ立って商店街を訪れていた。空は元より、朔羅となぎさも一緒だ。

帰宅部である京太と空はいいとして、生徒会としての仕事があるはずの朔羅となぎさはその全てを後輩の役員に押し付けて来たらしい。学校を後にするとき、悪びれることなくなぎさがそう説明していた。問題児のお目付け役は自分たちが買って出たのだ、とも。

スーパ―に入り、京太は籠を三人分取って朔羅となぎさに渡す。残りの一つは腕組みをした自分の肘関節に掛ける。

「籠が一つじゃ足りねえからな。早速手伝ってもらうぜ」

はいいと籠を振り上げながら朔羅は独断先行を開始した。スキップでもするような勢いで店内を物色して行く。対してなぎさは頷くと、冷静な足取りで朔羅の首根っこを掴まえに行く。

「京太君、あたしはいいの？」

一人籠を持っていない空は、不安げな表情で京太を見上げた。だが京太は当然だとも言うように、

「あん？ お前の分は俺が持つに決まってるんだろ」

さっさと野菜のコーナーへ足を踏み入れて行ってしまふ。まずは必要な食材の数があるかどうかを確かめる必要がある。当然質も求められるが、何より中途半端な数しか用意できないのなら切り捨てる他ないからだ。大所帯な彼の家では、普段からして必要最低限の絶対値が莫大で、それに加えて今夜は客も大勢いるのだから、人数分の材料は余裕を持って見繕わなければならない。

「へ？ そ、そう？ ……えへっ」

空は表情を笑みに変えて、京太の後に付いて行った。

「えっと、これとこれとこれと……」



「そんなの要らないでしょ。ほら、棚に戻して」

朔羅は自分の感性で好きな食材を手当たり次第籠に入れようとしては、なぎさに咎められている。今掴んでいたのはグレープフルーツだ。果たして彼女は何を作るつもりなのだろうか。

「お前は闇鍋でもすんのか。会長と一緒に卵取ってきな。途中で割んじゃねえぞ」

「むー、はい」

京太の指示に唇を尖らせながら、朔羅は卵コーナーへとずんずん進んでいく。

「もう……。ごめんなさいね、扇空寺君。あの子、みんなで買い物してるのが楽しくて仕方ないみたいなのよ」

「そいつあ結構。……ところで、さっさと付いてってやらねえと、

また好き勝手やり始めるんじゃねえのか？」

「そうね。卵はどれくらい必要なかしら？」

京太はなぎさにおおよその量を伝える。するとなぎさはその鉄面皮とも言える表情にうつすらと困惑の色を浮かべた。

「そう……。それは全部私が持つわ。知ってると思うけど、あの子なんにもないところで平気で転ぶ子だから」

眼鏡を押し上げて、一層気合の籠ったような迫力を伴ったなぎさは朔羅の後を追う。

「あはは……。大丈夫かな」

実は空は京太ほどあの二人と交流がある訳ではない。何しろ生徒会のブラックリストに載るほどの問題児であるのは他でもない京太であり、二人は目下、京太の更生のためにここにいるのだから。

「まあ心配すんなって。会長はなかなか強えからよ」

「そういう問題じゃ」

空が言い掛けたところで、何やら卵コーナーの辺りで鈍い音がした。京太と空の視線の先には、本当に何の障害物もない場所で朔羅が床に倒れている姿があった。

「ほら、もう……。言ってるそばからこれなんだから……」

「うー、だつてえ……」

呆れた様子のなぎさと、涙目になっている朔羅の声が聞こえて来る。

空が苦笑いしか出来ない横で、京太は余程可笑しかったのか声を上げて笑い出していた。

／＼

鬼を前にして、『鴉』のメンバーは為す術なく次々と薙ぎ倒されていく。十数人いたはずのメンバーは既に片手で数えられる人数まで減ってしまった。

やはり、化け物だ。これだけの人数に囲まれても、鬼は臆することなく素手で闘い続けている。たった一人が相手にも関わらず誰も彼に指一本触れることができないのは明らかに異常だった。次元が違い過ぎる。

「く、てめえら、棒でも石でもなんでもいい！ 武器を持ちやがれ！」

吉田の指示で、鬼の圧倒的な強さに尻込みしていたメンバーたちはこぞって手当たり次第の武器を持ち始めた。鉄パイプを手にした少年が、雄叫びを上げながら鬼に殴りかかって行く。

「遅えよ」

だが鬼はそれをさらりとかわし、少年の顎に掌底を入れる。少年はたまらずふっ飛ばされて気を失ってしまった。続けて石やら木刀やらを持ったメンバーたちが鬼に襲いかかるも、その悉くが軽くいなされてしまう。彼が強過ぎるせいもあるが、既に怒りと恐怖で錯乱状態にあったメンバーたちにそもそも勝ち目などなかったのだ。

吉田は倒れて行くメンバーの中に山下の姿を探した。山下は最初に彼に着いて来た存在で、今でも右腕と呼んで差し支えない。『鴉』が壊されても、せめて彼がいればまたやり直せる。このどさくさに紛れて既に逃げる算段を立てようとしていた吉田は山下だけでも連

れて行こうとしていたがしかし、その姿を見つめる前に最後の一人  
が鬼の前に倒れる瞬間を目の当たりにしてしまった。

「後は、お前だけになっちまったなあ」

鬼は真っ直ぐに吉田を見据えている。不敵に笑う、その眼には敵  
意が満ち溢れていた。吉田は圧倒的な存在感の前に、もう身動きす  
らでせずに立ち尽くしていた。

「……で、仲間見捨ててどこ行こうってんだ吉田。そういうのは、  
仁義がなっちゃあいねえよなあ！」

吉田は歯を食いしばる。こうなったらもう、逃げ場などどこにも  
ない。仮にここから逃げられたとしても、それはあの時彼の元を離  
れた時のようにただ。

「う……、うおおおおおおおおおっ！！！」

咆哮と共に吉田は捨て身の特攻に打って出る。今逃げ出したとこ  
ろで何も残らない。それはただ 惨めなだけだ。

吉田が放った渾身の右ストレートを、鬼は正面から受け止めた。  
どんな巨漢でも殴り倒して来た必殺の一撃を、片手でだ。確かに背  
丈は同等だが体格差は歴然としている。鬼より二回りは大柄な吉田  
がしかし、拳を掴まれ外せなくなっていた。

「はっ、そうじゃなきゃ張り合いがねえよなあ。……お返しだぜっ  
！」

鬼は思い切り吉田の腕を手前に引き、体制の崩れた彼の顔面に左  
ストレートをブチ込んだ。吉田の巨体が宙を舞い、後ろのソファに  
大きな音を立てて落下する。

吉田の意識は気絶寸前で踏み止まったが、自力で立ち上がるのは  
しばらく難しいだろう。完膚無きまでにノックアウトされた吉田の  
元に、鬼が歩み寄って来る。彼は遙か高みから、吉田の顔を覗き込  
む。

「どうだ、ウチへ戻って来る気はねえか。お前もこいつらも、まと  
めて俺が面倒みてやるよ」

鬼は吉田へ向けて手を差し伸べた。

買い物を終え、京太はその組んだ腕に四つのビニール袋を掛けて家に帰ってきた。門を開き、玄関まで続く石畳の上を歩いて行く。それぞれ一つずつビニール袋を持っている空、朔羅、なぎさが後に続く。京太は空のビニール袋も持つつもりだったが、流石に先輩二人が荷物を持っているのに自分が手ぶらなのは心苦しかったらしく一つだけ任せていた。

「ホントにすごいよねっ、京太君のお家！ ね、空ちゃん？」

鹿威しが音を鳴らす日本庭園を並べながら、朔羅が空に話し掛ける。人見知りしない朔羅の性格もあるが、二人は道中すっかり打ち解けていた。

「ねー、すごい大きいし」

空が言う大きさはその外観の高さではなく、全体的な敷地の広さのことだ。彼女らの前に建つ伝統的な和風住宅は玄関の左右ですら無限回廊のように長く、ここからは見えないが奥行きも広大である。それだけの敷地を確保するため、屋敷は竹林の奥に建てられていた。

「おい、お前ら何でそんなに離れてんだ」

京太は戸口に手を掛けながら振り返る。後に続いていたはずの三人は玄関先からかなり距離を置いた場所で立ち止まっていた。

「いいのよここからで。ある意味本当に凄いのは玄関を開けてからなんだから」

なぎさは眼鏡を押し上げながら京太が玄関の戸を開けるのを見つめていた。空もその先の光景を想起して苦笑いを浮かべる。朔羅は空となぎさを盾にするようにして二人の後ろに回り込む。

「なんだそりゃあ。……ま、開けるぜ」

京太は肩を竦めながら引き戸を開けた。

「お帰りなせえませ、若！！」

京太が玄関を開けた途端、幾人もの強面たちが京太たちを出迎える。そのあまりの迫力になぎさと空の裏に隠れていた朔羅が更に身をちぢ込ませてしまう。

京太は先になかへ上がり、ビニール袋をすべて強面たちに受け渡した。朔羅の盾代わりになっていた二人は嘆息しながらも、朔羅の手を引いて玄関を潜る。

「不動、あいつらのも頼むぜ」

「ウス、男上げさせて頂きやす」

京太の指示に従い、彼ら強面のなかでも中心に立つ髭の濃い男、不動が女子三人の元へ歩み寄る。

「ささ、姐さん方、お荷物お持ち致します」

三人が不動にビニール袋を渡すのを見届けると、京太は彼女らを自分の部屋へ案内するべく廊下を真つ直ぐ歩いて行く。途中の厨房を覗くと、まるで旅館の仲居のような格好で仕込みを進めている少女の姿があった。

「おう、紗悠里。今帰ったぜ」

京太が声を掛けると、その少女、玖珂紗悠里は手を止めて深々と一礼する。

「お帰りなさいませ、若様。只今こんな格好でして、お出迎えに上がれず大変失礼致しました」

「いや、構わねえよ。こいつら部屋に置いてきたら俺も手伝いに入るからよ、それまで頼むぜ」

「はい！ 空さん、風代さん、穂叢さんもようこそおいで下さいました。ごゆっくりお寛ぎ下さいね」

紗悠里は京太の後ろの三人にも屈託のない笑みを見せて頭を下げる。京太が三人を連れてその場を後にすると、紗悠里は仕込みの続きに戻って行った。

「紗悠里さん、綺麗だよねえ」

「本当、朔羅と同じ年だなんて信じられないわ」

なぎさの冷静な一言に、朔羅は小柄な体をめいっぱいじたばたさ

せて抗議する。

「それを言ったらなぎさちゃんだって同い年だもん！」

「朔羅ちゃん、穂叢先輩はちゃんと年相応だと思っよ……」

空の苦笑い混じりのツツコミに朔羅は更に頬を膨らませた。紗悠里もなぎさも、プロポーションに恵まれた美人であり朔羅と同じ18歳の少女である。だが朔羅はその二人に比べて年齢不相応に見られるのがどうにも不満らしい。

「むー、空ちゃんまでー。京太君はどう思うのっ？」

「あん？ ガキにや興味ねえな」

「朔羅ぱーんち！」

京太はしかし、朔羅が繰り出した鉄拳制裁も諸共せずを受け止めてそのまま自室まで連行して行った。京太に引き摺られていくその様は、まるで携帯電話に付けられたストラップのようであったという。

4 .

「まずは今日、我が家に新しい家族が増えたことを祝いてえ。お前から、これからよろしくな。乾杯だ」

京太が乾杯の音頭を取り、すき焼きパーティーが始まった。パーティーと言っても宴会場の中央に台を並べて行われている形であるため、すき焼きの会と言った方が正しいかもしれない。更に言えば参加者の大半が和装であった。それはともかく、会場はもの凄い人数で溢れ返っていた。元々扇空寺家は大所帯ではあるのだが、ここに昨日京太がヤキを入れた連中がこぞって押しかけているためだ。

その連中もがやがやとした京太の家族たちの盛り上がりにつきかり呑み込まれてすき焼きを楽しんでいたが、ただ一人、箸も取らずに腕を組んでいる大柄な少年の姿があった。

「どうした、お前は食わねえのか？」

京太が話しかけると、大柄な少年は閉じていた眼をカツと見開き台を叩いた。衝撃音と共に台は大きく揺れる。鍋がひっくり返らなかつたのは不幸中の幸いだろうか。これに会場はしんと静まり返り、皆の注目が少年に集まる。

「……なんでだ。俺は一度あんたの元を逃げ出して、下っ端とはいえ俺のグループの奴があんたの組の人に手を出した。なのに、なんで、なんであんたはまた俺をここに置いてやるなんて言えるんだ！」  
「てめえ、若になんて口利きやが」

腰を上げようとした強面を、しかし京太はスツと手で制する。再びこの場に沈黙が降りた。京太は真っ直ぐに少年を見つめている。確かに彼は一度京太自身が身内に引き込んだが、彼は京太の元を離反した。そして自分のグループを作り今に至る訳だが。

やがて京太は鼻で笑い捨てた。

「はっ、興味ねえなそんな昔話はよ。俺とお前は今も昔も、ブン殴り合つてここにいる。それでいいじゃねえか。あんなだけ派手にやり合つたんだからよ、もうケジメはきっちり着いた。細けえこたあ気にすんな。まあ、それでも俺が気に入らねえならいつでも来な。相手になつてやるよ、吉田」

吉田轟棋というその大柄な少年へ向けられた笑みは不敵で、それはまさしく先日彼が相对した鬼のものであつた。京太の元には吉田のような境遇の者が大勢いる。狭苦しい社会のルールから外れ、歪み、行き場を失つた末に不良のレッテルを貼られて生きている者たちだ。彼らは皆、京太との殴り合いの喧嘩を経てここへ身を寄せている。もちろんこの場にも出席している彼らは吉田とも顔馴染みで、全員が吉田に笑みを向けていた。

「……あんたには、敵わねえな。昔っから」

吉田は深々と頭を下げる。

「これからお世話になります、京太の兄貴！ こいつらともども、宜しくお願い致します！」

「おう、よろしく頼むぜ。轟棋」

顔を上げた轟棋の表情は、憑き物が落ちたかのように清々しいものだった。京太はそれを見て、満足げに頬を緩める。

「さて、今日は俺の奢りだ！ どんどん食べよお前ら！」

かくしてすき焼きパーティーは再会を迎え、各人は馬鹿騒ぎしながらの食事へ戻った。当初、席は上座から京太と空、朔羅、なぎさといった京太の友人、紗悠里たち京太の側近が作る組が一つ。不動たち扇空寺組の幹部たちが作る組が一つ。轟棋たち『鴉』のメンバーや扇空寺の屋敷に厄介になっている不良たちの組が一つと明確に分かれていたが、会が盛り上がるにつれて次第にその垣根は取り払われていく。

「京太君たちが呑んでるのってもしかして、お酒？」

「当たり前だろ。せつかくの宴会だぜ、酒が出なくてどうすんだ」

空の質問に京太はグラスを傾けてさらりと答えた。彼らの反対側の席では轟棋たちに強面たちが自分の酒を吞ませて、そればかりか次の一杯を注いでやっているのが見える。

「あー、私も私もー！」

誰彼構わず一緒にどんちゃん騒ぎをしている朔羅は、既に頬が微かに赤い。自分のグラスに注がれた酒を吞みながら色んな席へと縦横無尽に動き回っている。ここで普段なら世話役のなぎさが現れるはずなのだが、見れば彼女はもう顔を真っ赤にしてごろりと寝転がっていた。

「空、お前も呑むか？」

「え、あ、あたしは別に……」

京太は遠慮しようとする空の顎に手を添える。

「なんなら、口移してもいいんだぜ？」

すると一口も呑んでいない空の顔が頭まで真っ赤に染まる。

「よ、酔ってるフリして変なこと言わないでよもう！」

酔った勢いにするつもりでやってみた京太だったが、どうやら顔色がいつも通り過ぎたらしい。京太は肩を竦めながら空から手を離す。



「ふふっ、空さんお顔が真っ赤ですよ。はい、どうぞ」

「あ、どうも。ってなんでもう注いでるんですか紗悠里さん！」

空の隣にやってきた紗悠里がさりげなく酒の入ったグラスを空に渡した。空の抗議にも、紗悠里は穏やかな微笑みを浮かべるばかりで意に介した様子はない。

「空、たった一杯だけ？　ぐいつといつちまいな、ぐいつとよお」

ダメ押しのような京太の一言に、観念した空は思い切ってグラスに口を付けてみる。それだけでもう頬を赤く染め始めている空を見て、京太は思わずにやりとしてしまう。空からすれば未成年の飲酒はダメ、絶対と言いたいところであろうが、この席にそんな野暮な台詞は必要ない。

「でね、その時京太君ってば、って聞いてますか、紗悠里さん」

だがその一杯だけでこんな調子になってしまった空を見て、京太は少し自重しようと思うのであった。酔っ払った勢いで何くっちゃべってんだお前は。

やがて宴も酣となり、会場には静寂が戻りつつあった。空と朔羅となぎさはもう眠りこけてしまったので、紗悠里に客間に運んでもらうよう指示しておいた。他にも畳の上で寝息を立てる者は少なかつたが、これくらいで参るような連中ではない。

京太はまだ起きている者の中でも、縁側で一人、残りの酒を片付けている轟棋の隣に腰を下ろした。

「よう、酒には強えみてえだな」

「……どうも。京太の兄貴ほどじゃありません」

京太は自分のグラスを轟棋に向けて差し出す。轟棋は一瞬どういう意図かを計りかねたようだが、すぐに察してグラスを重ねた。キン、と小気味よい音が鳴るささやかな乾杯を終え、二人はグラスを傾ける。

「……昔の俺は、独りで酔がってる悪ガキでした。京太の兄貴にボコボコにされてここに来て、でもそれが悔しくてここを抜けた。覚

えてますか、中学の時、初めてあつた頃も体格じゃ完全に勝つてた俺が京太の兄貴には手も足もでなかつた」

「言つたら、昔の話にや興味ねえつてな。……ただ、あの頃の俺はまだまだガキですよ。ウチを出てくお前をどうして腕づくでも止めようとしなかつたのか、今考えると不思議でしょうがねえ」

「お互い、若かつたつてことですね」

「はっ、違いねえ」

グラスを傾ける時、二人の間に沈黙が降りる。空になつた互いのグラスに、轟棋が残りの酒を注ぐ。

「……一人だけ、探したい奴がいるんです」

偶然重なつた鹿威しの音を京太は一生忘れないだろう。そう感じるほどに轟棋の表情は真剣そのもので、そいつがこの場にいない事実に関心を痛めているのが浮き彫りになつていた。

「山下つて奴なんですが、こいつは俺がここを出てから初めて俺に付いてきてくれた、相棒みたいなもんです。昨日の喧嘩の後、ぱつたりといなくなつちまつて……。連絡も取れないんです」

そういえば轟棋は、喧嘩の途中で逃げ出そうとしたときも何かを探していた。あれはその山下のことだつたのか。

「いいぜ。そいつを探すんだろ？ 手伝つてやらあ」

「いや……。俺一人で行きます。京太の兄貴にそこまで面倒は掛けられません」

「馬鹿言つてんじゃねえ。お前はもう俺の身内なんだよ、轟棋。身内の大切なダチ公がよ、行方知れずだつてのに手を貸さねえのは仁義がなつちやあいねえぜ。お前が何と言おうが、俺はその山下つてのを探すのを手伝うぜ」

京太は最後の酒を呑み干した。その隣で、ありがとうございませと掠れた声で呟くのが聞こえた。

月の綺麗な夜空だ。庭園に形作られた池は雲のない虚空に煌めく三日月をその身に映して湛える。

京太はそれを背景に縁側でイヤホンを付けて読書に興じていた。脇には酒の入ったグラスと酌をするために紗悠里が控えている。

すぎ焼きパーティーという名の宴会はお開きとなり、後片付けを済ませた者はそれぞれ自室に向かっていた。既に眠りこけてしまった者は彼らによって引き摺られて行った。今この宴会場には京太と紗悠里の二人だけしか残っていない。

京太はグラスを取り、口を付けてゆっくりと傾ける。宴会から数えれば果たして何杯目になるかも分からないが、彼の欧米人にも似た白い肌はアルコールなど受け付けないかのようにまるで色を変えていなかった。眠りの浅い京太にとって夜は長い。故にこうして紗悠里を伴っての晩酌は、彼の祖父が亡くなり一年が経つ今、每晚恒例の行事となっていた。

思えばこの自身の体質は先祖代々一族が受け継いできたものだ。祖父は生前夜が更けるまで散々京太を将棋に付き合わせてきたし、京太が幼い頃に亡くなった父も今の京太と同じような夜を過ごしていたと聞く。これは扇空寺の血筋に与えられた宿命であった。

「……紗悠里」

京太はイヤホンを外す。漏れ出てくるのは最近お気に入りヴィジュアル系ロックバンドの新曲だ。それはこの情緒溢れる純和風の空間には極めてそぐわないはずのものだったが、京太が身に付けているというだけでひどくマッチしているようにも見えた。

本をパタンと閉じ、京太は月を見上げる。

「はい。いかなさいましたか、若様？」

扇空寺の親戚筋である玖珂家からやってきた紗悠里とは幼い頃からの付き合いだ。歳で言えば京太の一つ上だが、知り合った当初から彼を慕って付いて来た。それは今も変わらず、京太の側近として仕える形で近くにあるうとする。

「悪いな、毎晩付き合わせちまってよ」

「いえ、私も夜には強いですから。まあ、若様ほどではありませんけど」

紗悠里はばつが悪そうに微笑む。彼女も遠くなったとはいえ扇空寺の血筋の者だ。程度は違うだろうが、同じ性質を持つ者であるからこそこうして寄り添ってこれたのである。京太は紗悠里の言葉を受けて釣られるように笑う。

「そいつあ結構。どうだ、たまにはお前も呑まねえか？」

京太は自分のグラスを手渡し、酒を注いでやる。紗悠里はクスリと笑い、グラスを傾ける。あつという間にグラスを開けてケロリとしている辺り、やはり同じ血が流れているのだと京太は感じざるを得ない。

もう一つグラスを用意して乾杯でもしようかと思つたところで、閉じられた襖の向こう側から声がした。

「よろしいでしょうか、若」

「不動か。ああ、構わねえぜ」

「失礼致しやす」

襖が開き、髭の濃い強面が中に入って来る。不動は組の幹部たちのまとめ役を務めている古株だ。45歳という年齢の関係上、側近という役割は辞退しているものの京太が厚く信頼を置く人物であった。

「申し開きの結果報告に上がりやした」

「いいぜ、話せ」

不動の言う申し開きとは、今日の昼間『鴉』の連中に対して行われたものだ。京太は自身が付けるべきケジメは付けたとして出席はしなかったが、幹部が一人やられたのだから例え形式上のものでも行わないわけにはいかなかった。

「はい。今回の一件についてですが、やはり武藤をやったのはグループの中でも末端中の末端の奴らでした。ただ、奴らもただ粹がつて手を出して来た訳じゃあねえようです」

「あん？ どういうことだ」

「どうやら、ウチの組の奴をやれば、吉田の側近に取り立ててやるって発破をかけた野郎がいるようですね。そいつあ今、ここにはいない奴のようです」

果たしてどれだけの人数が京太の元へ付いて来たかは把握していないが、だがそれでも一人、京太にはその野郎の心当たりがある。京太と轟棋の会話は恐らく不動の耳にも入っているだろう。彼が酒に呑まれるような男ではないのは京太も重々承知だ。それ故に京太の連想は真実であると確信せざるを得なかった。

「はっ、どうにもキナ臭え話になってきやがったな。轟棋はそれを知ってるのか」

「いえ、吉田を含めてこの件に関与していねえ奴らは呼んでませんので、恐らくは知らねえかと」

「そうか。……で、武藤の容体はどうだ？」

武藤は幹部の一人である男だったが、突然の奇襲から袋叩きにされ今も自宅で療養している。京太の父の側近として数多くの武功を立てて来たが、堅気の者に手を出すのを躊躇ってしまったのが敗因だった。

「回復には向かってますが、まだ起き上がるのは難しいですね。ただ、面会に支障はないかと」

「そいつあ結構。明日、轟棋とそいつらを連れて、詫びを入れさせに行くぜ。こればかりは、奴らがためえで付けなきゃあならねえからな」

「分かりました。武藤には俺から連絡しておきます」

「ああ、頼むぜ」

「ウス、男上げさせて頂きやす」

不動は頭を下げて宴会場を後にし、襖を閉めた。京太は立ち上がり宴会場の中央に立つ。そこから襖の上を見上げれば立派な額が飾られており、額の中には京太が頭領として受け継いだ代紋が書かれている。傍らに寄り添う紗悠里も、同じく代紋を見上げた。

京太の祖父、扇空寺辰真が没して一年。それは京太が正式に頭領

を襲名してから一年が経ったことを意味している。京太は代紋に、己の信じた仁義を貫き通すという誓いを立てた。この、鬼龍の代紋に。

「こいつあもしかしたら、納得のいく仁義を通すのは難しいかもしれねえ。だがよ、それでも俺はやってみせるぜ。見てくれよ、じいちゃん」

/ 3

吉田が扇空寺の屋敷を離れてから一週間が経つ。彼は今日も廃屋寸前のボロアパートの自室で眼を覚ました。ガスも水道も止まった部屋だが、彼一人が寝泊まりする分には何の問題もない。両親は吉田が中学に上がる頃、借金まみれの生活の末に彼を置いて夜逃げした。本来なら頼るべき親に捨てられた彼は今、祖母が管理人を務めているこのアパートに身を寄せていた。

制服を着て、ドアを開ける。するとそこにはお盆に乗せられた朝食がひっそりと置かれていた。白飯とみそ汁のつけられた茶碗に、漬け物まで添えられている。彼の祖母が作ってくれたものだ。吉田がここへ一人でやって来たとき、彼の祖母と一緒に管理人室で暮らそうと言ったが、吉田はそれを拒否して空き部屋を寝床にした。食事と一緒にしないかという話を拒否して以来、こうして毎朝質素ではあるものの食事を用意して置いてくれている。

「……ふん。余計なお世話だ」

しかし彼は強がりながらも用意された飯を平らげる。食べ終わった食器を乱暴にお盆の上に置いて部屋を後にした。

吉田は学校になど向かわず、町外れの古い工業地帯を目指す。既に廃業し稼働の止まった工場が多く建ち並ぶそこは不良たちの格好の溜まり場と化している。最近勢いがあると聞く不良グループ、『黄泉』のアジトもここにあるらしい。

吉田は人の気配を感じる廃工場のドアを蹴り飛ばして開けた。そ

ここには予想通り、数人の不良たちがたむろしていた。

「んだテメエはよ？ 随分ガタイがいいみてえだが、俺たちが誰か分かってんのか。あん？」

不良たちは皆、突如現れた乱入者である吉田を三白眼で睨みつけながら彼に詰め寄って行く。だが吉田はそんな彼らの態度など意に介した様子もなく不敵に口を開いた。

「……『黄泉』、とかいう奴らだろう？」

「そこまで知ってるんなら上等だ！ 一人でのこのこ来やがって、ただで帰れると思ってるんじゃねえぞ！」

円を描くように、『黄泉』のメンバーたちは吉田を取り囲む。包囲網に掴まってなお、吉田には怯む様子などない。ポケットの中の拳を握り締め、奴らの出を窺う。

家族などいない。そう思って生きている吉田には、あの場所は眩し過ぎた。扇空寺の屋敷では京太の血縁者、組員、居場所のないゴロツキたちが血の繋がりなど関係なく家族としてそこにあつた。自分がないものがそこにあることが眩しくて、悔しくて、吉田は逃げるように屋敷を飛び出した。

だから吉田は手に入れることにしたのだ。強さも、家族と呼べるものも、自分で。

「舐めてんじゃねえぞおっ！」

吉田の正面から殴りかかってきた者の拳を、吉田は真っ向から受け止めた。だがこれで怯むかと思われたそいつは逆に笑みを浮かべる。吉田は背後に気配を感じてその意味を察した。振り返れば、そこには金属バットを振りかぶって襲いかかって来た不良が今まさにそれを振り下ろさんとしているところだった。

「おらよっ！」

しかし、それが吉田に届くことはなかった。横から割って入って来たヘッドバンドの少年がその不良を蹴り飛ばしたからだだった。

「一人に寄ってたかってるのは好きじゃねーんだよねえ、俺」

ヘッドバンドの少年は僅かにずり下がったその位置を整えて、

吉田の隣に立つ。

「通りがかつたら、あんたが私刑られてるのが見えたんでねえ。手  
伝うぜえ、でかいの」

「……ふん、好きにしろ」

彼は勘違いしているようだが、吉田は自分からこの輪の中に入っ  
て行ったのである。しかし訂正するのも面倒だった吉田は、そのま  
ま彼との共闘を受け入れた。どちらにせよ、このお節介焼き染みた  
少年は手を貸すのを辞めないだろう。

ものの数分もしない内に、吉田とヘッドバンドの少年は『黄泉』  
のメンバーを全員ぶっ飛ばしていた。

吉田はヘッドバンドの少年に目を向ける。飄々としていて掴みど  
ころのない印象だが、彼とはどこか馬が合うような気がした。

「……吉田轟棋だ。お前は」

「俺は山下健司。よろしくな、吉田」

こうして吉田は山下と出会い、『鴉』を結成することになる。

6 .

扇空寺家の朝は早い。空たちが起床した午前七時には既に殆どの  
人間が屋敷から出払っていた。

「おはよ、京太君」

「よう、割かし早かったじゃねえか。飯の用意してやるからちよっ  
と待ってな」

居間で寛いでいた京太は目覚めた彼女たちがやってきたのを見て、  
入れ替わりに厨房へ向かう。この家の何十人分にも上る人数の食事は  
全て、京太と紗悠里が用意しているものだ。特に朝食は起床が最  
も早い京太が仕込み始めるのが常であった。

京太は厨房で三人分の朝食を手早く準備する。無論作り置きを盛  
り付けるだけの作業であるから全く時間は掛からない。数分後には  
居間の食卓に並んだ朝食を前に三人の客人が手を合わせていた。



昔は組を継ぐ人間が食卓を預かるとは何事だという声もあったが、早くに両親を亡くした京太からしてみればそれまで母が一手に任されて来た場所がぼつかりと空いたのだ。頭領を失った組は後継ぎ問題に揺れていたが当時七歳だった京太にその荷は重く、結局は祖父の辰真が頭領代行を務めることになったが、そんな京太でも何か親の代わりにできることはないかと探し回った結果であった。

「ごめんなさいね、扇空寺君。泊めてもらって、朝ごはんまでもらっちゃうなんて」

「構わねえよ、会長。それより、そっちのガキは大丈夫かよ」

見れば、朔羅は食卓に突っ伏して頭が痛いと言っていた。典型的な二日酔いであった。

「朔羅ちゃん、昨日ははっちゃけてたからね」

空は朔羅の背中を擦りながら水を飲ませている。相変わらず世話の焼ける奴だと肩を竦めながら、京太は朔羅に声を掛ける。

「今日はウチで休んでいきな。それで学校行つたって言い訳もできねえだろ」

「うん、そうするー……」

「んじゃあとつとと寝とけ。学校のこたあ頼むぜ、会長」

朔羅を居間から連れ出しながら、京太はなぎさへ朔羅の欠席の言い訳を任せた。彼女らは同じ寮で暮らしているため、本来なら保護者からの連絡が必要な欠席の届け出は彼女ら自身の申告で充分であった。その意図を汲んで、なぎさも京太と同じように肩を竦める。

「分かつてるわよ。……もう、これじゃあ私たちまで不良みたいだわ」

「うーん、でも京太君と仲良くしてる時点で穂叢先輩も立派に……」  
「立派に？」

「あ、いえ、何でもないです！ あは、あはは！」

京太が朔羅を寝かせて、空となぎさが朝食を終えてから三人は学校へ向かった。朔羅の世話は紗悠里に任せたので問題はないだろう。扇空寺の屋敷へ続く竹林の入口で、腰まで届く長い髪の下

を布で巻いて結ったという出で立ちをした少年が京太たちを待つていた。制服はブレザーで、学ランの京太とは違う学校の生徒であることは一目瞭然であった。彼は京太の姿を認めると、ザツ、と京太の前に立ち塞がる。

「よう、棗。わざわざ見送りについてツラじゃあねえな、そりゃあ」

「……聞きましたよ、若。今日、『鴉』の奴らを親父のところに連れてくそうですね」

「ああ。こいつらを学校まで送ってから行くつもりだぜ」

京太は背後の空となぎさを指しながら頷く。名を棗という、武藤の息子は京太を睨み付けながら更に言い募る。

「何で、何でなんですか！ 親父が……、幹部が一人半殺しにされたつてのに、そいつらをブツ殺さないつてのは筋がなっちゃいねえんじゃないですか！？ 例え若がケジメを付けてくれようが、俺は納得いきません！」

棗の怒声にしかし、京太はまず背後を見やった。怒気に気圧されている空を見て、京太は空となぎさに声を掛ける。

「空、会長。先に行つてな。俺はこいつと話を付けてから行くからよ」

「……分かつたわ。ほら、行くわよ、神崎さん」

空を連れて棗の脇を抜けて行くなぎさと棗の眼が合う。彼女らが通学路へ消えた後、棗はなぎさを見ていた視線を京太に戻す。

「一般人の姐さんを連れ込んだと思えば、今度は魔法使いと来ましたか。……まあ、そいつは今どうでもいいです。それで、若は奴らに詫びを入れさせれば本当に事が済むと思つてんですか？」

「……堅気のもんを殺すつてのは、仁義がなっちゃいねえぜ、棗。親父をやられたお前にしちゃあ俺のやり方は温くて納得いかねえだろうさ。だがお前はただ、自分の手でケジメが付けてえだけなんじやねえのか？」

京太の言葉に、棗はたじろぐ。凶星だったか。血の気が多いのは結構なことだが、今回ばかりは尚更抑えてもらわなければ困る。

「組としてのケジメは俺が付けた。申し開きの結果も、流石にこの件に関わった奴らをウチに置いてはおけねえってことで処分も決まった。人間様を殺さねえってのは、俺が代紋に誓った仁義の一つだ。俺の組に、ましてや俺の側近になろうって奴にそんなことをさせる訳にはいかねえぜ」

棗は先代の側近であった武藤の息子と言うこともあり、京太の側近になるべくして育てられている。そんな組員が京太の仁義を外れるような真似は絶対に許せない。

「でも、俺は……。俺はっ！」

棗は身を翻して駆け出した。あっという間に京太の前から姿を消してしまう。

「棗……。下手な真似はするんじゃないぞ」

もし棗が『鴉』のメンバーに手を掛ければ、それは彼がケジメを付けられる側になることを意味する。そこには義理人情など何もなく、ただ組として果たさねばならない掟が存在するだけだ。

京太は学校へ向かった。途中で先に行った空となぎさと合流し、二人を学校まで送り届ける。なぎさの目を盗んで武藤の家へ向かうとしたところで、ポケットの携帯電話が着信を告げるバイブを鳴らした。

画面は紗悠里からの着信を告げている。京太が何気なく電話を取ると、その瞬間に紗悠里の切羽詰まった声が耳元で響き渡った。

「若様、緊急事態です！ 『鴉』の、『鴉』の方々が……。殺されました……。！」

7 .

耳元で鳴り続けるコール音が止む兆しはない。

「チッ。轟棋、死ぬなよ……」

京太は携帯電話をポケットにしまい、足元に広がる惨状に視線を落とした。先日まで『鴉』のアジトであったそこは、今やそのメン

バーだった者たちの成れの果てが無惨に並ぶ地獄絵図と化していた。ただ一人、轟棋の姿だけがない。その轟棋もまるで連絡が付かず、既に別の場所で殺られてしまった可能性は否定できない。

現場には黒スーツに身を包んだ幹部たちが集まり、どこかしらへ連絡を取りながら一人ひとりの遺体を運び出す準備を進めていた。冷静に、淡々と動いているように見える彼らだが、腹の内は煮えくり返っているであろう。昨夜酒を呑み交わした家族が殺られたのだ。この始末を警察に任せようとする者はいまい。ケジメは、自分たちで付けなければならなかった。

京太はこの死屍累々の中に呆然と佇む棗の隣へ歩み寄る。この状況を発見し、報告したのは他ならぬ彼だと聞く。それ故に京太は彼から話を聞かなければならない。

「わ、若……」

「棗。お前」

だが京太が声を掛けた瞬間、棗は咳を切ったように首を横に振って訴え始めた。

「違う、俺じゃありません！俺が、こんな……。とにかく、俺じゃないんです！」

必死に声を荒げる棗の目は、この惨状にただひたすら訳が分からないという色を浮かべている。京太は錯乱状態にある棗の肩にそつと手を置く。

「落ち着きな、棗。誰も、お前が殺ったなんて思ってたねえよ」

「若……、ありがとうござ……。……。なんで俺なんかを信じてくれるんですか？」

京太の言葉に棗は我を取り戻したようだが、逆にそれが彼を困惑させた。棗からすれば、朝の一件から彼がこの事態を引き起こした犯人だと思われても仕方がないのに。何故京太は自分の言葉が無条件で信じてくれるのか。

「はっ、決まってるんだろ。組の頭を張るって奴が、下のもんを信じ

られずにその役目が務まるかよ。それにこんだけ血塗れの状況で、お前にもや返り血一つねえだろうが」

あ、と棗は自分の着衣を見る。朝、京太の前に立ったときと同じブレザーは清潔感に溢れていて返り血どころか争った形跡すら見られない。棗は自分の浅はかさには肩を落とす。京太は棗がどれだけ失礼な態度を取っても、彼から目を逸らしたりはせずしっかりと棗の思いを汲み取っていたのだ。

「俺は、幾ら頭に血が上ってたとはいえ若に　これから付いてくべき人になんてことを言っちゃったんだ……」

棗は紗悠里と同じ年で、京太としても幼い頃から共に育ってきた兄弟のような存在だ。彼の気持ちも痛みも、京太には自分のことのように想像できる。故に、それを京太が拭い去ってやることはできない。

「それはお前自身がケリを付けなきゃならねえ気持ちだ。俺がどうこう言ったところで、納得しきれるもんじゃあねえだろう。いいか、棗。決して仁義を見失うんじゃない。ケジメつてのは、自分の仁義を貫き通せる奴だけが付けるもんだぜ」

だから京太は棗が逃げるように京太の前から去って行ったとき、彼を追うような真似はしなかった。組の者を信じる。これも京太が代紋に誓った仁義の一つだ。あの時棗を追えば、それは彼を信じていないことになる。仁義を重んじる京太は棗が事を起こさないことを信じて待つことにしたのだ。自分の仁義を信じてケジメを付けることになれば、それはただそれだけの話だ。だが棗を追った結果にケジメを付けなければならなくなったら、京太にはそれを取り行つ資格などない。

「若……。そーいや若は、昔大切な人を……。あ、いや、すんません……」

「もう過ぎたこった、構わねえよ。それより棗、話しちゃくれねえか。お前がここに来た時のことをよ」

「はい。俺は『鴉』の連中が行きそーな場所を手当たり次第探して

ここまで来たんです。……とはいえ、俺が来た時にはもうこの有様で」

棗は申し訳なさそうに言ったが、京太は何か引つかかるものを感じていた。行きそうな場所。もし轟棋が最初からここにいなかったとすれば。例えば、轟棋は学校に行くつもりでもその気がないメンバーたちがここへ集まったなら。

京太は不動に、轟棋の学校を調べさせると伝えた。不動が携帯電話で連絡を取り、今も懸命に轟棋を搜索している組員たちへ指示を送る。

「行くぜ、棗。本当に俺たちがケジメを付けてやらなきゃならねえ野郎が、そこにいるはずだ」

「ウス！」

京太は連絡を待たず、不動の運転する車に棗を伴って乗り込む。目的地へ向かって走り出す車の中、不動の携帯電話が着信音を鳴らす。京太はそれを不動から受け取り、組員からの報告を受ける。幾度か言葉を交わして電話を切った京太は、真っ直ぐに前を見つめていた。

「当たり前だぜ。不動、飛ばしてくれ」

不動は轟棋の通う高校へと大きくステアリングを切った。

8 .

轟棋の通う高校は不良の巣窟として恐れられる学校で、生徒の殆どが何らかの不良グループに属しているという無法地帯である。中でも『鴉』は現在最も大きな勢力を誇るグループであったため、その壊滅は大きなニュースになっているだろう。

京太は車から降り、校門から校舎を見上げた。窓ガラスという窓ガラスは全て割られ、時計も動いていない。外観からしてまるで廃墟のようなここは一体、誰の居場所だというのか。

「轟棋がここにいることに違いはねえな？」

京太は轟棋を発見したと報告を入れた組員に問う。

「ウス。ただ、中ではどうやら喧嘩がおっぱじまっているようです。お気を付けを」

頷き、京太は校門を潜り昇降口に入る。彼の後には棗と不動が続く。機能を全く果たしていない下駄箱を抜け、一階から二階へ続く階段の前で立ち止まる。

轟棋はどこにいるだろうか。喧嘩の最中なら激しい物音がするはずだが、今はしんと静まり返っている。これでは虱潰しに探し回るしかない。京太は大きく息を吸い込んだ。

「轟棋！ どこにいやがる！！」

京太の張り上げた声に反応してか、どこかでガラスの割れる音がした。やや小さめに聞こえた音は恐らく遠くで鳴ったものだろう。

「上だな……！」

京太たちは階段を駆け上がる。校舎は四階立てで、一階ではない以上三人で手分けして探すのも手ではある。

「四階か三階だ。不動は三階、俺と棗で四階に上がる！」

京太はそれだけを伝えて、階段を昇って行く。不動と三階で分かれ、四階へ。

「轟棋！」

当たりだ。そこには廊下の奥で壁に背を預けて腰を落とした轟棋と、彼の前に立ちはだかるような体勢をしたヘッドバンドを着けた少年がいた。彼の位置は丁度、今階段を上がって来たばかりの京太たちと轟棋の間になる。彼は轟棋を見やっていたが京太の声に反応して振り返る。

「あん？ ほらよお、吉田。お前が音鳴らすから余計なのが来ちまつたじゃねえか、よっ！」

ヘッドバンドの少年は轟棋へ向き直り、彼の腹を力一杯蹴り飛ばす。「ぐおっ……！」既に傷だらけの轟棋にはもう反撃する気力はないのだろう。血で真っ赤に染めた右手を腹に当ててその場に蹲る。

「山……下……」

轟棋は蹴られた腹部を抑えながら、絞り出すように相棒の名を呼ぶ。このヘッドバンドの少年こそ、轟棋の側近として彼が最も信頼する男、山下健司であった。

京太はゆっくりと歩き出し、轟棋の元へ向かう。山下は京太をじっと睨み付けていたが、そんなものには目もくれず、轟棋の前にしやがみ込む。

「よう轟棋。つたく、ざまあねえな」

京太は轟棋の右手首を掴んだ。血塗れの手にはガラス片が刺さっている。

「ガラスブチ割る余裕があんなら、こいつをブン殴ってやりやあよかったんだよお前は。ま、お陰でここまで来れたがな」

「ちよつとあんた、俺をガン無視ってのは気に入らねえなあおいッ

「!？」

山下は京太に向けて蹴りを繰り返す。だがその足を、京太は左腕で受け止めた。

「俺は今、轟棋と話してんだ。……口を挟むんじゃねえぞ、三下ア!!」

足を払い除け、京太は立ち上がって山下の顔面に渾身の左ストレートを叩き込んだ。これに山下はたまらずぶっ飛ばされ、教室の中に倒れ込む。

「さて、洗いざらい吐いてもらっぜ。轟棋の相棒面して、裏で何をしてやがったのかをよ」

京太は指の関節を鳴らしながら、起き上がるようにしている山下の前に立ち塞がる。

「……ど、どういうことだ、京太の兄貴……!？」

「轟棋。こいつが武藤をやった奴らの手を引いてたんだ。俺がケジメを付けに行っただけに姿をくらまして、お前を殺るために出て来やがった」

京太の言葉を聞いて、轟棋と棗は同時に息を呑んだ。しかし、愕然とする轟棋に対し棗は怒りに打ち震えていた。拳を握りしめ、教



室に掛け込む。

「てめえ!!!」

だが、行き勇む棗を京太は腕を広げて制した。

「待ちな、棗。まだ話は終わっちゃいねえぜ。こいつだけは、ただブン殴つてケジメが付けられるような奴じゃねえ」

京太は冷ややかな目で山下を見下ろしながら、彼の元へゆっくりと歩み寄る。

「『鴉』の連中を殺したのは、てめえか？」

「もちろんさあ。悪いなあ、吉田。お前の仲間、俺が全員ぶつ殺してやったよお」

「……な、に……」

やはり、アジトの惨状を作り上げたのは山下だった。けらけらと笑い始める彼にはもう、正気があるとは到底思えない。

「……嘘、だろ。山下……？」

「嘘じゃあねえよ。最初つからてめえを使って、扇空寺組を潰すつもりだったんだからよお。まだまだ勝てるとは思ってなかったが、用済みになったんでぶつけてみりゃあ、結果は案の定、失敗だ。綺麗さっぱり消させてもらったぜえ。どこにも行き場のねえゴミどもにゃあ、似合いの最期だつ　!?!」

山下が最後まで言い切ることはなかった。嘲笑を浮かべる彼の顎を、京太が思い切り蹴飛ばしていたからだ。山下の身体は窓際の壁まで床を滑って止まった。

「余計なことを喋るんじゃねえよ。大人しくこっちの質問に答えな。でねえと、次はねえぞ」

山下はしかし、京太の凄みに意を介した様子もなくゆらりと立ち上がる。顎にあれだけの衝撃を加えれば普通は脳震盪でまともに動けないはずだが、彼はふらつきながらも立った。なにか、薬でもやっているようにしか思えない挙動だ。

山下はくつくと笑いながら、

「さあて、吉田を殺す前にあんたが来ちまったのはちよつとした誤

算だったが、こつからが本番だぜえ」

ふっ、と。山下は気を失ってその場に倒れた。だがその身体から、彼とは別のおぞましい何かが這い出てくる。それはまるで魂が抜けるといったような感じにぬらりと、山下の身体から離れて立ち上がった。

「どうも。初めまして、扇空寺京太。俺の名は黄泉。君たちの敵である、魔と呼ばれる存在だ」

その、角を生やした人型の何かは山下よりも一回り大きい体軀を持っていた。落ち着き払った口調で、ゆっくりと口を開く様は、とても山下のような不良然とした雰囲気は感じられない。それもそのはずだ。黄泉と名乗る奴は、山下の身体に乗り移って彼を意のままに操っていたに過ぎない。

轟棋は未知の存在に絶句し、棗は腰を落として戦闘態勢を取った。「はっ、どうにも様子が変だと思ってみりゃあ、やっぱりてめえら魔の仕業か」

京太は拳を構える。しかし山下の身体が奴の足元にある以上、どう扱うかは分からない。こちらからは手が出せない状況だった。

「その通り。それで君は、俺に何を訊きたい？俺の目的はさつきも言った通り、君たち扇空寺組を潰すことだ」

「ああ、そいつあよく分かったぜ。魔であるお前らは、俺たち討魔の存在が目障りで仕方ねえだろうからな。それより何でてめえは、山下の身体に乗り移って、轟棋たちを使おうとしたんだ？」

「それは君がよく分かつているはずだ。何故なら俺たち魔は、君の祖父である扇空寺辰真が、君の祖母であるイリス・ウィザーズによって人柱となった時から力を弱められていたのだからな。それで俺は人間の身体に存在を隠しながら、扇空寺辰真を殺すべく準備を進めていたのだ。最初は『黄泉』というグループを作り、それを手駒にしようとしたが、俺の存在が目立ってしまうと元も子もない。しかし、その吉田轟棋という人間が現れたとき、俺はこいつを使うことに決めた。こいつを頭に、あくまで人間として強大なグループを

作り上げて扇空寺組に対抗しようとしたのだ。だが一年前、扇空寺辰真が死んでその必要もなくなった。俺たち魔の力は確実に戻りつつある。だからこそ、『鴉』の連中には囹役をやってもらったのだ。新しく扇空寺組の頭となった、君の力を計るためにな」

人間社会に溶け込み、存在を隠匿する魔は少なくない。人間に乗り移り、その人格をそのまま利用することができる奴らが人間の世に適應するのは容易いのだ。山下は社会的に見ればはぐれ者だったが、魔からしてみれば人間として生活できればそれだけで目的は果たせるのだから大差はない。

「だが俺は、夜にならなければ本来の力を発揮できない。それは君も同じだろう？」

「ご名答だ。俺も夜にならなきゃ普通の人間と何も変わらねえ」

「ふ、ならばここはお互いに身を引こうではないか。俺は夜、この場所待つ。決闘だよ、鬼としての君とね」

京太は黄泉の言葉に頷く。

「不動、奴さんのお帰りだ。銃を下ろせ」

轟棋と棗ははっとして教室のもう一つの入口を見やった。そこには不動が全く音もなく現れており、山下に向けて銃を構えていた。

「……ウス」

不動は京太の命令に従い銃を仕舞う。それを確認すると、黄泉は窓から身を投げ出した。その時点でもう、京太たちには目の届かないどこかへ消えてしまっただろう。京太は身を翻して教室を後にする。山下の身体は不動が抱え、轟棋は棗が支えた。棗は一瞬轟棋に手を貸すのを躊躇ったが、しかし一人で歩けそうにない彼を放っておけずに肩を貸した。

「……すまねえ。そういやあんた、昨日は見なかったが」

「別に。ただ、野暮用があっただんだ」

それきり言葉は続かず、棗は京太の背中をじっと見ていた。階段を下り、昇降口までやってきたところで、棗は京太に声を掛ける。

「若、あの野郎本当に行かせてよかったんですか？ あいつが……、

あいつが今回の元凶なんですよ!？」

棗の見える限り、京太は黄泉と相對しているときはどこまでも冷静沈着だった。この判断も最善と言っている。だがそれ以上に、あの場には貫かねばならない仁義があつたのではないか。

だが棗の言葉を受け、京太は下駄箱に思い切り裏拳をブチ込んだ。「……今夜は決闘だ。あの野郎、絶対に生かしちゃおかねえぞ」

これは、京太が必死で抑え込んでいた怒りの片鱗だった。あれだけ仁義のなっていない奴の筋書き通りに事を運ばれて、それを感じないはずがない。ケジメは今夜、確実に付ける。

/ 4

自室のベッドに寝転がり、空は京太からのメールを再確認した。

すまねえ、野暮用が出来た。今日はフケるぜ。

このメール以降、彼からの連絡はない。空は携帯電話を置き、目を閉じて身体力を抜いた。

空には京太が黄泉と名乗る魔と相對しているなどとは知る由もないが、組の用事であろうということは想像に難くない。昔から京太は、組の面倒に空たちが関わらなくて済むようにしてくれていた。

昔から居場所のない辛さを知っている京太は、自分の元集まる者の居場所を作りながらも、彼女らを組に関わらせる訳にはいかないと考えている。京太にとって彼女らは組員たちとは別の意味の家族であり、堅気の道から踏み外させることは仁義に反するのだ。

だからこそ組員は皆、空たちを手厚く迎え入れてくれる。最初はそれでも恐ろしくてたまらなかったが、次第に慣れて行く内に義理人情に溢れた良い人たちがばかりだということが分かって来た。最も、空は彼らの極道者としての顔を知らないのだが。

空はベッドの上部に隣接するように設置した棚の上から、写真立てを手取る。写っているのは中学生の頃の空たちだ。

京太との出会いはまだ小学生にもなる前、同じ保育園に預けられ

ていた縁でのことだ。小学校は別になつたが、中学校にて再会した。しかし京太は空のことなど全く覚えておらず、愕然としてしまった。それどころか7歳以前の記憶が全くないと聞いたときにはどんな顔をしていいか分からなくなってしまうたが。

思えば、初めて出会ったときから彼のことが好きだったのだろう。高校2年生の今、ようやく成就した恋心を届けてくれたのは売れ残りのアポロチヨコというあまり人に言えない話だったが、それでも京太は空の気持ちを受け入れてくれた。

空は写真の中でただ一人、今はいない少女へ語りかけるように呟く。

「……これでいいんだよね、鈴詠」

9 .

轟棋を床に着かせ、京太はその脇に腰を下ろした。外は既に夕暮れの陽も落ちかけ、宵を迎えようとしている。

「京太の兄貴、山下は……？」

「あいつは別の部屋に寝かせてある。安心しな、死んじゃあいなえよ」

京太はふっ、と笑ってみせる。山下は全くと言っていいほど命に別状はない。強いて上げるとするなら、京太が殴る蹴るをした分の怪我があるくらいだ。

京太の様子に本当に何ともないことを悟り、轟棋は息を吐く。

「そう、ですか。……残つたのは、本当にあいつだけなんですわ」  
彼が失ったものは非常に多い。だがその事実を彼は口で聞かされただけだ。実際に目の当たりにした訳ではない以上、実感は薄いだろつ。

「『鴉』の連中をやつたのは黄泉だ。山下じゃねえ。だが、あいつも黄泉に操られてる間の記憶は残ってるだろうな。それとどう付き合ってたかは、お前らで決めるしかねえ」

「はい……」

轟棋は頂垂れながらも、確かに頷いた。

「その、黄泉つて野郎は何なんです？」

「俺たちは奴みたいないな存在を魔と呼んでる。この世の裏側に潜む化け物どもだ。俺たち扇空寺組は表向きには極道集団を名乗ってるが、実際には討魔を専門にやってる。討魔つてのは俺たちの言い方で退魔みてえなもんさ。一口に魔と言っても、そんなには色んな種類がいてな。奴みてえに人間らしい理性を持った奴もいれば、本能に突き動かされるだけのただの化け物だっている。奴は理性だけじゃなく、名前まで持った手練だ。魔つてのはどいつもこいつもとんでもねえ力を持った化け物揃いだ、しっかり自分を持った奴ほどその力を使いこなせるんだ」

京太は立ち上がり、襖を開けた。

「こつからは、討魔を生業にする奴の時間だ。お前はゆっくり寝とけ」

「京太の兄貴は、確かに鬼みたいに強え。でも、あんな化け物に本当に勝てるんですか……？」

「……俺のご先祖様つてのは真正正銘の鬼だよ。それが一体何をトチ狂つちまったのか、人間の女に惚れたんだとよ。鬼は子を成してその血を脈々と受け継がせていった。心配要らねえよ。俺は本当に鬼なんだぜ？」

京太はそれだけを言い残し、部屋を後にした。すると廊下には、恐ろしく真面目な形相をした朔羅が待っていた。

「よう、今日はよく寝れたか？」

京太は朔羅とは対照的に、微笑みながら軽い口調で訊ねる。朔羅は頷いた。

「うん。ありがとね、京太君。紗悠里さんが付いてくれたから、もう大丈夫だよ」

この様子なら、もう完全に回復したようだ。しかし朔羅はその喜びを表すためにいつものような無邪気な笑みを見せたりはしない。

朔羅は真剣な面持ちで京太に訴える。

「京太君、私も連れてって。私だつてちゃんと戦えるよ?」

話を聞いていたか。京太は口元を引き締め、朔羅を睨むように見つめる。彼女は本気だろう。純粹無垢な彼女は、自分がするべきことを見失わない。彼女を見てみると、僅かに残っている京太の祖母の記憶が蘇って来る。

京太の祖母、イリス・ウィザーズは魔法使いと呼ばれる存在で、現在はどこかへ隠居してしまい行方知れずだ。彼女のことを京太は殆ど覚えていないが、艶やかな長い金色の髪と、片言の日本語で残して行った言葉だけは記憶に刻まれている。

魔法使いにとつて大切なのは、自分で決めたことを必ずやり遂げるということです。

「朔羅、気持ちは有り難えが今日は大人しく家へ帰りな。あんまり帰りが遅えと、会長や蘭姉さんが煩いぜ?」

「うぐつ……、で、でも!」

「お前を組の問題に関わらせる訳にはいかねえ。堅気のもんに自分の厄介事を手伝わせるなんざ、仁義がなっちゃいねえにも程があるぜ。……頼む、朔羅」

真つ直ぐに、互いの視線が交錯する。

しばらくの沈黙の後、朔羅は溜め息混じりにはにかんだ。

「分かったよ、今日は帰るね。でも無茶しないでねっ! 空ちゃんを泣かせたら、だめだよ」

「ああ。任せときな」

京太は朔羅の脇を抜け、廊下の奥へと歩いて行く。長い廊下を抜けると本家と道場を結ぶ渡り廊下に出る。京太は道場へと進み、通口扉を開けた。正門は庭に繋がっており、そのまま屋敷の外へ向かうことができる。

この道場で、京太は祖父によって鍛え上げられた。今となっては人間の身でも鬼と呼ばれ恐れられるほどの腕を持つまでに至ったのだ。

道場の奥、床の間には一着の着物と刀が飾られてあった。京太はそこへ歩み寄る。

「力を借りるぜ、じいちゃん」

京太はゆっくりと着替え始めた。赤みがかった黒という色に染め上げられた着物に袖を通す。元は白かったというこれを染め上げたのは魔どもの返り血だ。それは奴らに畏怖を与える最上の染料として使われ、扇空寺の鬼たちが討ち入りの際に着用していた。故にこれを、鬼装束と呼ぶ。

鬼装束の帯を締め、刀を取る。京太の背丈ほどもあるうというこの大太刀は、銘を『龍伽』という。この辺りの地名でもある『龍伽』とは、かつて守り神として存在した龍の御伽噺から来ている。扇空寺家に代々伝わる宝刀であるところのこの刀は、その守り神である龍の具現として打たれたものだと言われている。

着替えを終え、通用門ではなく正門を開けて京太は道場を後にする。外には石畳を挟むようにして幹部たちが待機していた。その先頭に立つのは、京太の側近である紗悠里であった。

「お待ちしておりました、若様」

紗悠里が深々と頭を下げると、幹部たちもそれに倣う。彼ら全員に備わった、魔を討つという覚悟を確かに感じ取り、京太は口を開いた。

「さて、今夜は久方振りの討ち入りだ。遠慮は要らねえ、魔的な奴らは片っ端からたたっ斬れ。先々代、扇空寺辰真が亡くなって、奴らは俺たちを舐め切ってやがる。俺たち討魔の存在がどれほど恐ろしいか、思い出させてやれ！」

夜は更け、月明かりが照らす世界の中を黒づくめの集団が闊歩していた。その足取りに迷いはまるで感じられない。ひっそりと静まり返ったベッドタウンの道々を従容として歩み続ける。



彼らの瞳には静かな闘志が宿り、更にその奥には研ぎ澄まされた殺意があつた。彼ら扇空寺組の意識は今、仁義なき敵を討つという共通のものの元にまとめられていた。表社会からは外れてしまった荒くれ者の集団はしかし、仁義と代紋の元に集つたプロフェッショナルたちだ。組として、頭の後に続くことに異存のある者はいない。たつた十七歳の少年の背中に付いて行く。それが、彼らの成すと決めた仁義だ。

行脚の先頭に立つ京太は、その背に彼らの厚い忠義を感じていた。この若輩者に付いて来るといふなら、俺はお前らの先頭に行くことでそれに応えよう。物言わず前に進み続けることが、京太から組員たちへの信頼の証だ。振り向きなどしない。背中には既に、彼らに預けたのだから。

組員たちはみな、京太の祖父や父の代から扇空寺組に所属している者たちばかりだ。彼らが一生を共にすると決めた総大将はとうに亡い。世襲により後を継いだに過ぎない京太にそれでも彼らは付いて行くのは、京太が先代と変わらぬ仁義を受け継いだ人物である何よりの証拠だろう。

やがて彼らは、黄泉が待つ学校の校庭へとやって来た。黄泉も京太と同じく、多数の部下を従えて校庭の中央に立っている。

「待たせちまつたな、黄泉」

「いや。鬼としての君を殺せるのなら、これくらい大した問題ではない」

黄泉の身体から迸る力は、昼の時とは比べ物にならない。圧倒的なほどの存在感が彼にはあつた。

「なるほどな。『鴉』の連中を殺つたのは、力を得るためでもあつたつて訳か。てめえの力の本質は、その名の通りの『黄泉之國』。死んだ人間の魂を取り込んで力にするつてところか」

普通、魔とは同じ魔を喰つて力を強める。人間を喰つこともあるが、それは力を得るといふよりは彼らの嗜好に過ぎない。だがこの黄泉という名の魔は、人の魂を喰らつて力を得ることができる。彼

の身体はまさしく、『黄泉之國』という概念の体現であった。

「その通りだ。だがやり過ぎれば君のような存在を呼び寄せる羽目になる上、一年前までは人柱の力で効力も薄められていたからな。しかし今、全ての力を解放した俺に、君のような若造が敵うかな！？」

黄泉の両目が妖しく光る。彼の足もとの地面が揺らぎ、土が盛り上がる。黄泉は土を叩くように腕を埋め、その中から一振りの剣を抜き取った。

「全員、かかれ！」

「おおっ！！」

黄泉の号令が、開戦の幕を開けた。黄泉の部下たちが一斉に扇空寺組へと津波のように押し寄せる。これに、幹部たちはそれぞれの獲物を手に応戦する。

「お前ら、若の道を塞ぐんじゃねえぞ！ 紗悠里と棗は若のお傍から離れるなよ！」

組員たちに発破をかける不動は、自身は銃を用いて援護に回っている。本来ならば彼の持ち味は素手での接近戦にあったが、今は状況を把握するために距離を取って戦える獲物を選んでいった。

始まった戦いの中、京太の元にも黄泉の部下が襲いかかる。だが、奴らは京太が手を下さずともその場に倒れ伏した。刀を手にする紗悠里と、槍を手にする棗が京太の前に立つ。

「若様には、指一本触れさせません！」

「雑魚の相手は俺たちがやります、若！」

紗悠里と棗はすぐさま京太の背後に回った。周囲は依然多くの魔に囲まれているが京太は彼女らの存在により、黄泉との対峙に集中できる。

「来いよ、それがてめえの自慢の獲物だろ？」

「無論だ！」

黄泉は京太に斬りかかる。彼の獲物は土で出来ているために切れ味こそないものの、人間程度ならば簡単に殺せるだけの硬度と殺傷

力を持つ。『鴉』のメンバー殺害に用いられたのもこの剣だ。だが、今の京太はそんな代物ではものともしない。

京太は鞘に収めたままの『龍伽』で黄泉の剣を受け止めた。

「……どうした。それで終わりか？」

京太の黒かった瞳が燃える炎のように、流れる鮮血のように赤く染まっている。しかしその中心にある瞳孔は黒いままで、真っ直ぐに黄泉を睨み付けていた。その視線に激昂した黄泉が常人では到底反応できない速さで京太を幾度も斬り付ける。しかし京太はその悉くを『龍伽』で打ち払ってしまった。

「現れたか……！ 扇空寺の鬼！！」

「ご名答。お望み通り見せてやるぜ、鬼の力をよ。気を付けな。この力、強過ぎちまって加減ができねえからよ」

京太の迫力に黄泉は畏れを成して飛び退いた。それはもう、昼間にみた人間とは別の生き物だった。人間とは遥かに違う次元に存在する生物、鬼だ。今や京太の肉体は人間とは別の物に組み換えられている。

夜になると京太の中に眠る鬼の血が活性化を始める。彼が夜通し酒を飲み続けられるのもこれが要因だ。鬼の力を目覚めさせなくても、活性化している血が薬や毒などの有害な物質を受け付けなくなるためだった。魔という最大の敵に対する抵抗力の余波である。活性化した力が完全に目覚めると、京太は鬼と言う存在に作り変えられる。未だ自由に力を操ることはできないが、魔との戦闘態勢ともなれば確実に力は発現する。

「正直言つて俺は、この力が怖い。人じゃ在り得ない力に引き込まれて、俺という存在が人間から遠ざかって行く感覚が堪らなく厭なんだ。だがそれでも、俺は仁義のなっちゃんない魔どもをこの力で討つと誓っている。鬼龍の代紋にな」

『龍伽』を、腰に戻す。龍をまといし鬼。代紋を体現した存在が今、ここにあった。鬼龍とは討魔を専門とする彼ら扇空寺組の、その象徴たる存在なのだ。

「扇空寺組頭領、扇空寺京太。推して参る」

京太はゆらりと、黄泉の元へと歩を進め始めた。歩きながら、彼はまるで世間話でもするような雰囲気口を開く。

「てめえの一族、黄泉一派の話は聞き覚えがあるぜ。でけえ力を持つ魔の集団だったが、俺のじいちゃんによつて壊滅させられたつてな。てめえが俺たち扇空寺組を討ちたいつてのは、ご先祖様たちの仇討ちなのか？」

京太の問いに、しかし黄泉は嘲りのような笑みを浮かべる。

「ふん、確かに俺の一族は君の祖父、扇空寺辰真によつて滅ぼされたがそんなものは知ったことか！ 鬼である君を倒したと知れば、全ての魔は俺の配下に下るだろう。黄泉一派の末裔である俺が、魔どもの総大将になるのだ！」

高笑いとともに、彼は表情を狂気に歪めて宣言した。そこにはただ、彼の欲望が映るだけだった。義理も人情も、彼からは決して感じ取れはしない。

「は、そいつあ結構。なら、てめえを斬るのに情けも容赦も要らねえつてことだ」

京太は『龍伽』を抜き放つ。銀色に煌めく刀身が、月明かりを受けてその輝きをより研ぎ澄ませる。

京太が更に一步を踏み込んだ、その瞬間にはもう、刃は黄泉の首筋を捕えていた。

「往生しな」

黄泉の首が刎ねられ、宙を舞う。彼の身体はどさりという音を立てて地面に倒れ伏した。その身体から、妖しく揺らめく靄状の何かが生きてくる。どこか黄泉の姿を模っているようにも見えた。

それこそが黄泉の魂なのか。京太はそれを無造作に掴み取り、『龍伽』によつて貫いた。刃を振り払えば、黄泉の魂は霧散し消えて行く。京太の目には、奴が取り込んできた人間の魂たちが解放されるのが見えた。

奴もああは言っていたが、もしかすれば最初の動機は仇討ちであ

ったかも知れない。それが年月が経つにつれ魔としての本能が理性を脅かして行き、目的を見失っただけであつた可能性も否定できない。力を誇示するためだと語っていたが、鬼としての京太と戦うことに拘つた黄泉には少なくともそれくらいの仁義があつたのかも知れない。

だがどちらにせよ、もう京太には興味のない話であつた。

校舎の屋上の端で、グラウンドの様子を俯瞰する少年の姿があった。フェンスのない屋上は、ふと足を踏み外せば簡単に転落してしまふ危険性があったが、彼はそんなものに怖れを抱く様子もない。手擦りの上に登って冷やかに眼下を見つめている。

名を天苗双刃という彼が見ているのは、黄泉と言う名の魔が鬼の前に成す術なく葬られる光景であった。全く以ってこの世のものは思えない異様な光景だったが、双刃にとっては別段恐怖するほどのものでもない。

ふと、双刃の背後で音が鳴った。それが銃の激鉄を起こす音だと気付きながら、しかし彼は驚く様子もなくゆっくりと振り返る。

そこには同じ銃を一丁ずつ構える少年と少女の姿があった。二人の銃口は寸分違わず双刃を狙っていた。

「ああ、『螺旋の環』。月島水輝と穂叢なぎさ……だったか。骨董屋の使い走りが何か用？」

自分に向けられた銃口を直視して尚、双刃は皮肉交じりに笑みを浮かべて見せる。

彼が発した質問に答えたのは月島水輝という少年の方であった。

金髪碧眼という日本人離れた眉目秀麗な容姿を持つ水輝は、穏やかな微笑みを持って双刃に相対していた。

「いつものことですよ。それより、あなたの方こそこんなところで高みの見物をしていてもよろしいのですか？ 天苗双刃君。次

に黄泉となるべきあなたが」

水輝の問いに、双刃はもう一度グラウンドに視線を戻す。

「……親父に関しては残念だったと思ってたところでき。いい人だったんだが。ただ、復讐に取り憑かれ過ぎて、成れの果てがああなのザ

マだ」

眼下では、彼の父であったものが霞のように霞んで消えて行く。あつけないものだ。かつて魔と言う存在の中でも栄華を極めた一族の忘れ形見は、天敵である鬼に一撃で葬り去られてしまった。これが現実だ。復讐などという目的のために生きて来た者の末路など、こうして無惨に散って行く他あるまい。

「生憎、親父の後を継ぐ気はないよ。俺は知つての通り日和見主義でね。復讐なんて物騒なもんに取り憑かれるのはまっぴら御免だ。俺としては、人間としての暮らしは気に入っているから手放したくないんだが」

「ふざけないで。その身体は人間としての天苗双刃の物よ。借り物の身体で、人間として生きたいなんてよく言えたものね」

双刃の言葉に意を唱えたのはなぎさであった。隣に立つ水輝とは対照的に、一切の感情を排した瞳を双刃に向けていた。なぎさの持つ銃から音を立ててスパークが弾ける。彼女の操る雷の魔法は既に臨戦態勢であった。

「ふざけてなんているものかよ、ライトニングボルト。こうして人の身体を借り受けでもしなきゃ、俺たち魔に人間としての生なんて有り得ない。大人しくしてるって言ってるんだ、そっちも手を引いてくれると助かるんだがな」

しかし二人の銃撃手はその銃口を決して逸らしたりはしない。ならば、手段は一つだ。

「……どうしてもやるってことなら、こっちにも考えがある」

溜め息混じりに呟くと、双刃は深く呼吸を変化させる。吸って、吐いての感覚を長くしていき、大きく息を吸った瞬間に何を考えたか屋上から飛び降りた。水輝となぎさが驚きを露わにグラウンドを覗き込むと、双刃は既に壁を蹴って大きく跳躍していた。彼はもうグラウンドなど飛び越えて、閑散とした道を駆け抜けている最中であつた。呼吸をコントロールすることで身体能力を飛躍的に高めていたのだ。

双刃からすれば逃げる以外に選択肢がない。銃や雷など、あの二人の戦い方はかなり目立つ。屋上での戦いに気付いた扇空寺組が加勢に現れれば双刃に勝ち目がないのは明白であった。

「それに、どうせやるならサシで、気が済むまで殺し合いたいよなあ、扇空寺の鬼　！」

人間として生きたいと願う魔は、夜の闇の中に消えて行った。

1 .

京太の家ほどではないにしろ、立派な門構えをした和風建築の屋敷が轟棋と山下の前に建っていた。表札には武藤とある。

京太と黄泉の決闘から一夜が明け、京太は轟棋と山下を連れ立って武藤邸を訪れていた。

「何してんだお前ら。さつさと入るぞ」

京太はインターホンを鳴らし、受話器を取った女性といくつか言葉交わしてから門扉を開いた。なにやら畏まっている様子の不良たちを置いて行かんばかりの勢いでさつさと庭を横切り玄関を開けてしまう。

「いらつしやいませ。お待ちしておりました、若様」

玄関で彼らを出迎えたのは赤い和服に身を包んだ女性だった。凛としたまるで華道の家元のような彼女こそ、先程インターホンで京太と会話した女性であり、武藤の妻であった。

「おう。早速で悪いが、武藤のところまで案内してくれねえか奥さん」

武藤の妻により、京太たちは家の奥へと案内されて行く。フロアリングの行き渡った廊下の先には、障子の閉じられた部屋があった。「こちらです」

「よう、武藤。開けてもいいかい？」

「はい。構いませんぜ、若」

中からの返事を受け、武藤の妻が障子を開ける。和室の中央に敷



かれた布団の中には精悍な顔付きの男が横たわっていた。朗らかで素朴な印象を受ける顔立ちだが、彫り込むように残された数々の傷痕が彼が決して一般人ではないことを表している。

「こんな不甲斐ねえ格好で申し訳ねえ、若」

「いや、構わねえ。それより、調子はどうだ？」

「まあ、ぼちぼちですよ。動けやしません、大人しくしてりやあ特に痛くもありませんぜ」

「そいつあ結構。……で、だ。今日はこいつらから話がある」

京太は自分の背後に控える轟棋と山下を顎で指し示した。武藤は彼らが何者が既に気付いていたようで、途端に鋭い眼光を放って二人を見やる。彼らはその視線に射竦められながらも前に出る。

口を開いたのは轟棋だ。

「……今回、俺の仲間がやったこととはいえ、取り返しの付かないご迷惑をお掛けしました。責任は俺の監督不行き届きにあります。大変、申し訳ございませんでした！」

轟棋と山下は揃って頭を下げた。幾ばくかの沈黙の後、武藤がゆつくりと口を開く。

「本当ならブチ殺してやりてえところだが、生憎この身体じゃあどつにもならねえ。それに、ケジメは若が付けてくれた。仲間の連中のことも聞いたさ。だからもう、二度とやるんじゃねえぞ」

武藤の言葉に轟棋は顔を上げ、感極まったような表情でもう一度更に深く頭を下げた。

これで円満とは言い切れないまでも今回の一件については事が収まったと、京太だけはそう思っていなかった。

「で、お前はどうかんだ、棗？」

京太は部屋の外に視線を向ける。障子の陰から棗がスツと身を乗り出す。彼は無然とした表情で轟棋と山下を見下ろしていた。

「あ、あんた、どうしてここに……」

轟棋は昨日肩を貸してくれた相手が現れたことに驚いたが、棗は尚も轟棋らに底知れない視線を向ける。

やがて彼は大きく息を吐いた。

「もういい」

「は？」

「もういいつつつてんだよ。若も親父もケジメを付けてくれた。これ以上俺がどうこうするってのは仁義がなつちやいねえからな。だからこれから、お前らのことは俺が見る。もしこれからお前らが若に迷惑を掛けるようなことがあったら、俺がケジメを付けてやる。いいいな？」

ふん、とそつぽを向いて棗は家の奥へ引つ込んで行った。気持ちに整理が付いた訳ではないだろう。しかも全ては黄泉という魔が仕組んだ事件で、轟棋たちですらただ利用されただけだ。やり切れなさは大いに膨らんだであろうが、黄泉を倒したことで幾分かは落ち着いたのであるかもしれない。

なににせよ、しつかりと考え抜いた結論であるようだ。

啞然としている轟棋と山下の横で、余程ツボにハマったのか京太が腹を抱えて笑い始めた。

「なんとか納得する形を見つけたみてえだな。なるほど、そいつあ結構。……よし、決めたぜ武藤。棗を今日から俺の正式な側近にする。荷物をまとめさせときな」

武藤の家を後にし、京太は轟棋たちと別れた。そのままの足取りで堂々と学校へ向かう。時刻は既に十一時を回っており、完全な遅刻であったが特に気にする素振りはない。京太は生徒会のブラックリストに載るほどの不良生徒のだが、実際に行っている不良行為は遅刻、無断欠席、授業怠業くらいしかないので、疎まれ注意を受けはするものの特別罰則を喰らいはしない。

扇空寺京太と言えばこの辺りの学校では有名だ。中学時代に暴走族を全滅させて舎弟を作ったあの、ヤクザと関わりがあつてこの辺

りを自分のシマにしているのだといった、尾ひれが付きに付きまわった噂がそこら中に溢れているのだ。お陰様で通っている学校では敬遠され、大概の不良は顔を見た途端に逃げ出す始末だ。

しかし京太自身はそれでもいいと思っっている。関わってしまった者の面倒は最後まで見通すつもりだが、最初から何の関わりもなければそれに越したことはない。平々凡々とした世界で幸せに暮らせるならその方が絶対にいいというのが京太の考えだ。例え根も葉もない噂でも、こちら側に迷い込む人間が減るなら上等だ。堅気の者を組に関わらせたくない京太らしい考えと言えた。

学校に着くと、京太は教室へは向かわず屋上に上った。授業を受ける気はない。屋上には誰もいなかった。床に寝転がり、イヤホンを付ける。このイヤホンは機械いじりが得意な空が改造したもので、周囲の音を殆どシャットアウトできる優れ物だ。ロックを流しながら文庫本を開いた。

一人でいるとき、京太はこうして時間を過ごす。暖かな春の陽気が彼を照らす、決して眠りに誘われはしない。夜に眠れないのは鬼の力が活性化するためであり、彼の一族に共通するものだ。だが朝や昼にその反動が来ない彼の不眠症にはもつと別の理由があった。と、京太の上に影が差した。本から目を外して見上げると、笑顔で手を振る空の姿があった。何か言っているようだが、イヤホンのお陰で何も聞こえない。空もそれを得心したのか、しゃがみ込んで「えいつ」と京太の耳からイヤホンを抜き取った。

「おっはよー、京太君」

「ああ。ま、もう昼だけど、よー」

京太の視線がある一点で釘付けになる。空は京太の枕元にしゃがんでいる。膝を立てているこの体勢で、それを隠す物は何も無い。

「お、おい、空……」

「へ？」

「……す、スカートんなか、見えてんぞ」

「きゃっ！？」

空は慌てて膝を付いてスカートの裾を押さえた。顔を真っ赤にしてそっぽを向く。

「は、恥ずかしがらないでよ、もう……。余計に恥ずかしいじゃん」「う、うるせえ。二人つきりだどうしてもこっとなっちまうんだよ！」

どれだけ不良として名を馳せようと、恋人と二人きりのシチュエーションには弱い若頭であった。

/ 2

その様子を、京太の学校から遙か遠く離れた超高層ビルの一室から観察している男の姿があった。テーブルにソファ、デスクはすべて高級品でまとめられ、燕尾色のカーペットが一面に敷かれたそこは、どうやらどこかの会社の重役室であるようだ。

「くくく、まさか扇空寺の鬼があんなにタジタジになるお相手がいるとは、世の中何があるか分かりませんねえ」

天然パーマの銀髪を、指でくるくるといじる。彫りの深い顔立ちは西洋系で、肌も透き通りそうなほど白い。明らかに日本人ではない彼は、しかし流暢な日本語を操りながら京太を見ている。双眼鏡などは持たず、もう片方の手を丸めて出来た穴に目を通していた。

「ねえ、双刃君？」

彼は振り返りもせず、背後に控える少年に声を掛けた。

天苗双刃は肩を竦めた。

「さてね。別に鬼としての性能に支障が出る訳でもなし、いいんじゃないの。……で、急に俺を呼んだってのに、要件は出歯亀の報告だけでいいのかい？」

「まさか。お父上がお亡くなりになってご傷心のあなたのためを思っただけなのに、つれませんねえ」

彼はようやく京太から視線を外し、双刃を振り返る。そこにはまるで狐のような笑みがあつた。笑みが崩れる様子はまるでなく、テ

クスチャでも張り付けたように現実味のない表情である。

「扇空寺京太君と戦うための舞台、用意しましょうか？」

「別に興味ないね。昨日もこの社長の息子さんに言ったけど、親父の仇討ちなんてまっぴら御免だ。俺はね、人間として暮らしていければそれでいいんだ」

双刃は身を翻し、男の部屋を後にした。男はしばらく双刃の出て行ったドアを見ていたが、やがて鳴り始めた内線の受話器をゆっくりと手にする。

「はい、フレイ・ウェアライトです」

墓前に花を供え、線香に火を灯す。不動は手を合わせ、黙とうを捧げた。

墓石には、歴代の扇空寺組頭領とその妻の名が刻まれていた。世襲制を貫いてきた扇空寺組であるが故に、それは一つの家系図とも言えた。そして紛れもなく、彼らは鬼であった。

扇空寺の屋敷では、『鴉』のメンバーの通夜の準備が進んでいるだろう。本来ならば不動がそれを仕切る立場にあったが、それを他の幹部に任せて彼がここにいるのは、昨夜の戦いを先代たちに報告するためだった。

京太が組を率いて戦った姿を。京太が黄泉一派の残党である黄泉にとどめを刺したことを。京太が立派に仁義を成したことを。黙とうのなかで、報じた。

やがて報告を終え、手を下ろしたところで、背後から声がかけられる。

「やっぱりここでしたか、兄い」

不動は声のした方を振り返る。そこには車椅子にのった武藤と、それを押す彼の妻の姿があった。武藤はお供えのために用意したのであろう、花を手にかけていた。

「武藤……」

不動の、サングラスの奥の瞳にどんな色が浮かんだかは窺い知れない。だが少なくとも、武藤が身体を押してここまでやってきたことに対する驚きはあるだろう。

武藤の妻が車椅子を押す。不動の隣までやってきた武藤は、花を妻に渡した。妻がそれを供えて線香を灯し直すと、二人は揃って手を合わせた。

「……ふう。兄い、少し話していきませんか」

「ああ、そのために来たんだらう？」

二人の黙とうが終わり、不動たちは連れ立って扇空寺の墓を後にした。墓地の外れに建てられた喫煙所へ向かう。

簡素な造りの喫煙所には、一応椅子が備え付けられていたが不動はそれには座らず壁にもたれた。不動と武藤はそれぞれ上着の内ポケットから煙草を取り出した。

「兄いに火を頼む」

「はい」

武藤の指示を受け、彼の妻が不動の煙草に火を点けた。

「すみません、奥さん」

「いえ」

スツと身を引いて、次に自分の旦那の煙草にも火を点け、彼女は武藤の背後に戻る。その一連の動きにはまるで淀みが見られなかった。紗悠里もこういふ女性になるのだらうと、不動は漠然と思った。「……先代の椿様が亡くなられて十年、時間が経つのは早いもんでさあ」

「一時は若が組を継ぐのは早過ぎるとの声もあつたが、そんなことはなかつたな」

二人はこの十年間を回顧する。先代頭領であつた京太の父、扇空寺椿が急逝し、当時七歳だつた京太が若頭として矢面に立たされたとき、誰もが早過ぎると反対した。しかしその後、十三歳になつた京太が自ら組を継いだことで扇空寺組は今の姿を得た。それでも時期尚早だという声は後を絶たなかつたが、彼が十七歳になり正式に頭領を襲名した今、そのような声を発する者は組の隅々まで探してももつないだらう。

「本当に、若は立派にならねやした。俺たちが側近として仕えた先代、椿様の生き写しのようだ……」

先代たちと変わらぬ仁義を持って組をまとめる姿は、武藤の言う通り、まさに先代の生き写しと言えるだらう。

もし、京太が仁義の欠片もない餓鬼であつたなら、不動は今頃どうしていただろうか。扇空寺組を抜け、別の組の懐刀にでもなつていただろうか。答えは分からないが、不動が今もこうして扇空寺組にいるのは、京太にそれがあつたからだ。

若くして代紋に誓いを立てた京太の境遇を、彼が生まれたときから見守つてきた組員たちは皆知つている。だからこそ、彼が仁義の元に組を率いてくれるのならば。

「若の命は、俺たちが守る」

「ええ、もちろんでさあ。俺も早く、こんな怪我あ治さねえと」

武藤は灰皿に吸殻を置き、次の煙草に火を点ける。それを皮切りに、彼の眼の色がぎろりと変わった。

「それはそうと、鷲澤組の件、俺にも教えちゃあもらえませんか。なんでも、妙な外人と手を組んだとか」

不動は大きく煙を吐いた。煙は、狭苦しい空間に紛れるように消えていった。

2 .

地下鉄の駅から歩いて10分ほどの距離に、その時代に取り残されたような木造の店舗は軒を連ねていた。

アンティークショップ『螺旋の環』。軒先に吊るされた小さな看板には、厳めしいレタリングでそう記されている。一見すると老舗の喫茶店のようにも見える古物店の本来の姿は、いわゆる『魔法使いギルド』とでも呼ぶべき裏の世界の重要な活動拠点の一つだった。もちろん端から見ただけで、それを示すものは何もない。所狭しと陳列された骨董品が、開かれた扉から垣間見えるだけだ。

学校帰り、とある人物から呼び出された京太はこの店の門扉を潜った。

「こんにちは、京太君。来て頂けたんですね」

「よう、水輝。蘭姉さんはいねえのかい？」



京太たちを出迎えたのは、金髪碧眼の少年だった。水輝は京太と幼い頃から付き合いがあるほぼ唯一といっていい男友達だ。ちなみに、彼の腕には生徒会の腕章がある。先日、なぎさと朔羅が生徒会の仕事を押し付けた後輩役員とはすなわち彼のことだった。

そして彼は、魔法使いギルドとしての『螺旋の環』に所属する魔法使いでもある。

「私ならここだよ」

店の奥に設置されたレジカウンターの更に奥、事務所へ続く扉が開き、一人の女性が顔を出した。

「やあ、京太君。久し振りだね。それにしても、相変わらずの死相だね」

京太をここへ呼び出した『螺旋の環』オーナー、柊蘭は、京太の顔を見てはにかむような微笑を見せた。京太の従姉に当たる彼女は、スレンダーな体型の美人で、近眼故に眼鏡を着用している。髪はアップにまとめられていて、どこかやり手のキャリアウーマンのような印象を抱かせる。

「は、人間誰だろうが死ぬときや死ぬぜ。それより、俺を呼び出した用事つてのを聞かせてもらおうじゃねえか」

「もちろん。じゃあ、『螺旋の環』のギルド会議を開くでしょう。朔羅君、なぎさ君、会議を始めるよ」

蘭の声に従って、事務所から顔を出したのは朔羅となぎさだった。彼女らも『螺旋の環』に所属する魔法使いであり、ここを寮として暮らしている者たちだ。

蘭はレジカウンターに備え付けの椅子に腰かけ、その周囲に京太たちが集う。アンティークショップという表向きの看板は所詮カムフラージュに過ぎないため、一般人がこの場に現れることを心配する必要はない。

「京太君。昨日君が倒した魔、黄泉だけれど、彼には息子がいることを知っているかな。その黄泉の息子というのは今も、人間の身体を使って生きているんだよ。天苗双刃という、人間の身体を使って

ね」

「……天苗双刃、だと？」

その名を聞いた途端、京太の双眸が大きく見開かれた。揺れ動く瞳は彼にしては珍しく、明らかに困惑の色を浮かべていた。

「そう。私と君の祖母、イリス・ウィザーズの異名『ツインエッジ』の名を与えられ、四年前に君が殺したあの天苗双刃だよ」

京太は俯き、キツと唇を噛み締めた。彼がこんな悲痛な面持ちをするのを初めてみたであろう朔羅となぎさは、京太を直視できずに俯いた。水輝は心配げに京太を見つめている。

「以前から彼の存在は掴んでいたんだが、君は彼が死んだものだと思っているだろうから伝えなかつたんだ。しかし、彼の中にいる魔の正体が分かつたことで、君にも知っておいてもらつた方がいいと思つてね。天苗双刃の動向については引き続き、私たち『螺旋の環』が調査をしていくつもりだ。これからは君にも、その結果は逐一報告するよ。彼に対してのケジメは、君が付けるべきだろう？」

/ 4

京太が去つた後、『螺旋の環』には沈痛な静寂が降りていた。朔羅となぎさにとって、扇空寺京太と言えば、不敵で、何事にも動じず、飄々としている人物像しかなかった。それがあそこまで狼狽える相手、天苗双刃とは一体？

なぎさは静寂を破るべく口を開いた。聞かずにはいられなかつた。たとえそれが京太の傷を決るような行為であつても、胸の内に広がる疑問を口に出すことでしか、この場の空気を払拭することも、自分を抑えることもできなかつた。

「……天苗双刃。そんなに扇空寺君にとって因縁深い相手なの？」

なぎさの問いに、水輝は店の出入り口の方を見つめたまま答える。彼の瞳は恐らく、もう姿も見えなくなつた京太へ向けられているのだろう。

「……ええ。天苗双刃は僕たちの幼なじみ　いや、京太君にとつてはそれ以上に大事な存在だった彼女、織原鈴詠さんを殺した張本人なんですから」

「殺した？　それはつまり、扇空寺君にとって天苗双刃は復讐の」

水輝はなぎさの言葉を遮るように手をかざし、首を横に振った。

「残念ですが、これ以上は僕の口からは……」

「そう、よね。本人がいないのに聞くような話ではないわよね、ごめんなさい」

なぎさは眼鏡を押し上げながら俯いた。再び沈黙が訪れる。自分が話を聞いたところで何になるというのか。京太だって同情してほしいわけではないだろうに。

「私、京太君のところ行つてくる！」

いてもたつてもいられなくなったのか、朔羅は宣言して『螺旋の環』を飛び出していった。

「ま、待ちなさいよ、朔羅！」

しかしなぎさが制止の声をかけたときにはもう、朔羅の姿は窓の向こうに消えていた。

「もう！」

なぎさも朔羅の後を追って駆け出す。開け放たれたままの扉を潜って外へ。朔羅が向かった、地下鉄の駅の方角へと駆けていく。夕暮れの中、人通りは決して少なくない。

それでも、駆けていく朔羅の小さな背と、彼女が目指す京太の姿はすぐに見つかった。

朔羅の気持ちは痛いくらいに分かる。一ヶ月前、朔羅となぎさはかけがえない親友を失いかけた。自分たちだけではどうにもできなかっただろう事件を解決できたのは京太がいたからだ。出会ったばかりの彼が力を貸してくれたから、彼女を助けることができた。二人は京太に感謝の念を抱いているし、朔羅はそれ以上に京太を好んでいるだろう。

朔羅に自覚があるかどうかはなぎさには分からない。だが、好意を抱いている少年が苦しみを露わにしている今、彼の力になりたいというのが朔羅の行動原理なのだろう。

なら、私は？

京太には感謝こそすれ、別段好意を抱いているわけでもない。いや、単に自覚がないだけかもしれないが、それでも朔羅のような恋慕は抱いていないだろう。

京太との付き合いはまだ一ヶ月だ。彼のことはまだ、何も知らないに等しい。それが水輝から京太の過去を僅かに漏れ聞いただけで、可哀想だと、思ってしまった。酷いものだ。よりもよって可哀想なんて。そんな、本人に望まれもしない同情はただの偽善だ。自己満足のために差しのべた手など、誰が取るものか。

なぎさの足が止まる、その時、朔羅が振り返った。

目が合う。朔羅も確かに、なぎさの姿を認識した。朔羅は大きく手を振った。急かしているのだろうか。手招きしているようにも見えなかった。

「もう、あんたって子は……」

なぎさは再び駆け出した。そうだ。朔羅が京太の助けになりたいというのなら、私がそんな朔羅を支えればいい。朔羅が助けになりたい人がいるなら、私がまとめて面倒を見ればいい。

なぎさの先に行く朔羅は、京太に追いついていた。

3 .

四年前、京太が双刃を殺したのは間違いのない事実だ。京太が扇空寺組の頭領として初めて打ち倒した魔だ。今でも、彼の胸に『龍伽』を突き刺したその感触は忘れるはずもない。双刃はあの時、京太の目の前で確実に息を引き取った。

それが何故生きていて、今、その話が俺の耳に入ってくる　！？

「京太君！」

京太が振り返ると、朔羅が息を切らしながら彼の元へ駆け寄ってくる。

「あん？ どうした」

問いかければ、朔羅は息も絶え絶えに必死で口を開こうとする。

「えっと、その、あの、ね……。うーんと、えーと……」

どうやら考えがまとまらず、言葉にならないらしい。だがその逼迫した表情から察するに、心配をかけたことは間違いないようだ。

「たたく、こんなガキに心配させるとは、俺もヤキが回ったもんだな。朔羅が必死で言葉を探している間に、なぎさもやってくる。彼女は一息つくと、いつも通りの冷静な声で言葉を紡ぐ。

「扇空寺君、ごめんなさい。月島君から少しだけ話を聞いたの。天苗双刃は、あなたの大切な人を……」

通行人がいる手前、言葉は伏せられたが京太はなぎさの言わんとしたことを理解して肩を竦めた。双刃は京太の大切な人を殺した。それこそが、それだけが双刃に対する感情を成している。

「ま、そいつは構わねえよ。減るもんじゃねえしな。それで？」

「……あなたは彼を、どうするの？」

京太はそれを決めあぐねていた。彼女らの様子を見るに、本当に双刃は生きているのだろう。四年前の双刃を知っている水輝があの場に居合わせているのも何よりの証明と言えた。だが、話に聞いただけの京太にはどうにも実感が沸かない。自分が殺した少年が生きていたことに愕然としても、自分がケジメを付けるべき相手なのか判然としない。

なぜなら双刃の件は、四年前に京太の中で決着した出来事だからだ。今、彼が世界のどこかでこのうと生きていようと、鈴詠を殺したあいつはもう、俺が殺したのだから。

「さあな。俺が付けるべきケジメはもう付けたんだ。俺がやらなきゃならねえことなんざ何も」

どくん、と。京太の意思とは関係なく、鼓動が跳ね上がった。身体が熱い。血が、京太の全身を駆け巡る血が熱を帯びる。京太は突

然の身体の変調に、その場にうづくまるしかなかった。

「京太君!？」

「扇空寺君、大丈夫？」

朔羅となぎさも屈み込み、京太の様子を窺う。京太は苦痛に顔をしかめており、視線もどこか定まらない。顔は赤く、息が上がっていた。なぎさは京太の額に手を当てる。

「酷い熱。どうして……」

「分からねえ……。急に、血が疼きだしやがった……っ!」

夕暮れの陽が沈んでいく。昼と夜の境目、夢幻と現実の狭間、逢魔が時は近い。夜になると活性化する鬼の血が、それを待たずに暴れ狂っていた。

戦えと。鬼の血がそう語りかけているようだった。

「早く帰りましょう。立てる？」

「ああ、悪いな……」

差しのべられたなぎさの手を取って、京太はなんとか立ち上がる。そのまま二人に連れ添われ、京太は地下鉄のホームまで辿り着く。

『螺旋の環』から扇空寺の屋敷までは町一つ分の距離がある。地下鉄なら二駅先が最寄駅だ。普段の京太なら歩いて帰るところだが、今の状態ではそれも難しい。

少しでも休んでおいた方がいいだろうと、京太は備え付けのベンチに座らせられた。

気まずい沈黙だ。かといって京太からかけるべき言葉は見つからない。ただでさえ地下鉄のホームが響く。京太たち以外にも乗客の姿は多い。下手な会話はできそうになかった。京太は霞む意識のなか、ただただ天井を仰いでいた。

やがて電車の到着が近いことを知らせる電子音が鳴り響き、ごう、と冷たい風が線路の奥の闇から吹き抜ける。線路を滑走する大きな音を立ててやってきた電車に乗り、京太たちは二駅先を目指した。

車内でもやはり会話は無い。京太が席に座り、朔羅となぎさはその近くに立つ。なぎさは吊革に手をかけていたが、朔羅は手摺りの

棒にしがみ付いている。

京太はようやくここで、話しかけるべき言葉を思い付いた。

「朔羅。お前、吊革……届かねえのか？」

「む、そんなことないもん。届くもん」

朔羅は唇を尖らせ、精一杯背伸びをして吊革を掴む。爪先立ちで無理矢理吊革にしがみ付いている姿は京太より年上の高校生には到底見えなかった。

「朔羅、危ないからやめなさい」

「むー、はい」

なぎさにたしなめられ、朔羅は不満げに吊革から手を離れた。再び手摺りを掴む。

「扇空寺君も、あんまり喋らない方がいいんじゃないかしら？」

「へいへい、分かってらあ」

京太としては何か話していた方が気が楽なのだが。しかし軽口は叩けても肩を竦めるまで至れなかった時点で、重症だなど自覚する。二人からは相当つらそうに見えているかもしれない。

地下鉄を降り、ふらつく体を支えられながら扇空寺の屋敷まで帰ってくる事ができた。辺りはもう既に、夜の闇に包まれていた。着々と葬儀の準備が進められている屋敷は、いつもとは違う重々しい空気に包まれているような気がした。

門の前には紗悠里が一人で京太の帰りを待っていた。彼女にはなぎさから事前に連絡がなされていたためだろう。紗悠里は京太たちの姿を認めると、焦りを隠そうともせず駆け寄ってくる。

「若様！」

「おう、紗悠里、今帰ったぜ」

京太はなんとか笑みを取り繕ったものの、それが余計に紗悠里の心配を煽った。紗悠里は朔羅となぎさから受け渡された京太の身体を抱き止め、肩を支える。京太の病状を察したその表情は悲痛にじんでいる。

「今日のお通夜は席を外された方が……」

「……んなわけにやあ、いかねえだろ」

「若様、どうかご自愛くださいませ」

紗悠里の切迫した声に、京太は押し黙る。血は燃えるように滾る。内側から、京太の身体を焼き尽くさんばかりに勢いを増していく。今にもはじけ飛びそうな意識のなか、京太には紗悠里の懇願に首を横に振る気力は残っていなかった。

「分かったよ、部屋に戻るぜ」

紗悠里はその返事にほっと息を吐く。京太を支えたまま、朔羅となぎさに頭を下げる。

「では、風代さん、穂叢さん。若様が大変お世話になりました。ありがとうございます。ですが、若様は大変お疲れのご様子。失礼ですが、今日はここでお引き取りくださいませ」

紗悠里の決然とした態度に静粛なものを感じたのか、なぎさと朔羅は一度顔を見合わせてから会釈を返す。

「分かりました。では、私たちはこれで」

「紗悠里さん、その、京太君をよろしくお願いします！」

二人はそれだけを言い残して去って行った。門前払いのような形になってしまったが、これ以上二人に迷惑はかけられないという紗悠里の判断だった。

紗悠里に支えられながら、京太はなんとか床に就くことができた。彼女からの介抱を受けながら、一息吐く。

なんとか、朔羅となぎさの前では鬼の血を押しとどめておくことができた。紙一重の状態だったが、鬼の血の暴走を抑え込んでおくことができて本当によかったと、京太は安堵する。

血の暴走が、先代である父、扇空寺椿を破滅させたと聞いている。七歳だった当時の記憶を京太は覚えていないが、血への恐れが記憶を封じ込めているのだらうと京太は考えていた。

京太は何よりもそれが怖い。鬼の血が暴走し、自分が人間でなくなってしまうことが。修羅となった自分が、大切なものを何もかも壊しつくしてしまうことが。



「では若様、水を替えてきますね」

紗悠里は立ち上がる。水を張った洗面器はタオルを濡らすためのものだ。何度もタオルを絞る内に温くなったそれを取り替えようと、紗悠里は洗面器に手をかけた。

しかし紗悠里の行動は京太によって阻まれた。京太は身を起こし、紗悠里の手を掴む。鼓動はまだ安定しない。だから今は、ほんの僅かな間でも支えを失えば簡単に堕ちてしまいそうだった。

「紗悠里、行くな。今一人になるのだけは、勘弁しちゃくれねえか……」

紗悠里は京太の手を握り返し、もう片方の手を添えた。両手で京太の手を握った形のまま、再び畳の上に腰かける。

「はい、若様……」

京太は横になり、目を閉じた。意識を保っているのも限界が近い。衣擦れの音がした。その後、隣に入ってくる暖かな温もりを感じながら、京太は久方振りの深い眠りに落ちて行った。

血の匂いがする。辺り一面を覆い尽くす炎のなか、錆びた鉄のよ  
うな匂いは燃え尽きることなく空間にこびりついている。

炎と血に染め上げられた惨状のなかで、抱きしめる妹の泣き声  
が耳に響く。

彼女だけは、自分が守らなければ。

だが、燃え広がる炎の勢いは増し、部屋の片隅に身を潜めている  
自分たちの逃げ場は瞬く間になくなっていく。燃え盛る炎の轟音、  
泣きじゃくる妹の悲鳴が脳髓を揺らし警鐘を鳴らす。死を前にした  
命の灯が、ここで死ぬわけにはいかないと告げている。

ふわりと。自分を包む大きな温もりを感じた。

見上げればそこには自分たちを抱きしめる母と、彼女の微笑みが  
あった。もう大丈夫。大丈夫だから。母の子守唄のような優しい声  
は、炎の中でも確かに聞こえた。

彼女の声に縋り付くように目を閉じた。もう大丈夫だ。後は母に  
任せよう。母なら、誰よりも自分たちに優しい彼女なら、なんとか  
してくれるはずだ。

そう思っていたのも束の間、母の息を呑む音がした。ぽたりと、  
なにかが顔にかかる。水っぽいそれに触れると、まだ生暖かい、生  
きている人間の鼓動に触れた気がした。

瞬間、どくと、心臓が跳ね上がる。耳まで届くそれが周囲の雑  
音を掻き消していく。世界から音が消えていく。今聞こえるのは自  
分の中で脈打つ鼓動だけだ。それはどこか、自分ではない別の生き  
物のもののような気がする。

自分たちを包んでいた母の温もりが消える。母はやけにゆっくり  
と畳の上に倒れていった。母の唇が動く。声は聞こえなかった。そ



「夢、か……」

ぼんやりと、夢の景色が脳裏に浮かぶ。炎と血に包まれた世界。まさに悪夢と呼ぶべき夢であったが、果たしてあれは本当にただの夢だったのだろうか。

「父さん、母さん……」

京太が七歳の時に死んだ両親。先代扇空寺組頭領である父、椿と、その妻で名家四条家出身の母、砂苗。七歳以前の記憶がない京太は彼らの顔を写真でしか見たことがないが、夢に出てきた彼らを京太ははっきり両親だと認識していた。

夢で見ただけの光景に、はつきりと覚える実感と既視感。それはつまり。

ふと、京太は違和感に気づいた。

「あん？」

隣に眠る紗悠里の姿を見やる。扇情的で艶めかし過ぎる肢体がそこにあった。ふくよかな胸、はつきりとくびれた腰から延びる、細く白い足。抜群のプロポーションも人気の理由の一つである生徒会長、穂叢なぎさに負けず劣らずの芸術品が、惜しげもなくその姿を晒していた。

「ん……。おはようございます、若様」

京太が呆然としている間に、紗悠里は目を覚まして起き上がろうとした。京太ははっとしてガバツと布団を被せる。

そういえば。京太は昨晚の自分のセリフを思い出してかあつと顔を赤らめる。つたく、いくら怖かったからって、なんてこと口走ってんだ、俺は。

「え、え？ わ、若様？」

「いいから！ 向こう向いてっから、さっさと服を着な」

「は、はい。……ふふっ」

服に手を伸ばそうとして、紗悠里はふと、思いがけず吹き出してしまった。

「……なんだよ」

「いえ、若様が私に対してそんな顔をなさるなんて……ふふふつ」  
「う、うるせえ。朝飯の支度があんだろーが、さつさとしな！」

京太は腕を組んで目を閉じる。着替えの音がして、紗悠里がようやく服を着始めたことにほっと息を吐く。

「お体は平気ですか？」

「ああ、もう止まっちゃったよ。ありがとな、紗悠里」

多分あれは、夢ではないのだろう。京太の失われた記憶のひとつか  
けら。それが血の疼きに触発されて、夢として呼び起されたのだと  
思う。記憶のなか、倒れ伏す母は最後にこう言い残していたような  
気がする。

「あなたたちは、人のままでいてね」

5 .

「京太の兄貴！」

大声を上げて厨房へ飛び込んできたのは、珍しく血相を変えた轟  
棋だった。

その様子にもいつも通り紗悠里と朝食の準備を進めていた京太は、  
思わず唾然としてしまう。

「昨日の通夜に来なかつたんで変だと思つてたらさつき、倒れたつ  
て聞いて、て……」

しめやかに営まれた通夜は、京太がいなくとも滞りなく進められ  
たと聞いていた。ただ、参列者には轟棋のように京太の不在を不思  
議がるものも少なくはなかつたようだ。組の者から話を聞いてすつ  
とんできたのだろう。興奮冷めやらぬ様子で口を開いた轟棋は、京  
太が思いの他ケロリとしていたためか次第に言葉尻をすぼめていっ  
た。

「大丈夫、なんですか？」

「おう。もうなんともねえよ。心配かけちまって、すまねえな。も

うすぐ飯もできるからよ、座敷の方で待つてな」

「は、はい。了解です」

京太の指示で踵を返そうとした轟棋は、しかしすぐには立ち去らず京太の方を向き直った。

「京太の兄貴には、ここ数日だけでも色々良くしてもらって、感謝してます。だから、何かあったら呼んでください。すぐにすつとんでいきます」

轟棋の瞳は、真つ直ぐ過ぎるほどに京太の眼をじっと見つめていた。何か熱いものを感じた京太は、思わず口元から笑みをこぼした。「ああ。そいつあ結構。そんときゃあ頼むぜ」

轟棋は礼をして去って行った。

「吉田さん、本当に若様を慕っていらつしやるんですね」

紗悠里が目を細めて微笑む。らしいな、と京太は頷く。あの様子なら、いずれは遅かれ早かれ扇空寺組の組員としての門戸を叩くことになるだろう。轟棋の眼にはそう感じさせるだけの意志と、京太を領かせるほどの仁義があった。だが、それまでは堅気の人間だ。たとえ彼の忠義を裏切ることになると、組の厄介事に巻き込みはしない。

京太は止めていた手を再び動かし始めた。今日は土曜日で学校は休みだが、葬儀の関係上忙しい一日になりそうだった。

朝食の支度を終え、食卓に着く。しかし座敷に並べられた膳のなかに、二つ空席があるのを京太は見つけた。九十九と結城。幹部補佐を務める若い衆で、今は密かに空の護衛を務めさせている二人であった。その二人が席を外しているのに京太はなにか、どこからともなく忍び寄ってくる影のような嫌な予感めいたものを感じた。

京太と同じく二人の不在に気付いたらしい不動が席を立て、携帯でどこかに連絡を取り始めた。九十九か、結城か。何度か電話をかけ直した後、不動は京太に向けて首を横に振った。二人に連絡が取れない、ということだった。

空の護衛であった二人が音信不通。京太と不動のやり取りに座敷

内がざわつき始める。空気が変わった。忍び寄る不穏な影に、片腕を掴まれたような気がしてならない。

と。不動の携帯が着信を告げる。「九十九、どうした？」すぐに電話を取った不動は、開口一番そう口にした。ざわついていた座敷は静まり返る。

しかし、電話に出たのはどうやら九十九ではなかったらしい。「……なんだ、てめえは」不動の声色が変わる。「ああ？ ふざけるな……チツ、分かった、今代わる」不動は立ち上がり、京太の元へ歩み寄る。

「若、お電話です」

不動は自分の携帯を差し出した。京太は無造作にそれを受け取り、受話口を耳に当てた。その瞬間、まるで一部始終を見ているかのようになり電話先の人物が話し始めた。

初めまして、扇空寺京太君。私、フレイ・ウェアライトと申します。以後、お見知りおきを。と言ってももしかしたらご存じかもしれませんねえ。なにせそちらではどうやら、鷲澤組と私の接触については調査を進めていらっしゃるようですからねえ

くくく、と底冷えするような笑い声が耳につく。ふざけた野郎だ。フレイと鷲澤組の接触についての調査報告は、当然京太の耳にも入っていた。京太はなるほど、聞いた通りの掴みどころがなさそうな奴だと感じていた。

「はっ、だったらどうした。てめえのことは興味かねえ。九十九と結城はそこにいんのか」

これはこれは。手厳しいですねえ。ええ、お二人はこちらでお預かりしていますよ。鷲澤組の本家です。まあ、こちらの方々と激しく争われた分お怪我はありますが、お二人ともご無事です。……ああ、そうそう。言い忘れるところでしたが、あなたの大切な彼女、神崎空さんは私が丁重にお招きしておきましたのでご安心を

「……そいつあ、てめえの差し金なのか」

まあ、そんなところでしょうか。くくく、今のところは、私が提

示したシナリオに沿って動いて頂けているようですねえ

「は、そいつあ結構。てめえとは遠慮なくケジメを付けさせてもらうぜ」

ええ。楽しみにしていますよ。それでは、失礼させて頂きます

電話が切れる。京太は通話を終えた携帯を不動へ返した。

「九十九と結城は鷲澤組に拉致られた。……空も、な」

それを聞いた組員たちは怒りを露わにして立ち上がる。ついに鷲澤組が仕掛けてきやがった。戦争だ。九十九と結城だけじゃねえ、空の姐さんまで。こうしちゃいらねえ、出入りの準備だ。

「ガタガタ騒いでんじゃねえぞお前ら！！」

京太の一喝に、浮足立っていた組員たちはぴたりと動きを止めた。京太は息をつき、皆に目配せしながら落ち着き払った声で告げる。

「飯の後、臨時の総会を開く。いいな？」

/ 5

フレイは電話を切り、携帯を九十九へ返す。といつても腕を縛られた九十九にそれを受け取ることはできなかつたため、胸ポケットに戻す。

「てめえ……一体どういう ツ!？」

口を開いた九十九だったが、鳩尾にフレイの拳を叩き込まれて言葉を止めた。

フレイは彼に、独特な狐のような笑みを向ける。果たしてそこに感情など籠っているのか。

「それをあなたにお話したところで、どうなるというんです？今のあなたは餌に過ぎないんですから、黙って事の成り行きを見ていればいいですよ」

フレイはそれだけを言うと、九十九と結城にはもう興味がないかのようにあっさりと背を向けた。

そこは鷲澤組本家の一室だった。手と足を縛られ身動きが取れな



い状態の九十九と結城の傍らには、二人の監視役である鷲澤組の組員が控えていた。畳の上で押し黙るしかない二人を尻目に、フレイは襖を開けてその部屋を後にする。

朝日の届きにくい西側の廊下は、雨戸が閉め切られたままであるため薄暗い。今頃は扇空寺組との本格的な抗争に向けて準備が進められているのだろう。人気のない、しかし張り詰めた緊張感に満ちる廊下を歩き、ふとフレイは足を止めた。

「さて、盗み聞きとは人が悪いですねえ、水輝君」

振り返り、薄暗い廊下の奥に声をかける。影からはい出るように姿を現した金髪碧眼の少年は、笑顔でフレイと対峙する。伝統的な日本家屋にて、似つかわしくない二人が向き合う奇妙な光景だった。「おっと、これは失礼。まあ、あまりいいお話ではありませんでしたが」

「くくく、耳に入れたくなくなければ私に近づかない方がいいですよ？ あなたは社長の息子さんですから、特別に見逃してあげようと思っっているんですがねえ」

「いえいえ、とんでもない。僕が今まであなたから目を離したことがありませんか？」

水輝の表情から笑みが削がれる。次の瞬間には彼の手に、一丁の拳銃があった。彼がシルフと名付けたオートマチック式ハンドガンの銃口は、まっすぐにフレイの眉間に向けられていた。

「……空さんをどうするつもりです？ 回答によっては、ここであなたを 殺す」

フレイは尚も笑みを崩さなかった。くくく、と声を上げて笑い、水輝を嘲り切ったような視線を投げかける。

「あなたにそれができるなら、とくに私は死んでいるはずなんですけどねえ。まあ、いいでしょう。特別に教えてあげますよ、私の目的を」

銀色の癖毛をくるくると弄る手の動きが止まる。

「元魔の王にして終焉の魔神。ラグナロクの復活ですよ」

「これからお世話になります、先代。若の御身は、俺の命に代えても守り通して見せます」

棗は閉じていた目を開き、墓前に合わせていた手を下ろす。京太が棗を自身の側近として正式に本家に招くことを宣言したこの日、棗は学校を欠席して引越しを行った。とは言っても荷造りだけを済ませ、最低限の荷物を持って本家へ入っただけだ。他の大きな荷物は追々運び入れる手筈となっていた。

棗の本家入りに、幼い頃から付き合いがある紗悠里は自分のことのように喜んでいた。小、中と同じ学校に通っていた彼女とは共通の友人も多い。「ミコトも千歳も、お前のこと気にしてるぜ」「そう、でしたか。でも私はもうあそこへは戻れませんから、ご心配なさらずにとお伝えください」

本家で宛がわれた部屋に荷物を置くと、棗は父から言われていた通り扇空寺家の墓へ向かった。父は母とともに先に行っていると聞いていた。まだ京太との杯は交わしていないが、本家が通夜の準備で忙しい今、先に先代たちへの挨拶を済ませておいた方がいいだろうという父の意見であった。

棗が墓に着くと、既に墓参りを終えたらしい父と母は、不動とともに喫煙所へ向かっていた。棗は墓前に立ち、手を合わせた。

先代たちへの挨拶を終え、棗も喫煙所へ向かった。

「それはそうと、鷲澤組の件、俺にも教えちゃあもらえませんか。なんでも、妙な外人と手を組んだとか」

喫煙所へ足を踏み入れると、丁度父がそう不動へと問いかけたところだった。鷲澤組とはこの辺り一帯のシマを扇空寺組と競り合っている極道一家で、現在の組長が代紋を継いで以後、対立の動きが加速していると聞く。

「鷲澤組が、どうかしたってのか親父」

「おう、棗か。先代への挨拶は済んだのか」

棗はこくりと頷く。

「それより不動さん。今の話、詳しく聞かせてください」

不動は煙草を灰皿に押し付けた。そういえば、と棗は思う。この人が煙草を吸っているのを見るのは初めてだ。

不動は次の煙草を取り出そうとして、止める。サングラスのズレを直しながら口を開いた。

「鷲澤組にその妙な外人が入り込んでるって情報が入ってきたのはつい一週間前のことだ。名前はフレイ・ウェアライト。銀髪の、笑い方が薄気味悪い野郎だっけ。野郎の目的が何かはよく分からねえが、とにかく、ウチとの覇権争いに手を貸すと言って、鷲澤組に協力を申し出があった。しかもどうやら野郎は、月島ホールディングスの重役らしい。鷲澤組を利用して、ヤクザどものシマを荒らし回る魂胆じゃあねえかと俺は睨んでる」

「兄い、月島ホールディングスって……。その話は、若には……」  
父が持つ煙草から、灰が落ちた。灰の中にくすぶる赤い光が瞬間に消える。不動は首を横に振った。

「いや、まだだ。それがどういう意味を持つてるのかがはつきりしねえ限りは、若に伝えてもつらい思いをさせるだけだからな」

月島ホールディングスと言えば、国内でも有名な大企業だ。主な市場は海外だと聞くんが、国内でも金融から食料品、不動産まで多岐に渡る業種を束ねた大手株式会社として名を馳せている。

だが、それとフレイとの結びつきが、どう京太にとっての責め苦となるのか棗にはよく分からなかった。

／＼

水輝はフレイの言葉に眉根を寄せた。

「ラグナロクの、復活？ 仮にもフレイなどと名乗っているあなたが、よくそんな絵空事を言えますね」

「くくく、言うに事欠いて絵空事ときましたか。その認識は改めて頂かなければなりませんねえ。ラグナロクについてはご存じでしょう？ 北欧神話の神々の黄昏ではなく、終焉の魔神としてのラグナロクを」

無論だった。現代から約五十年前、世界を終焉に導こうとした元魔の王ラグナロクはしかし、五大英雄によつて倒された。特に、京太の祖父である扇空寺辰真、『螺旋の環』の先代マスターにして水輝たちの師である赤羽サツキには当時の話を幾度となく訊ねた。

そう、ラグナロクは倒されたのだ。ラグナロクが跡形もなく滅ぼされた後、イリス・ウィザーズは人柱を立てて元魔たちを封印した。一度滅びたものを再生させるなど、できるものか。

「おや、できるはずがない、とお思いですか？ どうやらあなたは何か勘違いをしているようですねえ。ラグナロクは滅びてなどいませんよ」

くくく、と水輝の胸中を嘲笑い、フレイは言葉を継ぐ。

「終末思想、というのはご存じでしょう。終焉りを望む意志というのは、いつの世も絶えぬものです。そしてそれがラグナロクという元魔を生み出すエネルギー、根源なのですよ。つまり、世界が存在する限りラグナロクという存在が消滅することはないのです」

水輝は愕然とした。ラグナロクは滅びていない。ならば五十年前、五大英雄たちが世界を救った元魔戦争と呼ばれる戦いは一体なんだったのか。

照準が揺らぐ。何も獲物を持っていないフレイに対し、既に必殺の間合いを確保している水輝はしかし、既に自身の勝利をイメージすることは叶わなかった。

「それができるとして、あなたは一体何者なんですか……！？ なぜ、空さんを……！？」

「うーん、さすがにそれを教えるわけにはいきませんねえ。それに関してはあなたも無関係ではありませんし……」

フレイは頬に手を当て、首を捻る。そのしぐさだけを見れば、困

り果てて思案に耽っているようではあるのだが、彼が本当に何を考えているのか、その真意はまるで読めない。

「まあ、私の目的を知ったあなたは今、扇空寺京太君と接触するのはいささか問題がありますし。眠っていてもらいましょうか」

名案だ、とでも言うようにぼんと両手を合わせた瞬間、水輝の前からフレイの姿が消えた。同時に、後頭部に鈍い衝撃が走る。視界が歪み、目の前の景色が上昇していく。いや、そう見えるのは自分の身体が倒れていくからだと自覚したときにはもう、水輝の意識は深い闇の底へと墮ちていった。

6 .

「いいか。あくまで奴さんとケジメを付けるのは俺の役目だ。鷺澤組は魔じゃねえ。人間だ。事を荒立てる必要はねえ。連れて行くのは必要最低限の人数だ。それ以外は葬儀を進めな。俺からは以上だ」

朝食後、速やかに全ての膳が片付けられ、臨時総会が開かれた。上座に坐する京太の言葉にしかし、大多数の幹部が意義の視線を向けた。

「しかし若、これは組同士の覇権に関わる問題ですぜ！ 下手すりゃこの辺のシマを全部持って行かれるかもしれねえ！」

「そうです。それに、鷺澤組の上じゃあ中部平定会がいる！ 鷺澤組との一件がこじれて平定会まで出てきやがったら、戦争どころじゃ済みませんぜ！」

「分かってらあ。だがそいつあ、鷺澤組と戦争になつたところで同じだろうが」

中部平定会。中部地区の任侠組織が結集して作られた、巨大な連絡会だ。多数の極道が名を連ねるこの組織に、逆らう組などないと聞く。

一方で扇空寺組はその本質上、全国各地に貸元となる組が存在するためそのような連絡会には属さず独自の勢力を形成している。

もしも平定会との戦争となれば、それは日本全国を巻き込む果てしない戦いの連鎖となる可能性もないとは言い切れない。それだけは避けなければならなかった。

京太は話は終わりだと言わんばかりに立ち上がる。

「不動、車の準備だ。冬木は不動の補助に回れ。俺についてくるのは紗悠里と棗。お前らだけでいい」

指名を受けた不動と、冬木という古株の幹部が立ち上がり表に出て行った。

それでもまだ燻るものを抑えきれない様子の幹部たちに、京太はにやりと笑いかけてみせる。

「まあ見てな。鷺澤組とはきっちり話を付けてきてやるからよ」

討魔の大将ではなく、扇空寺組という極道の頭領としての腕の見せ所であった。

「全く、目の敵にされるつてのは怖いもんだね」

双刃はフレイに呼ばれてここへやってきていた。途中で『螺旋の環』の連中に追い掛け回されるというハプニングもあったが、どうにかまくことができた。新しい畳の敷き詰められた八畳ほどの部屋に足を踏み入れる。布団の上には一人の少女が寝息を立てていた。「なるほど、こういう愉快なことをするわけだ」

双刃は彼女の元に跪く。頬に指を這わせると、寝ている少女はそれに反応して寝返りを打つ。

フレイの目的がなんなのか、彼がなぜ双刃に対し懇意に接してくるのかはまるで分からない。だがそんなことは双刃にはどうでもよかった。問題はフレイが、双刃のなかにある魔としての闘争本能を煽っているということだった。

人間として暮らしていければそれでいい。それは本心からの願いだ。だが、もう一度京太とサシで殺し合えるのならそれも本望だった。四年前や父親の復讐などでは決してない、純粋な殺人衝動が京太との対峙を求めている。

だがそれを成就させるためには最高の舞台を用意する必要がある。フレイはそれを用意しようかと話を持ちかけてきた。

京太の恋人である空がここにいる。扇空寺組と対立する、鷲澤組の本家に。フレイが何をしようとしているかは依然分からないが、双刃に投げかけてきた提案は本気で実現させようとしているのかもしれない。

「んん……」

空の目がゆつくりと開かれる。

「お目覚めかな、お姫様」

「だ、誰!？」

空が寝起きの頭で混乱したのか、布団を跳ね退けて暴れようとしたため、双刃は彼女の上に飛び乗って抑えつける。

「ほら、まずは落ち着いて俺の顔をよく見てみな」

「え……」

空はまじまじと双刃の顔を見る。最初はまだ焦点が合っていないのか、それとも単にまったく分からないだけなのか目を瞬いていたが、やがて得心してはっと息を呑む。

「気付いたかな？ 久し振り、神埼」

「双刃、君……」

空は信じられない、とでも言いたげな目で双刃を見ていた。それも当然か。彼女からすれば双刃は既に死んでいる存在だからだ。京太が双刃の生存を聞かされたことなど知らない双刃は、京太も俺を見たら同じような顔をするんだろうなと思った。

「京太から聞いたんだろ、俺を殺したって。けど、残念。俺は生きてるよ。このままお前を犯してやることだって簡単にできちまう」

双刃は空の腕を掴む手に力を込めた。痛みには呻く空の唇に空いている指を這わせ、自身のそれを近付けていく。空は瞳いっぱい涙を溜めて、泣き喚きながら双刃の下で暴れ狂う。

「そう。お前、まだ処女なんだ」

双刃はパツと手を離して、立ち上がった。最初から演技だった。

京太と空がどこまで進んでいるかを確かめるための。なんとなく分かった程度で断定してみたが、おそらく間違っではないだろう。

「相変わらずどっちも奥手というかなんというか。……鈴詠が、ごめんねって言ってるよ」

双刃の一言に目を見開いた空の首元に、双刃は手刀を入れた。



置にあつた。車で約十分の距離を移動して、門前の路肩に駐車した不動の車から、京太はドアを開いて外に出た。

門を見上げる。警備員代わりの組員が二人立っているせいもあるだろうが、無駄に高く建てられた門構えはどこか威圧的だ。京太は紗悠里と棗を伴って門まで歩み出る。不動と冬木も外に出たが、彼らは車の前で待機している。

「扇空寺組頭領、扇空寺京太だ。門を開けてくれ」

物言わぬ門番たちは、京太の名乗りに頷き門を開く。玄関まではしっかりと舗装された石畳が続いていた。昔はウチと似たような飛び石だったんだがなと京太は思い起こす。七歳以前の記憶を。

「……どうにも、嫌な臭いがしやがる」

京太は鼻に付くそれに顔をしかめた。ここは彼の嫌いな臭いに満ちていた。極道屋敷にそれがないのは逆に変な話だが、京太はそれがどうにも気に食わなかつた。

「嫌な臭い？」

「棗さん、私どもの家は禁煙ですから」

棗は紗悠里の言葉にああと得心した。扇空寺の屋敷は昔から禁煙だ。頭領がみな煙草嫌いだったからだと言われているが、京太は厨房以外の屋敷内で火を使うことにも抵抗があつた。

やがて玄関からやってきた組員の案内で玄関を潜り、組長が待つ応接間へと案内される。

「よお、ご苦労だったな若頭。いや、今は頭領だったか？」

組長の鷺澤はにやにやと笑いながら京太たちを迎えた。角刈りの頭と着流しの襟元に覗く刺青がいかにも極道者然とした男だった。

「は、冗談はよしてくれよ鷺澤の旦那」

京太も笑みを返しながら、鷺澤の対面の席に着く。紗悠里と棗はその脇に控える形だ。

「ほう、連れてきたのは幹部じゃなく、若え奴らか」

「ああ。側近頭の紗悠里と、昨日俺の側近になつたばかりの棗だ」  
京太からの紹介に合わせ、紗悠里と棗は軽く頭を下げた。鷺澤は

そんな二人を、特に紗悠里をまじまじと見つめる。

「なかなかいい女を連れてるじゃねえか。ウチの息子の嫁に欲しいくらいだな」

「そいつあどうだか。今は俺の世話で手一杯だよ、こいつは」

京太は笑みを潜め、まっすぐに鷺澤を見つめた。

「鷺澤の旦那。あんたんとこの先代にはよくしてもらった恩義がある。あの人は言ってみりゃあ、俺のもう一人のじいちゃんみたいなもんさ。事を構えるのは忍びねえ。どうか、手を引いちゃくれねえか」

京太の言葉にしかし、鷺澤は厭らしい笑みを深めるばかりだ。

「そいつあお門違いつてもんだぜ、京太坊よ。外人の先生から聞いてんだろ、こつちにやお前んとこの若えのがいる。奴らのタマが惜しいんなら、そつちが身を引くべきじゃあねえか？ ええ？」

九十九と結城を人質にしているおかげか、強気な鷺澤の様子に、京太は思わず笑みをこぼした。

「あん？ 何がおかしいってんだ」

鷺澤は怪訝そうに京太を睨み付ける。ああ、全部だ。京太にはそれがおかしくておかしくて堪らなかつた。

「極道一家の長として大きく名を馳せた先代はとうになく、代行としてもう一度組を背負った先々代ももういねえ。この十七の若造一人が頭を張る今の扇空寺組なら簡単に御しきれると思ってるんだろ？」

はっ、そいつあ結構。筋違いにもほどがあらあ、三下」

「な　！？」

「人質でも取らなきゃウチと対等になれねえお前らなんざ、相手にならねえつつってんだ。戦争になりゃあウチには勝てねえと、自分で言ってるようなもんじゃねえか。さっさと三人を返しゃあ、このまま見逃してやる。ウチとの関係も今まで通りだ。なんか文句あるか？」

どん、と。鷺澤はテーブルを思い切り殴り付けた。顔を伏せ、拳をテーブルに叩きつけた姿勢のまま動かない。しばらくすると、鷺

澤はまた厭らしい笑みを浮かべて顔を上げた。

「そうはいかねえよ、京太坊。俺を逆上させて立場を逆にしようって魂胆だったんだろうが、あと一歩だったな。こっちがお前んとこの若えの二人を引っ捕まえてることに変わりはない……。あん、三人、だと？」

驚澤の表情から笑みが消え、眉根を寄せた。なぜそこで食い違う？ 京太は周りを見回す。驚澤の後ろに控える組員たちは何も言わず立っているだけだ。誰も進言する者はいない。

「驚澤さん、あとは私がお話ししましょう」

襖が開く。癖の強い銀髪をいじりながら入ってきたのは外国人の男だった。この声、奴がフレイか。

テーブルまでやってきたフレイに、驚澤は疑惑に満ちた視線を向ける。

「先生、三人目がいるってのはどういうことですかい？ まさかあなた、堅気のをんを……」

「それについての返答は……まあ、省略しましょうか。くくく、あなた、もう用済みですから」

フレイは髪をいじっていた指をぱちんと鳴らした。火打ち石を鳴らすかのような動作で、青い光が瞬いた。

「う、な、なんだ！？ う、うわああああああああああああああああああ……」

すると驚澤の服に蒼い焰が灯った。その蒼い焰は瞬時に驚澤の身体を包み込み、彼を燃やし尽くして消えてしまった。こいつ、魔法使いか。

「てめえ……！」

京太と紗悠里が刀の柄に手をかけ、棗が槍を抜こうとした瞬間に、フレイは手をかざしてそれを制してきた。

「まあまあ、少し落ち着いてください。私どもも、こんなところで発砲なんてしたくありませんからねえ」

見れば、脇に控えていた驚澤組の組員たちが一斉に銃を抜いてい

た。その銃口はしつかりと、京太たち三人に向けられている。なるほど、既に鷲澤組はフレイの元に下っていたというわけか。

京太たちが獲物から手を離すのを確認して、フレイはくくくとほくそ笑む。

「では改めまして。私、フレイ・ウェアライトと申します」

フレイはスツと名刺を差し出してきた。京太は受け取り、確認する。名刺には月島ホールディングス副社長、フレイ・ウェアライトとあった。

「月島……、てめえ、まさか……」

「安心してください。彼は関係ありませんよ。あくまで私は個人的にここへ来ています」

さて、とフレイは手を叩いた。開いたままの襖から、組員が手を拘束された若い男を二人連れて入ってくる。九十九と結城だった。

フレイが京太に笑みを向けると、組員はなぜか九十九たちの手錠を外し、京太たちの前に放り出した。

「このお二人でしたら、お返しします。では、私はこれで」

お気をつけてお帰りくださいと言い残し、フレイはその場を立ち去ろうとする。しかし京太は動かなかった。用はまだ済んでない。

「待てよ。空はどこだ？」

フレイは振り返る。その顔に張り付いたように浮かぶ笑みは、全く変わる様子がない。

「諦めてください、と言っただら？」

「たたつ斬る　！」

京太はテーブルを思い切り蹴り上げた。組員たちがそれに怯んだ隙に、彼らの足元から強襲をかける。彼らの足を掬い、鞘に収めたままの刀で殴り付けて失神させた。フレイは既に応接間の外に出ていた。九十九と結城を紗悠里と棗に任せ、京太は廊下へ躍り出る。

「あの野郎はどこへ……」

京太は左右に伸びる廊下を見回し、そこに倒れている金髪の少年

を見つけた。

「水輝！？」

京太は幼なじみの元へ駆け寄り、彼の肩を揺する。水輝はそれに反応して呻き声をあげた。まだ息があることに京太は胸中で安堵の息をついた。どうやら気を失っていただけのようだ。

「京太……君……」

目を覚ました水輝は京太を認識して、バツが悪そうにはにかんだ。「彼、フレイを止めようと思ったんですが、うまくいきませんでした」

水輝の様子に京太は肩を竦めた。全く、無茶をしゃがる。京太は水輝に肩を貸して立ち上がる。

「野郎、お前の親父さんがやってる会社の副社長なんだってな」

「ええ。父が最も信頼を置いている部下です。ただ、僕はずっと彼を監視してきましたが」

「じゃあ、お前は野郎とは関係ねえんだな？」

「ええ、もちろん」

つまり、水輝は独自の調べでフレイが鷲澤組と繋がりがあることを知った。そして今日、フレイの思惑を阻止するために単身ここへ乗り込んできたというわけか。

「京太君、早く彼を止めないと。空さんをどうするつもりなのかはまだ分かりません。ですが、彼の目的ははっきりしています。ラグナロクの復活です」

空を捕らえ、京太の組に危害を加えようとしたフレイを止めようとした。親友としての水輝の仁義に報いるためにも、奴を逃がすわけにはいかない。

/ 9

「あ、不動さん！」

車のドアに背を預けていた不動を見つけ、朔羅は彼の元へ駆け寄

った。

「姐さん方……！ どうしてここへ」

不動は朔羅と、彼女の後に続いてやってくるなぎさと蘭の姿を認めてサングラスの奥の目を見開いた。

なぎさと蘭は、朔羅とは対照的にゆっくりと不動の元へ歩いていく。

「やあ、不動さん、冬木さん。会うのはこの間の葬儀以来、かな」

蘭は左手で右肘を抱えるように組んだ腕をそのままに、車の前で待機している二人に挨拶をした。扇空寺辰真の孫娘である彼女はやはり、扇空寺組の組員たちとは顔なじみであった。後に続くなぎさは、「こんにちは」という簡素な挨拶とともに会釈した。

不動と冬木も二人へ会釈を返し、しかし不動は苦言を呈すべく口を開く。

「お嬢、こんなところへ何の御用です。ここがどこか、分かつちやいねえわけじゃあないでしょう。俺たちがここにいる、その理由を考えてみておくんせえ」

「それは心得ているつもりだよ。ここは鷲澤組の本家で、なかには京太君がいる。それなら尚更、京太君には伝えなければならぬことがある」

蘭は屋敷の門を仰ぎ見た。朔羅となぎさもそちらへ身体ごと視線を向ける。二人の門番を備えた門の奥には、更に幾人も組員たちが控えていることだろう。それでも、このなかに奴がいるのなら、その存在を京太に知らせなければならぬ。

朔羅となぎさは蘭に指示を求める視線を向けた。対して、蘭はどこか神妙な面持ちで頷いて見せる。

蘭は空を見上げる。雲の少ない青空のなか、日は一番高いところまで登っていた。

「昼、か。星の視えないこの時間が、運命を歪ませないといいけれど」

朔羅となぎさは、屋敷の門へ堂々と歩を進めていく。その足取り

に迷いなど見られない。むしろ朔羅など、舞い上がってスキップでもしそうな勢いであった。

「お嬢さん方、何か御用でしょうか」

まっすぐに向かつてくる二人へ、門番の片方が制止の声をかけた。朔羅となぎさはこの呼びかけに悠然と立ち止まったが、引き返すつもりなどまるで見られない。

「私たち、扇空寺京太君の知り合いなんです、通して頂けませんか」

「申し訳ありませんがそれはできかねます。お引き取りください」予想通りの返答に、なぎさは眼鏡のズレを直しながら息をつく。

「まあ、どう考えてもそうなるわよね。……それなら」

「きょーこーとつば、させてもらうからねっ！」

朔羅は宣言した瞬間、門番が身構える暇もなく彼の懐に潜り込んでいた。なんとかそれに気づいた彼が、半ば呆然と朔羅を見下ろしたのに対して、朔羅は満面の笑みを見せる。そして何か棒のようなもので容赦なく彼の腹部を突いた。

相棒が突き飛ばされ門に激突するのを目の当たりにして、もう一人の門番は大したことではないと言わんばかりに落ち着いた足取りで歩いてくるなぎさに視線を向けた。既に彼女は手の届く距離まで歩み寄ってきている。なぎさの歩みを止めるべく、彼は腕を突きだそうとした。

なぎさの掌が、彼の肩に触れるのはそれよりも早かった。バチツ、と何かが弾ける音がして、もう片方の門番もその場に倒れ伏した。

門番のいなくなった門前に立つ朔羅の手には、小柄な彼女の身の丈を軽く超えそうなほどの大きさを誇る処刑鎌があり、なぎさの掌では視覚化された電気の帯がスパークしていた。

「いくわよ、朔羅」

「うん！　せーのっ！」

二人は同時に、観音開きの門に手をかけた。押し開いた門の向こうには風情ある日本庭園が広がっており、丁寧に敷き詰められた石

畳の奥には屋敷の玄関が見える。その玄関の前には、数人の組員たちが拳銃を手に二人を待ち構えていた。

組員たちは一斉に引き金を引く。彼らの放った凶弾が朔羅となぎさを襲う刹那、なぎさは朔羅の前に躍り出て両腕を広げた。すると彼女の眼前に、電気の帯が幾重にも重なった壁のようなものができあがった。電気の壁は銃弾をすべて受け止め、そのことごとくを焼き払ってしまった。

「朔羅！」

「おっけー！」

呼びかけると、なぎさの背後から飛び上がった朔羅が組員たちの前に降り立つ。踊るようなステップを踏みながら、その三日月形の処刑鎌を振り回す。組員たちは焦燥のなかで次弾を撃つ。至近距離で放った弾丸は確実に朔羅の脳天を貫通したが、彼女の姿は煙が霧散するかのようには掻き消えてしまふ。彼らに視えていたのは朔羅の残像だったのか。

「こっちこっち！」

朔羅は既に彼らの背後に回っていた。しかし彼女の声に組員たちが振り返る間もなく、彼らは腕に裂傷を負い、銃を落としてしまふ。その隙に肉薄していたなぎさが与えた電気ショックにより、彼らは皆気を失ってしまった。彼らが朔羅だと思っていた幻像を攻撃していたときにはもう、朔羅は一撃を加えていたのだ。

これが彼女の操る力であった。マテリアライズと呼ばれる魔法を用い、彼女の魔力の具現たる処刑鎌を精製する。これを手に、特殊なステップでの舞を見せることで対象者に幻覚を視せていたのだ。組員たちが視ていたのは残像でもなんでもなく、本当にただの幻であった。

「いやはや、見事なお手前ですなえ」

彼女らに賞賛を送る人物は、玄関の奥から現れた。二人がそちらを見やると、癖の強い銀髪を持った外国人の男性が、一人の少女を抱えて玄関から出てくるところであった。



「空ちゃん！」

「あなた、神崎さんをどうするつもりなの!？」

身構える魔法使い二人を前に、フレイは空を抱えたまま困ったように眉根を寄せる。

「うーん、まあそれは後で彼にでも聞いて頂くとして、私は先を急ぎますのでこれで……」

斬、と朔羅の処刑鎌がその役割のごとくフレイの首に肉薄する。

だが手ごたえはまるでなく、ただ単に空気を切り裂いた感触だけが朔羅の手に残った。

「え　!？」

確実に捉えたと思われたフレイの身体は、陽炎のごとく揺らめいて消える。朔羅となぎさが驚愕に目を見開くなかで、フレイの声はありえない場所から聞こえた。

「風代朔羅さん、なかなか高度な幻覚魔法を操れるようですが、私も似たようなことができるんですよ。それでは、私はこれにてお暇させて頂きますので」

彼は既になぎさの位置をも越え、門を潜らんとしていた。

「嘘……」

自分の専売特許を奪われ、しかも見抜くことすらできなかったことに自己喪失しかけている朔羅を置いて、なぎさはフレイと止めるべくマテリアライズしたスナイパーライフルの照準を定めんとする。だが、彼女の撃ち出す雷弾の効果範囲は広い。よしんばフレイに命中したとして、彼を襲う電撃が、同じように空の身体に流れない保証はないと言ってよかった。

なぎさが引き金を引くのを躊躇っている間に、フレイは門扉を潜って外へ出て行った。

「くっ……!　待ちなさい！」

ライフルを消失させ、なぎさはフレイを追って駆け出す。

だが、日本庭園を横切って現れた人物によって彼女の進路は阻まれてしまった。

「おや、これはどうも。あなた方は何もなさらないのですか？」  
フレイが門から外に出ればそこには当然、不動、冬木という扇空寺組の幹部が二人と、『螺旋の環』のオーナーである蘭の姿があった。

彼らは特にフレイを見咎めるでもなく思い思いの方角を向いていた。臨戦態勢などという言葉とは全く無縁のポーズであった。

やがて、大きく息をついた不動が口を開く。

「あんたとのケジメは自分が付けると若が言った。俺たちは若のその言葉を信じて待つ。それだけだ」

それが俺たちの忠義であり、仁義だと、サングラスの奥の瞳が語っていた。

フレイは不動の言葉を受けて肩を竦める。

「そうですか。では、私は遠慮なくお暇させて頂きますよ」

フレイは彼らを横目に、屋敷を離れ町中へ消えていった。

8 .

鷲澤組の組員たちの妨害を退けながら、京太たちが玄関へ向かうと、そこには膝を付いて俯いている朔羅の姿があった。

「朔羅！」

「京太、君」

京太たちは急ぎ、朔羅の元へ駆け寄る。特に目立った外傷はなく、京太の声に顔を上げたことから大事には至っていないのだと京太たちは安堵した。だが朔羅は今にも泣きだしそうな表情をしており、何があったかを知る由もない京太たちからすれば困惑の色を隠せなかった。

「お前、どうしてこんなとこにいやがる。まさか……」

「えっ、と」

朔羅がなんとか声を絞り出そうとした、その時だ。

「きゃああああああああっ!!」

外から突然の悲鳴が上がる。はっとしてそちらを見やれば、ナイフを手にした少年がなぎさを組み敷いて今にも彼女の喉元を掻っ切らんとしている最中であつた。

「会長！」

「なぎさちゃん！」

京太は水輝を放し、一目散にそちらへと駆け出した。刀を抜き放ち、少年へと斬りかかる。持っていたのは『龍伽』ではない代物だが、真正正銘の真剣であり、こと人間を斬ることに關しては絶大な殺傷力を誇ることに変わりはなかつた。

自分へと疾駆してくる京太に気づいた少年は、なぎさにとどめを刺すことを諦め勢いよく飛び退いた。既に彼を間合いに捉えていた京太の刀は空を斬る形となる。

「会長、大丈夫か？」

「ええ、ありがとう、扇空寺君」

京太はなぎさを抱き起こし、自身に続いていた紗悠里と棗に彼女を任せた。

「お前ら、手え出すんじゃねえぞ」

さて、と京太は切っ先を少年に向けて彼と相對する。對する少年は、二本のナイフを手にニヤリと笑つて見せた。

「朔羅や会長がここにいてってことで薄々感付いちゃあいたが、てめえ」

京太はキツと彼を睨む眼を鋭くした。

「久し振り、つてのはご挨拶かな、京太」

「天苗、双刃……！」

成長こそしているものの、彼の風貌は京太の記憶の中にある四年前の天苗双刃とそう大した変化は見られなかつた。こうして相對してみれば、彼が天苗双刃だということは容易に認識できた。

しかし双刃の方は、存外冷静でいる京太の様子に少々面喰っているようであった。

「なんだ、神崎はもつと驚いてたんだがね。お前も似たような反応をするもんだとばかり思ってたよ」

「はっ。生憎、蘭姉さんからてめえが生きてるってこたあ聞いてたからな。別にもう驚きやしねえよ」

京太は切っ先を双刃に向けたまま歩き出した。石畳の上を、門前に構える彼の元へ向かってまっすぐと。

「てめえも、フレイと繋がってんのか」

「だったら？」

「決まってるあ。てめえが双刃だろうが亡霊だろうが関係ねえ。會長に手え出したお礼もだ。たたっ斬るぜ」

瞬間、石畳を蹴る。一足飛びに双刃の懐へ飛び込み、逆袈裟気味に斬り付ける。双刃はしかし、この神速の斬撃を飛び退いて容易く避けようとして 京太の動きが変化する。

刀は振り抜かれず一旦降ろされた。先の斬撃からここまで、京太は足の動きを止めることなく前へ踏み込んでいる。双刃が飛び退いた、その着地地点より更に奥へと潜り込み、反転する。その勢いとともに刀を大きく横へ振る。

扇空寺流と呼ばれる古流剣術における型の一つ、『霞』の動きであった。

だが、この剣戟の軌道が双刃を確実に捉えた瞬間、京太の脳裏にフラッシュバックするものがあつた。夢の中で蘇った記憶だ。父の凶刃に母が倒れ、血まみれで、周囲は炎に焼かれて、ただ、怒りだけが自分のなかを支配して。

京太は剣を止めて後ろへ飛びずさつた。双刃は拍子抜けした、とても言わんばかりに訝しげな視線を向ける。

「おっと。まさか、人間の身体は斬れない、なんて言わないよな」

「……チツ。んなわきゃ、ねえだろうが……っ！」

言いながら、しかし京太は自身の胸を空いている手で押さえた。

身体が熱い。今にも沸騰しそうなほど血が疼き、全身を燃え上がらせ始めている。くそっ、またか！ 双刃と相對したためか、鬼の血が戦いを求めて疼き出した。

京太は自身を襲う暴力のような熱量に耐え切れず膝を付く。刀を支えになんとか立ち上がろうとするも、先日の比ではないこれは今にも京太の身体を内側から蹴破つて外へと溢れ出そうとしていた。

「これは、白けるね。鈴詠が心配してるぜ？」

「な、に……!？」

双刃の言葉に、京太は目を見開いた。鈴詠が？ どういうことだ？

京太は彼が堂々と鈴詠の名を出したことに怒りを感じた。てめえが鈴詠を語るんじゃないやねえ。鈴詠はてめえが殺したんだろ。

「まさか、てめえ……!？」

京太の問いには答えず、双刃はニヤリとシニカルな笑みを浮かべた。身動きが取れず蹲る京太の元へ、石畳を鳴らしながら歩み寄る。

「若様！」

「扇空寺君！」

「来るんじゃないやねえ！ 来るんじゃないや、ねえよ……!！」

京太へ駆け寄ろうとした紗悠里たちを、京太は怒鳴りつけて制した。息も絶え絶えな状態で双刃を睨み付ける。だが、為す術などないに等しかった。自身の前に迫りくる死を目の当たりにしていても、血の疼きに抗うことで精一杯の今、立ち上がることすらままならないのだから。

「答える、答えるよ双刃……! 鈴詠は、鈴詠はてめえのなかに

」

「やっぱりつもらねえよ。人間のときのお前は」

双刃の突き出したナイフが、京太の胸を貫いた。

### 3 / 絆は運命という言葉で断ち切れはしない

1 .

皮膚が焼けただれんばかりの熱量に、京太の意識は呼び起された。由緒正しき木造の日本家屋。その一室に京太は呆然と立ち尽くしていた。但し今、部屋は本来の静謐さを失い、嵐のように轟と音を立てて燃え広がる灼熱によって見るも無残な姿へと変貌していた。この異常な光景を認識した途端、未だ夢現のまどろみのなかに佇んでいたかのような京太の意識は完全に覚醒した。

見覚えがあるどころの話ではない。これは昨日、悪夢として蘇ったあの日の記憶と全く同じ光景だった。違うのは、妹を必死で守ろうとした幼い自分もその妹も、彼らの前で父の凶刃に倒れた母も修羅と化した父もないことだ。現在の姿でこの場に立つ京太の前に立っていたのは、一人の男だった。背を向けて佇む長身の彼の姿は、揺らめく炎のなかに紛れて上手く認識できない。辛うじて分かるのはその長身と、黒く染め上げられた和装束、そして左手に携えた大太刀くらいのものだ。

京太は条件反射の如く腰を落とし、左手を刀の柄に添える。その握り心地に『龍伽』を認識して、ふと違和感に囚われた。鬼装束をまとった自分は今まさに、扇空寺の鬼たる姿でここに参じている。

陽炎のように思える緩慢な動作で彼が振り返る。その相貌を目の当たりにして、京太は驚愕に目を瞞って凍り付いた。彼は 京太と同じ顔の彼は、にやりと口許を歪めて京太を睥睨する。炎が瞬間的に大きく退いたところで、彼の全身が垣間見えた。たった一瞬であろうと、見紛うはずもない。その着衣は京太と同じ鬼装束。構える大太刀はまさしく『龍伽』そのものである。京太が持つそれと全く同じ獲物を掲げる彼の瞳は、鮮血のように真っ赤に染まっていた。殺意だけを以て、その瞳は京太を正面から射抜く。京太は違和感

の正体を悟った。眼前に聳える者こそ、鬼龍の代紋を体現した鬼という存在に違いない。だが今の自分は、姿形はそれそのものでありながらも中身のまるで伴わない、ただの人間でしかなかった。

「なるほどな……。てめえが鬼つてやつか、全く」

ようやく絞り出した声で呟いて、記憶の中の父を思い起こす。その姿は、目の前の鬼に皮肉なほど酷似していた。

京太は早々に『龍伽』の刀身を抜き放った。強過ぎる炎の照り返しのなかで、尚研ぎ澄まされた輝きを放つ宝剣であったが、今の京太にしてみればそれすらもどこか心許ない物に映ってしまう。普段ならば鞘に納めたまま立ち回り、必殺の一撃を見舞うときにだけ見える刀身をこの時点で抜いてしまうのは、ひとえに二者の力量差を露呈するものだった。鬼に相對する京太の瞳は黒い。京太は自身の内に存在する筈の鬼の力を、完全に喪失していた。ただの一度も打ち合っていないにも関わらず、力の差は歴然としていたのである。

「殺す」

そう聞こえたのも束の間、鬼は床を蹴り京太の懐へ斬り込んだ。必殺の逆袈裟に、京太が辛うじて反応できたのは修練の賜物である。切り結びながらも、しかし京太は腕力だけで強引に弾き飛ばされる。大きく宙を舞った京太は、しかしながら華麗に受け身を取って体勢を立て直す。

今の太刀筋は間違いなく扇空寺流、烈の型『炎』であった。その力でねじ伏せるといふスタイルは、鬼の尋常ならざる身体能力を以てすれば速さも兼ね揃えた恐ろしい戦技と化す。扇空寺流は現代において四つに分かれたが、そのオリジナルは代々の扇空寺組頭領にのみ一子相伝で受け継がれてきた。つまり現在、オリジナルの扇空寺流を操るのは京太ただ一人である。その京太から見て、彼の鬼が操る剣術はまさしく、オリジナルのそれであった。

自身と同じ姿を象った鬼。その正体が見えてきた。

「てめえは俺のなかの鬼の血そのもの、ってことか」

それがなぜ姿形を伴って京太の前に立っているのかまでは分から

ないが、そうと断定するに十分な材料は揃っていた。だから京太と同じ姿をしている。だから京太と同じ剣技を扱える。だから京太は今、鬼になれない。逆説的にはそう考えるのが妥当と言えた。

京太の言葉に、鬼は何も答えない。狂気に頬を歪めたまま、二の太刀を浴びせるべく再び京太へ疾駆する。

真正面から袈裟懸けに斬り付けてきた神速のそれを、京太は避けることも叶わず刀身で受けるしかなかった。力任せに弾かれ、追撃の逆袈裟が迫る。これに叩きつけんばかりの勢いで振り下ろした『龍伽』で切り結ぶと、尚もそれを弾き返し京太を追い詰める。撃つては弾き、を繰り返すに終始した剣戟の交錯は、なぜか拮抗状態にあった。あらゆる方向から幾度となく繰り出される凶刃はしかし、どれも必殺の一撃足りえない。不意に繰り出された蹴りに、京太は反応しきれず蹴り飛ばされた。床を転がり、蹴り穿たれた右胸を抑えながら立ち上がる。肋骨を粉碎せんとした一撃もまた、それでも京太を殺すには至らない。

鬼は、嗤っていた。京太を嘲笑い、弄んでいる。殺し合いを楽しみ、それだけのために生きる化け物がそこにいた。

刀を持つ手が震える。今の京太にあの鬼を討つことができるかと問われれば甚だ疑問であった。記憶を取り戻した京太にとって、ここはそれを封じてしまうほど恐怖した世界に他ならない。彼のなかにも最も鮮烈に残っている死のイメージだと言い換えてもいい。

京太は、自身の持つ鬼の力をこの世の何よりも恐れている。力を行使するたびに苛まれていた、人間という存在から隔絶されていく感覚が堪らなく厭だった。その理由がようやく分かった。全てはこの忌まわしい記憶に起因していたのだ。父の最期が、京太に鬼の力への恐怖を刷り込んだ。絶対なる死の象徴。全ての生物にとって不可避の概念の具現として、京太のなかに深く刻み込まれていたためであった。

「ちっ……!!」

無理にでも手に力を込める。ここで刀を握れなければ自分が死ぬ



ただだ。承知の上でも、手の震えは止まらない。止まるはずもなかった。第一この振動する両手を抑え込めたところで、京太は果たしてこの刀で敵を斬ることができるだろうか。

答えは、否だ。

怖がらないで。

不意に、京太の脳裏に響く声があった。優しく奏でられたのは少女の声。辺りに声の主であろう姿は見えない。どこまでも、果てなき悪夢が続くばかりだ。それでも京太は、声の主が誰であるかを瞬時に看破した。

「鈴詠……？」

呼びかけると、不可視の人物に笑みが浮かんだような気がした。懐かしい声だった。四年振りにも関わらず声だけで彼女だと判別できたのは、絆の強さの象徴だろうか。

大丈夫だよ、京太君。怖がらないで。

ふわりと、京太は暖かい温もりに包まれるような錯覚に囚われた。誰かが自分を抱きしめてくれている。それはかつて身を挺して自分たちを守ってくれた母の、あの温もりに似ていた。

あれは他の誰でもない、京太君自身だもん。

「俺、自身……」

京太は正面に立つ鬼を見つめる。京太と全く同じ姿形をした、人間とは別の何かだ。だがそれでも、その力が今まで京太の中に存在していた事実が変わりはない。悪夢の始まりの日、覚醒したそれはこれまで京太と共に在った。どうやら畏れの余り失念していたらしい。代紋に誓ったではないか。あの姿を以て全ての魔を討ち倒すと。

あれは、俺だ。

京太は『龍伽』を手放し、両腕を大きく広げた。彼の姿に、鬼は歪んだ口許を更に歪曲させて刀を走らせるべく疾駆する。大きく振りかざした大太刀の刀身が、京太を袈裟懸けに斬り裂かんとして迫る。

鬼の放った刃は、容赦なく京太の身を斬り刻んだ。肩口から腰ま

でを抉り、その肉圧に神速の斬撃は勢いを落としながらも鬼の驚異的な膂力を以て振り抜かれんとして。

半ばにして、京太の身体に突き刺さったかのように止まった。

京太はにやりと笑みを形作りその刀身を握った。傷口から噴き出る大量の血も、刃を握る手から滲み出る血も構いはしない。驚愕に表情を染めた鬼を悄然と見据える。

「さあて、いい加減戻ってきな。てめえは俺だ。俺の力だ。勝手に暴れ回んのも大概にしやがれ！」

その手に扼した刃が音を立てて折れる。鬼の手にした大太刀は折れた個所から罅割れ、砕けていく。つばが壊れ、柄が砕け、遂には鬼の体までもが強度の限界に達した彫刻のように割れる。

後に残ったのは炎に包まれた地獄のような世界だけだった。炎に焼かれ、支えを失った梁が崩れていく。それでも炎は周りの全てを焼き尽くすのを止めない。世界を覆い尽くす赤い力の奔流は、そのまま何もかもを呑み込んでしまう。

燃え盛る火炎は、鬼となった京太の瞳の色に似ていた。

2 .

満月の夜、散りゆく桜の木の下で京太は盃を交わした。虚空を舞う桜の花弁が盃の上に落ち、水面に波紋を立てて美酒を彩る。

度の強い酒は京太の喉を瞬く間に焼いたが、京太は味を愉しみながらも決して酔いが回ることはない。例えどんな酒であろうと、幾杯口にしようと今の京太が酒に溺れるはずがなかった。ただの人の身なればそんな真似は不可能が道理というものだが、京太には決して通用しない。何故なら彼の瞳は人ではありえない色に、真っ赤に染め上げられているからだ。

京太は自身に巢食う鬼の力を受け入れた。畏怖の対象として特別視するのではなく、自分の一部として認めることでその恐怖に打ち勝つことができた。恐らくこの力はもう、戦いを求めて京太の中で

暴れ狂うことはあるまい。これまで自由に解放することの叶わなかった力を、京太は完全に制御下に入れていた。

鈴詠には感謝しなければならぬ。彼女の言葉がなければ、鬼の力を御する手段など講じえなかつた。それに、ここがどこかに思い至ることもなかつただろう。

「まさか、こんなところでめえと酒を酌み交わすことになるたあな双刃」

京太の隣には、同じく盃を酌んでいる双刃の姿があつた。盃の端と端を軽く合わせて、口に運ぶ。

鷲澤組の屋敷で胸を刺されたことははつきりと覚えている。なるほど、あれが黄泉平坂であるというならこれほどの皮肉もあるまい。京太が何よりも恐れた世界の中で無限の時を戦わねばならないというなら、それは確かに地獄に違いなかつた。

双刃に刺された京太の魂は今、その『黄泉之國』の体現である力の中に取り込まれているのだ。

「鈴詠は、めえの中にいたんだな。あいつの魂だけが、未だにためえの中で彷徨つてやがる」

これは、彼が黄泉の息子であると聞いていたからこそ至つた結論だつた。思えば、蘭から話を聞いた時に何故思い至らなかつたのかが不思議だつた。彼が殺した鈴詠の魂をその力で取り込むのはごく自然の流れだ。黄泉を討つたとき、京太は黄泉が取り込んだ魂が天に昇つていくのを見た。四年前、双刃を殺した時に鈴詠が解放されるのを京太は見た覚えがない。

「四年前、俺が殺したのはめえじゃねえ。魔であるてめえが憑代にしていた、天苗双刃つていう人間の魂なんだな」

黄泉を倒せたのは、彼が魔としての実体を現していたからに過ぎない。仮に山下の身体に憑依したまま彼を殺したとすれば、死ぬのは山下健司という人間だけだ。あくまで彼の身体を憑代にしていた黄泉は、まんまと逃げおおせることができただろう。人間に乗り移る魔を容易に討滅できない理由の一つであつた。

だからこそ、それを心得ている討魔の頭であるところの京太が今まで気付けなかったことが不思議で堪らなかった。

「ご名答。本当なら、こうして酒の肴に語り合ってるのもいいんだが。でも、俺たちはそれで満足できる種類の生き物じゃない。だろ？ 扇空寺の鬼」

黄泉の息子は酒を呑み干して嗤った。京太も次の酒を口にして薄く笑い返す。

「ああ。鈴詠の仇はまだ討てちゃいねえ。討てちゃいねえが。今はそれより大事なことがある。俺はあいつを、空を助けなくちゃならねえ。もしてめえが邪魔するってんならたつ斬る。それだけだ」

笑みを消した京太は、鋭い眼差しで双刃を睨み付ける。例え彼がまだ生きていようが、京太の胸中においては一度決着の着いた事件だ。双刃を討ち、鈴詠の魂を解放するのはいつか為さねばならない責務であったが、優先すべきは空の救出であった。過去に縛られるのはそれからでも遅くはない。

盃を置いて、京太は立ち上がった。彼の身体が光の粒となって消えていく。帰還の時だ。もう一度双刃と相見えることがあれば、躊躇うことはない。扇空寺の鬼は、天苗双刃という魔を迷わず斬り捨てて往くだろう。

/ 1

フレイ・ウエアライトは、眼下に棚引く街並みを無表情に見下ろしていた。

点々と灯る明かりは、夜の帳が降りても未だに続く人の営みを示している。脈々と続いてきたそれが今夜、終焉を迎えるのだとも知らず、日々の繰り返しは続く。

月島ホールディングス本社ビルは龍伽の地を囲う日夏市の中心街に建設された超高層ビルだ。この地方最大のターミナル駅である日夏駅に併設された、全高245mのツインタワーにも匹敵する高度を備えた商業施設である。多種多様な業種における実績を束ねた、その結果がここにあると言っても過言ではないだろう。

日夏市最大級のベッドタウンと名高い龍伽とは対照的に、午前一時を過ぎて尚、オフィス街として栄えてきたここでは人口の明かりは途絶えない。日夏市におけるビジネスの中心であり、娯楽の最大手であるここから人の姿が消えはしないだろう。今夜までは。

未だ寝静まらない街の只中において、フレイが屋上に立つこのビルだけが静寂に包まれていた。各階における蛍光灯の明かりは悉く消え失せ、どのオフィスにも人の気配はない。色鮮やかな光に彩られた街並みのなかで、完全に機能を停止した超高層ビルは静謐な棺のようでもあった。だがビル前の通りを横切る誰もが、昏く色を失くしたそれを気に留めはしない。

この地を踏んで以来、宛がわれた自身のオフィスから街の変化を見てきた。季節が移り変わり、年を経て、人が流れ、街が姿を変えても、ここに人間が暮らしている事実に揺るぎはなかった。彼はただ無機質に、街の変わり行く様を観測し続けてきた。今になって思えば、高所特有の吹きすさぶ風も俗物めいた夜の景観も決して嫌い

ではなかったような気さえする。

元より俗世への憂いなどない。それどころか本気で世界を滅ぼそうと考えているわけでもない。作り物のような笑みの途絶えた今の彼こそ、本来の感情を露わにしているようでもある。

「どうした、フレイ」

黙りこくった彼を訝るような声は、耳にあてがった携帯端末から聞こえた。重くのしかかるような低い男の声を耳にしても、フレイの表情に揺るぎはなかった。

フレイは目を閉じ、通話先の声に答える。端末を持つ右手では叶わず、左手で癖の強い銀髪を弄り始める。先ほどまでの鉄面皮には、無理矢理にでも貼り付けたような笑みが浮かんでいた。

「……いえ。スペアの用意も万全です。後はラグナロク復活の儀式を進めるだけです」

ただ命令に忠実に。入力されたプログラムを完璧に実行する機械のような存在である彼には、何も理由がない。世界が終焉を迎えようと変化はないだろう。そう。決して世界を嫌悪などしない。歓喜もない。ただ為すべき事を為すために世界を終焉にすら導こうとしている彼には、正負に揺れ動く感情など必要ないのだ。

フレイは完璧に進行している首尾を伝えた。しかし通話先から聞こえてきたのは、決してそれを労うような声ではなかった。

「準備は万端か。……だが、それにしてもどうも余裕がないように思えるがね？」

別段咎めるような口振りではない。寧ろそんなフレイの様子を鑑賞する見物客のように楽しげですらある揶揄であった。

普段と変わらぬ声のなかに、果たしてどのように通話先の彼の嗜好を唸らせるような感情の機微があったかは到底理解し得ない。だがそれでもフレイの表面上の感情は揺り動きはしない。自分では気付かない胸の内には焦りがあるのか。そう他人事のように了解しただけだった。

強いて思い当たる節を探すとすれば、懸念材料は扇空寺京太の存

在だろう。例え人間の状態だったとはいえ、双刃に刺された程度で扇空寺の鬼がその身を散らすとは考えがたい。扇空寺の鬼。それは魔に対しての絶対のカウンターとでも呼ぶべき存在だ。人の身に魔を宿し、その血を洗練させてきた彼らは既に魔でも人間でもない存在であり、魔的な現象に対して髓一の抵抗力を持つ。フレイの能力が京太に通用するかどうかは甚だ疑問であった。

だがそれは扇空寺以外の脅威が存在しないという意味でもあった。龍伽の地に魔が寄り付くなど、黄泉のような例外を除けば本来なら滅多に有り得ない。『螺旋の環』は扇空寺に付随する勢力と見做していいだろう。黒翼機関といった組織の暗躍もあるまい。

ならばやはり問題は扇空寺京太ただ一人に尽きる。だが、今日まで彼に対抗するための手駒は必要以上の物を揃えてきたつもりだった。例え誰であろうとビル内に仕掛けた数々の罠を掻い潜るのは至難の業だ。よもやそれを全て突破されたとしてここまで辿り着いたとしても、フレイの手元には空の身柄がある。フレイ自身が戦えば単純な戦闘力においては京太に分があるのは歴然だったが、この事実を前にすればフレイの優位性は揺るぎない。更には天苗双刃の存在もある。彼との戦闘は、京太にとって決して避けられないものになるはずだ。フレイは彼らの戦いを横目に儀式を進めればいい。

やはり首尾は万全であった。全てが彼の思惑通りに動いている。扇空寺京太がどれだけ彼の想像を越えた活躍を見せようと、ラグナロク復活の障害には到底なり得ない。スペアを使わざるを得ない状況にすら陥りはしないだろう。

そんなフレイの思考を読み取っているかの如く、通話先の彼は悦楽に鼻を鳴らした。

「そう、君の計画は完璧だ。だからこそ知らずの内に肩に力が入っているのではないかね。今夜、世界の終焉は滞りなく訪れる。その享楽に身を委ねるつもりで気を楽に持つといい」

通話先の彼がほくそ笑む、その表情が目に見えるかのようだった。世界の終焉を前にした緊迫感など微塵もない。この戦いの行く末も

その先に訪れる終焉も、彼からすれば享受すべき娯楽以外の何物でもないのだろう。

「畏まりました。それでは、よき終焉りを。マスター・ロキ」

フレイは通話を切り、眼下に広がる世界に背を向けた。世界の終焉りに感慨など何もない。あるのはただ、俯瞰する風景との距離感だけだった。

/ 2

雛森荘はベッドタウンである龍伽からやや郊外に建造された、築二十年余りになる二階建てのアパートメントだ。既に入居者も疎らな古びたアパートだったが、管理人を務める老婆の人柄の良さから今も暮らしている者にとっては狭い部屋ながらも住み心地のよい場所であった。

深夜になり、雛森荘の窓に灯る明かりも途絶えひっそりと静まり返った今、しかし迫るのは不穏な空気だった。門の前には数人の少年が息を潜めて集っていた。

古びた鉄製の門は少し揺らしただけで金切音を鳴らしてしまう。彼らの先頭に立つ金髪の少年は、慎重に音を立てないように努めて門を開いた。それでも僅かな音まで消し去るのは不可能だ。だがアパート内に音に反応する気配はない。背後に控える仲間が息を潜めてアパートの様子を観察するなか、金髪の少年はなんとか門を開ききった。

門から手を離して金髪の少年は冷や汗を拭った。だが休んでいる暇はない。振り返れば仲間たちが彼の指示を待っている。今や彼がヘッドを務めるチーム、『黄泉』の結束は固い。チームとはいえ残るメンバーは彼らのみの残党に過ぎなかったが、彼らの意思は共通の敵と心強い後盾の元でより強固なものとなっていた。

「佐伯さん」

「ああ」



佐伯と呼ばれた金髪の少年は、乱雑に腰に携帯していた拳銃を抜き放った。その鉄の質感と確かな重量が、モデルガンなどとは比べ物にもならない本物の感触を佐伯に与えていた。『黄泉』のヘッドとして彼にだけ預けられた代物だ。これさえあれば奴に万一にも後れを取るなどあるまい。だが今はまだ安全装置を外す必要もない。佐伯の号令で全員が門内に侵入する。彼らが目指すのは管理人室。そこに暮らしている管理人、吉田徳子の身柄を確保するのが彼らの目的だった。

門から一番近い、一階の角部屋が彼らの目指す管理人室だった。完全に寝静まった室内では何も知らない管理人の老婆が呑気に寝息を立てていることだろう。

「俺が行きます」

メンバーの一人がドアを思い切り蹴飛ばした。破壊された木製のドアには見向きもせず、屋内へ潜り込んだ佐伯は騒々しい破壊音に目を覚ました管理人の口を塞いで銃口を突き付ける。

「動くんじゃねエ、ブツ殺すぞ！」

それだけで簡単に老婆は抵抗する意思を失くし、ショックで気絶してしまった。

マナーモードに設定しておいた携帯は、バイブを伴って着信を告げた。轟棋がポケットから携帯を取り出して画面を確認すると、公衆電話からの着信であった。訝りながらも、轟棋は通話に応じた。それは案の定、地獄への招待状だった。

「もしもし？」

「……吉田轟棋だな。覚えてるかア？ 前に世話になった『黄泉』ってグループのmondだ。あんたのババアは預かった。命が惜しかったら山下健司を連れてきな。一緒にいるんだろ？」

「な……！？」

轟棋は慌てて声を抑え、ゆっくりと辺りを見回す。「鴉」メンバーの葬儀は滞りなく終了した。今は扇空寺の屋敷にて酒の席が催されている。山下は轟棋から離れた席で組員と酒を酌み交わしていた。こちらの様子に気付いている様には見えない。電話をしている今なら、席を離れても不自然ではないだろう。轟棋は平然を装って宴席を後にした。

会場とは世界が隔絶されているかのように廊下は静寂に満ちていた。会場から漏れ聞こえる会話の音が聞こえるだけで、人の気配はない。ここなら、と轟棋は通話を再開した。

「……今、どこにいやがる」

絞り出した声が強張っているのを嫌が心にも感じざるを得なかった。奥歯を噛み締め、冷静に努めようと自分を諫める轟棋だったが、果たしてどれほど効果があるものか。

「あんたら『鴉』の縄張りだった、廃工場だ」

「そうか。そこで待ってる。すぐに行つてやる」

「ああ、待ってるぜエ。こっちはもう二年もこの機会を待ってたんだからよ」

通話が切れる。携帯を仕舞うと轟棋は会場の様子を窺った。どうやら席を立つた自分に気を留める者はいないらしい。山下を連れ出せば皆が訝しがるに違いない。そもそもこの問題は自分一人で解決するつもりである轟棋には、山下を伴う気など毛頭ない。轟棋は密かに屋敷を抜け出した。竹林を駆け抜け、元アジトへと向かう。

だが当の山下だけがそんな彼の姿をたつた一人見咎めていた。彼は轟棋が席を立つたときからさり気なく注意を払っていたのだ。屋敷を後にした轟棋の後を、山下は付かず離れずの距離で追っていた。幸いなことに二人が同時に消えたのが偶然だと思われたかそれとも気付いている者がいないのか、彼らの後に続く者はいなかった。

やがて轟棋は、先日まで彼らのアジトだった廃工場に辿り着く。ここでみんなが死んだ。彼が集めた仲間が全員殺されたのだ。最期まで面倒を見てやれなかったのが悔しくてたまらない。そんな場所

で今度は自分の祖母が危機に陥っている。もう、何もできずに見ている訳にはいかなかった。

廃工場の扉を開け放つ。なかにはまだ惨状の痕が残っている。鼻にこびりつく死と血の臭いに轟棋は歯を食いしばり、工場内にたむろしている『黄泉』の連中を睨み付けた。

轟棋の登場に、最奥のソファに腰かけていた金髪の少年 佐伯が立ち上がり前へ歩み出る。見覚えはあった。山下と出会ったあの日、二人で倒した内の一人だろう。どうやら彼はあれが狂言であったことを知らないようだ。どちらであるかと轟棋にとっては叩きのめさなければならぬ相手に過ぎないが。

「よう、元気そうじゃねエか吉田。てめえのお陰で『黄泉』はバラバラになっちまった。てめえの『鴉』がぶっ潰されたって聞いてよ、お礼してやろうと思ったわけよ」

佐伯は顎で轟棋を指し示す。円を描くように『黄泉』のメンバーが轟棋を取り囲んだ。数は佐伯を含めて六人。轟棋一人でもなんとか打倒できる人数だった。

「余裕じゃねエか、あア？ 舐められっぱなしってのも癪だしなあ……。すみません、お願いします！」

佐伯の声に応え、気配が増える。敵は『黄泉』のメンバーだけではなかった。黒服の男たちが包囲網に加わる。轟棋は身構え、入口の陰からその様子を窺う山下は自分の飛び出すタイミングを計っていた。

「今は俺たちだけじゃねエ。鷲澤組つてのが付いてる。てめえに勝ち目なんざねエよー！」

まるで魂を抜き取られたよう。双刃の凶刃に倒れ、扇空寺の屋敷に密かに運び込まれた京太の身体を前にして、四条あやめはそう感じていた。育ちのよさそうな少女の表情には憂いの色があった。

京太の胸にはナイフで穿たれた細い穴のような傷があった。たったこれだけで扇空寺の鬼が死ぬわけがない。あやめは京太の身体に触れる。その身体にはまだ、確かな生命の息吹のようなものを感じる。だが京太自身はまるで息をしていない。魂だけがどこかにいつてしまったような、不可思議な状態であった。なるほど、この状態なら医者ではなく私が呼ばれるわけだ。

あやめは目を閉じて精神を集中させた。すると京太に触れている彼女の掌が淡い光を帯び始め、瞬く間に京太の胸の傷を塞いでいった。

「あやめ様、それで、若の容体は……」

京太の傷を癒し、目を開けたあやめに不動が問う。あやめはゆっくりと不動を振り返る。

「傷は完治しました。でも、このままでは目を覚ますことはないと思います。身体は生きているのに、魂だけがない。魂が戻ってこない限りは、きつと……」

あやめは言葉を呑み込んで目を伏せた。今にも溢れ出しそうな涙を堪えているような、沈痛な面持ちだった。

「……とにかく、今は安静に。紗悠里さん以外の人が入り出すのもなるべく避けた方がいいと思います」

顔を上げたあやめはそれだけを告げ、淀みない動作で立ち上がる。彼女を先導すべく、同じく立ち上がった不動が縁側へ続く障子戸を開けた。

障子が開いた瞬間、縁側で待機していたが棗や『螺旋の環』の面々が揃ってあやめを振り返る。

「頭領様の部屋は、これより面会謝絶とさせて頂きます。棗さんは部屋の番を。紗悠里さん以外の方は部屋へお通しなされないようお願いします。『螺旋の環』の方々は応接間へお越しください。お話があります。不動さん、一部屋お借りしますね」

「ええ、どうぞご自由にお使いくださいませ」

不動を連れ立って、あやめはその場から去っていく。『螺旋の環』の面々もそれに続いた。

あやめは不動の案内なしでも広大な屋敷内を勝手知ったると言った風に淀みなく歩を進めていた。やがて辿り着いたのは玄関からほど近い来客応対用の座敷だった。

「それでは、茶をお持ちいたしやす」

全員を部屋に通した後の不動の申し出をあやめは笑顔で受け入れた。上座に座るあやめの、テーブルを挟んで反対側には朔羅、なぎさ、水輝が座った。『螺旋の環』オーナーたる蘭はといえば、縁側に腰掛けて庭を眺めている。

だがあやめはそんな蘭を咎めもせず、不動が茶を淹れてくるのを待つてから話を始めた。

「改めまして、私、四条あやめと申します。今回の事件、四条としては全容を把握したい考えです。お話し頂けませんか」

四条といえば、表向きにはこの日夏の地を古くから治める大地主たる名家であり、裏の世界においては死浄を生業とし穢れを祓う端的に言えば治癒能力を以って名を馳せてきた一族である。先ほどあやめが京太に対して行った治療も、その能力によるものであった。

『螺旋の環』にとってみればあやめの申し出を断る理由などない。この地に置いてラグナロクが復活するとなれば四条側も進んで手を貸そうとするだろう。こと日本においては扇空寺以上に魔の討滅に長けた組織は存在しないが、組長が倒れた扇空寺が動けるはずもな

い以上、四条との共闘は寧ろ望むべきものだった。

朔羅たちは蘭の指示を仰ぐべく、彼女に視線を向けた。朔羅たちに異存はない。ならばあとは、『螺旋の環』オーナーたる蘭が判断を下すだけだ。しかし、蘭は庭を眺めていた視線を星空に投げただけで口を開く気配はない。彼女の眼鏡の奥にある双眸には星見の眼と呼ばれる能力が備わっている。彼女の祖母、イリス・ウィザーズから受け継いだとされるその瞳には何が映っているのだろうか。

やがて蘭はあやめに振り返った。いつもと変わらぬ神秘的な微笑がそこにあつたが、どこか憂いの色を帯びているようにも見える。

「姫奈多君はなにか言っていたかい？」

四条姫奈多。あやめの妹であり四条の現当主たる彼女の名が挙がった理由は朔羅たちには分からないが、唯一得心したあやめは首を横に振って答えた。

「お姉様のご自由に、と」

「分かったよ。では、『螺旋の環』は四条からの要請を容認しよう」  
蘭は腰を上げ、テーブルに着く。それはさながら、『螺旋の環』館内においてギルド会議を開くかのような佇まいだった。

「順を追って説明しようか。まず、私たち『螺旋の環』はある一人の魔を追っていた。それが天苗双刃。聞き覚えはあるね？」

あやめは息を吞んで頷いた。だが先に口を開いたのは不動であった。

「まさかあいつが生きていたあ……。あれ以来、天苗は家ごと破門されちまつてますからね……」

「不動さん、扇空寺組と天苗は一体どんな関係だったんですか？」

なぎさの質問に不動はええ、と前置きして答える。

「貸元の一つでさあ。忍を生業にする家で、双刃の親父はウチの幹部でした」

「双刃君も組員の一人で、京太君の側近になる予定だった。……でしたよね」

水輝が言葉を継ぐ。幼い頃から屋敷に出入りしていた水輝は組の

事情にそれなりに詳しい。最も、滅多にそれを口に出すことはないが。

不動は水輝の言葉に頷いた。

「双刃の名付け親は、先々代の奥さんでした。大魔法使いと謳われたイリス様は自分の二つ名をあいつに与えて、若の懐刀とするつもりだったんでさあ」

双刃は天苗の人間として京太の側近になるべく育てられた。だが四年前、彼は魔として鈴詠を殺し京太に討滅された。息子が忠義に背いた責任を負う形で天苗の家は破門の処分を受け、現在も扇空寺との関係は断絶されたままだ。双刃が生きていた事実も扇空寺にしてみれば知る由もなかった。ただ、今の双刃は天苗の家からも隔絶された存在なのだ。

「天苗……。そう、でしたか」

実のところ、扇空寺を破門され路頭に迷った天苗を受け入れたのは他でもない四条であった。天苗の破門を知るべくして知った四条は密かに彼らを雇い、今も天苗は忍としての生業を続けている。

「それで、彼はこの一件とどう関係が」

あやめの脳裏にふと思いついたのは、京太の胸にあった刺傷であった。傷自体は決して浅くはないが、それでも京太の身体を貫通するには足りていなかった。刀ではなく、ナイフかなにかで刺されたような傷。あやめはその立場上、天苗の使う獲物をよく知っている。

「……扇空寺君を刺したのは彼なんです。ただ、扇空寺君は刺される直前にうずくまって動けなくなつて。昨日も同じようなことがあつて、私と朔羅がここまで付き添つたんですけど……。そのとき扇空寺君は言つてたんです。血が、疼くつて」

なぎさの説明の最中、俯いて一言も発しない朔羅はより悲痛な面持ちで顔を背けた。一人では歩くことすらままならなかつた状態の京太を思い出したのだらう。それだけではない。京太が刺される瞬間、身動きすら取れなかつた自分が悔しくてたまらないのだ。

朔羅が齒を噛み締める音が聞こえてきそう、なぎさは彼女から目を逸らさずを得なかった。

「天苗双刃という魔の存在に、鬼の力が触発された。その可能性は高いだろうね」

蘭の言葉には確かな信憑性があつた。彼女も扇空寺の血を引く者、ましてや先々代である辰真の孫である以上は鬼の力を持つのは当然と言えた。

「もう一つ。天苗双刃という魔 厳密には、その名を持っていた人間の身体を乗っ取っている魔なだけけれど、彼は黄泉という魔の息子だということが分かっているよ」

「黄泉……！ お嬢、そいつぁ本当なんですか！？」

驚愕する不動に、蘭はあくまで冷静に頷く。

「魔の性質を見極めることに関しては、討魔を専門とする扇空寺組より私たち魔法使いの方が長けているのは分かっているだろう？」

「あやめ君、黄泉という魔の能力は『黄泉之國』といって、人間の魂を取り込んでその生命力を自身の力に還元させてしまうというものだ。天苗双刃にもその力があるのは間違いないと思う。だとすれば、今はここにない京太君の魂は天苗双刃のなかにあると考えていいだろうね」

「そうか。あやめは拳を固く握りしめた。天苗双刃。彼を倒さなければならぬ理由ができてしまった。

「それで、どうして今、天苗双刃と頭領様が戦うことになってしまったんでしょうか」

「あやめは京太と双刃の間にある遺恨を知ってはいる。だが、なぜ今になって二人が対峙しなければならぬのか、それが不明瞭だった。

「それは不動さんから聞かせてもらった方がいいだろうね。私は天苗双刃が生きているのを京太君に伝えただけだよ」

「蘭はそれきり口を閉じてしまった。彼女も流石に京太が鷲澤組の本家にいた理由までは分からない。



ウス、と一呼吸置いて、不動が話を継ぐ。

「一週間ほど前になりやす。鷺澤組に妙な外人が入り込んでるっていう報告が入ってきた。そいつの名前はフレイ・ウエアライト」  
不動は水輝を一瞥した。果たしてこの先の情報を告げていいものか。水輝はその視線に苦笑とともに答えた。

「偽名ですけどね。彼は僕の父が経営する企業、月島ホールディングスの副社長です。彼に関しては僕も独自に調査を進めていたんですが、素性について分かったのはそれが偽名なことくらいです」  
「月島君があの場合にいたのは、フレイ・ウエアライトを追っていたからなのね」

得心するなげさに、水輝はええと肩を竦めながら頷く。全く齒が立ちませんでした。自嘲めいた呟きには返す言葉がない。なげさもフレイを仕留めるチャンスがありながらみすみす彼を見逃してしまっただし、朔羅に至っては同系の能力を以って圧倒されたために意気消沈したままだ。

「そのフレイから連絡があつたのが今朝。鷺澤組の連中の手で、ウチの若衆の九十九と結城、……それと堅気の姐さんが拉致られちゃいやした。若が鷺澤組の本家に乗り込んだのはそれが理由でさあ。九十九と結城についてはなんとか救出できたんですが、姐さんについてはまだ……」

「私たち『螺旋の環』は、天苗双刃を追っている内に鷺澤組に辿り着きました。鷺澤組とフレイ・ウエアライト、それに天苗双刃がどいう事情かは分かりませんが協力関係にあるのは間違いないみたいですね」

「僕は一人、先立ってフレイ・ウエアライトを追って鷺澤組の屋敷に潜入しました。そこで彼は、自分の目的がラグナロクの復活であると言っていました」

水輝の言葉を受け、あやめは驚愕に目を見開いた。

「ラグナロクの復活、そんなことができるんですか……!?!」

彼女の問いに答えるべく、再び口を開いたのは蘭だ。

「可能性はないとは言えないね。仮にもフレイを名乗る人物だ。その術は心得ているだろう。本来なら阻止するべく、ね」

北欧神話における神の名を名乗る彼の實力は確かであり、未知数だ。それは相対した三人がよく分かっている。

「……でしたら尚のこと、四条が手をこまねいている訳にはいきません。四条には魔と戦う術は少ないですけど、『螺旋の環』への支援は惜しみません」

あやめは緊迫した面持ちで告げた。『螺旋の環』と四条の共同戦線はここに確約された。

「本来ならウチが成さなきゃならねえ討魔の仕事ですが、若が倒れた今、俺たち下のもんが勝手をするわけにゃあいけません。済みませんがどうか、よろしくお願いしやす」

不動が大きく頭を下げる。その姿を見て、なぎさはふと思に至る。「そついえば、なんで四条の方がここへいらつしやつたんでしょうか。失礼ですけど、一番縁がなさそうな気がしますが……」

土地の大地主である名家と先祖代々続く任侠一家がなぜ繋がっているかを考えると、どうにもキナ臭い関係しか見えてこないところだ。

なぎさの質問に、あやめは困り切った笑みを浮かべた。なぜか蘭を仰ぎ見る。頷きもせず不敵な笑みを見せる彼女に嘆息して、あやめは『螺旋の環』の三人を見据えた。

「蘭さんもいらつしやいますし、あなたがたにはお話ししてもいいかもしれませんね。扇空寺組の頭領様　扇空寺京太は、私の実の兄です」

だからあやめ君は私の従妹でもあるんだよ。驚く三人に、蘭が心底楽しそうに告げた。

「年下な気はしていたけど、まさか中学生だったなんて思ってもみなかったわ」

会議を終え、あやめは四条家へ状況を報告するために一旦屋敷を出て行った。今頃は四条の抱える密偵たちがフレイの行方を捜索しているだろう。蘭も不動とともに応接間を離れたため、残っているのはなぎさ、朔羅、水輝の三人だけだ。フレイを発見するまでの小休止といった形になったところで、なぎさは嘆息とともに呟いた。

あやめの素性は彼女自身が粗方説明してくれた。私立白鳳学院中等部三年生。今年で十五歳になるという。落ち着いた佇まいが年齢を意識させない雰囲気を作っているものの、兄同様に実年齢より比較的幼い顔立ちやはり同じ血の成せる業か。

「驚きましたね。京太君に妹さんがいて、四条の養子になっていたなんて知りませんでしたよ」

扇空寺組先代頭領、扇空寺椿と、四条家の娘である四条砂苗の間に生まれたのが京太とあやめだ。椿と砂苗が没した事件以後、四条の治癒能力を色濃く受け継いだあやめは母の生家である四条の養子となった。養子縁組を交わしたのは四条総志。砂苗の兄であり、あやめにとっては伯父であった人物だ。

「それにしても、実の兄と離れ離れにされてまで名家の養子に出されて、結局家督を継いだのは義妹の方だなんてなんだか納得いかないわね」

あやめはあやめで、四条の人間として相応しい気品を備えるべく育てられてきた。だが肝心の家督は総志の実子である四条姫奈多への継承が決まっており、結局のところ四条が欲したのはあやめという少女が持つ力そのものでしかないと言っているだろう。

あやめは年に一、二回は京太に会える機会があると話していた。

彼女は微笑みながら話していたが、どこか無理に作ったような笑顔になぎさはいたたまれない気持ちになる。彼女自身とうの昔に両親を亡くしている。それだけの共通項からあやめに対して感情移入をしてしまったているかどうかは否定こそできない。

もしかしたら私は、彼女に親近感を抱いているのかもしれない。

四条という家にはこれまでどこか高慢なイメージが付き纏っていたし、それが晴れたわけでもない。だがあやめはそんなイメージとはかけ離れた存在で、どこかなぎさ自身と近いものを感じていた。だからこそ、四条家におけるあやめの境遇には憤りを禁じ得ないのだろう。

なぎさは夜空を見上げた。都会から隔絶された竹林の奥では星がよく見える。蘭も見ていた今宵の星空。星見の眼は、星々の煌めきのなかに無限の可能性を視るといふ。終焉を前にした星空に、果たして蘭はどんな結末を視ていたのだろうか。

隣に立つ水輝も同じく視線を彼方の星々へ向けていた。思えば自分たちはなんのためにラグナロクの復活を阻止するために戦うのだろう。世界を救うためだろうか。それともあくまで『螺旋の環』という魔法使いギルドの役割としてなのだろうか。

「うがーっ!!」

突如としてこれまで沈黙を守ってきた朔羅が奇声を発し、なぎさと水輝は驚きを露わに彼女を振り返った。

両腕を掲げて硬直した姿勢の朔羅は、やがて深く息をして腕を降ろした。目を開けた彼女の眼差しにはもう先ほどまでの打ちひしがれた悲嘆の色は見えなかった。

「私決めたよ。空ちゃんを助ける。友達だもん」

朔羅は一度決めたことは頑として譲らない。頑固とはややニュアンスが違うのだろうとなぎさは思っている。ただそれを成すと決めることが朔羅の原動力であり、且つ為し得ることこそ朔羅の魔法使いとしての資質を如実に示していた。

「ええ。京太君が動けない今、僕たちが空さんを助けないと」  
水輝の言葉に朔羅となぎさは頷く。戦う理由などそれだけで充分だ。

大切な友人が囚われている。彼女を助けるために大義も名分も必要あるものか。

「どうやら準備はできているみたいだね」

襖が開く音とともに応接間へ戻ってきた蘭の問いには答えるまでもなかった。振り返った三人の眼差しを見て、蘭は満足そうに微笑んだ。

「月島ホールディングス本社に、大規模な結界が張られているのを四条の密偵が発見したよ。フレイ・ウエアライトは恐らくそこにいるだろうね」

蘭の隣に歩み出てきたあやめが、厳粛な面持ちで告げる。

「では、行きましょう」

「はい！」

三人は力強く頷いた。

結界に包まれた月島ホールディングス本社ビルは完全な異界と化していた。静謐な儀式場であるビルには、結界の効力をディスプレイした魔法使いや退魔師以外の者が踏み入るなど不可能だ。まして一般人にはそこが表の世界から隔絶された異界であるなどと認識すらできない。

『螺旋の環』は堂々と正面から突入する構えだ。フレイがこの場所を探り当てられることを想定しているのなら、幾重もの罠が張り巡らされているのは間違いない。だが、だからこそその全てを正面から打ち破らなければフレイとの対峙は叶わない。

「私も行きます。兄の仇となる方がここにいる可能性があるのなら、ここで手をこまねいているわけにはいきません」

「どうぞ自由に。ただ、命の保証はしませんよ四条さん」

なぎさの冷徹な宣告にあやめは怯みもせず頷いた。彼女も覚悟があつてここまで来たのだ。先陣は切ろうと後退はしないだろう。

玄関ホールへの自動ドアはなぜかそのままの機能を保っていた。オートで開いたガラス戸を潜れば、彼らの到来を待ち構えていたかのように独りでに明かりが灯つていく。

それだけではなかった。足を踏み入れたビル内は、次々に禍々しい姿へと変貌していく。光の色は薄く、装飾は魔的に。リノリウムの床は硬質な石畳へ。現代的な建物内は見る間に中世の古城といった風体の様変わりしてしまった。

薄闇のなか、青白い光が瞬いた。床に現れた円が光を放つたのだ。魔法使いたる『螺旋の環』の面々はそれが召喚の魔方陣であると一目で看破した。

魔方陣は何条もの円を床に刻み、その悉くから醜く蠢くものが這い上がってくる。黒いコールドールのような塊は地上に現れると同時に形を変え、四本足の獣のような姿を象る。魔だ。差し詰めこの魔城を守る獰猛な番犬といったところか。

無数の魔が侵入者を排除するべく唸り声を上げながら周囲を取り囲み始める。

「私が残ろう。君たちは先に行くといい」

蘭の言葉に頷き、あやめたち四人は二階を目指す。幸い階段の前の陣形はまだ薄い。朔羅が鎌を一振りしてできた道を、四人は一斉に駆け抜けていった。

「さて、ここは兄弟子の面目躍如といかせてもらおうよ」

不敵に微笑む蘭の周りを魔たちが囲い、徐々に詰め寄っていく。開戦の火蓋は今まさに切つて落とされようとして。

「ところで君たち、なにを悠長に構えているんだい？」

彼らはそれが既に落とされているものだとして理解していなかった。

蘭の周囲を囲う魔の足元に、黒く蠢く水溜りのような物体が現れる。次の瞬間には、水溜りから突如として飛び出した無数の鍼のような

ものに身体を貫かれ、魔たちは霧散していった。

それは人が体系化させた、魔法と呼べる代物では到底有り得なかった。漆黒の闇を操る力はまさしく、魔と呼ばれる彼らと同じ能力であった。

「どれだけ数的優位に立とうと、その優位性を保持するためには即抹殺が鉄則だよ。特に、私たちのような部類の生き物にはね」

城内を駆ける。もはやここはビルとは呼べない。石造りの建物内に敷かれた赤い絨毯の上を、更に上階を目指して疾駆する。廊下は一本道で障害物の類はなに一つ配置されていない。

だがそれゆえに配備された数多くの魔どもの戦闘の弊害は存在しない。

整えられた戦場に、本能を剥き出しにした魔どもは歓喜の咆哮とともに襲い掛かってくる。

だが障害がないのはこちらとて同じ。『螺旋の環』は持てる力の全てを以って迫りくる怒涛の軍勢を排除して進む。

あやめはその戦いを後ろで見守るだけで充分だったのだ。

なぎさの身体から迸る電撃が手前の魔を屠り、水輝の銃から発射される魔弾がその背後に構えていた魔を撃ち、残された魔の首を朔羅の鎌が狩り取る。完璧な連携による戦いにおいて、あやめが手を挟む隙などどこにもなかったのだ。

あやめの役割はただ、その階層における戦闘を終えた彼女らの僅かな治癒のみであった。

だが、限界は訪れつつあった。

「くっ……!!」

水輝の銃弾を受け、尚も怯まず襲い来る一匹の魔があった。なぎさの援護を受け対処は叶ったものの、たった一体を相手にこれだけの消耗は大きい。

朔羅が対峙する人型の魔も相当な手練れであった。朔羅の鎌を受け止め反撃に出る。炎に包まれた腕が朔羅の頭部に掴みかかると

したとき、水輝の放った弾丸がそれを抑制した。その隙を突いて朔羅は鎌を振るう。四肢を切断された魔は塵となって消え失せた。

「召喚される魔のランクが上がってきてるわね」

「ええ。恐らくはこの先、元魔クラスが現れる可能性も高いでしょうね」

元魔とは即ち、遙か昔、神話の時代より世界に存在する悪魔たちのことだ。これまで倒してきた魔どもとは比べ物にならない絶大な力を持つが、元魔戦争終結後にイリス・ウィザーズの手で封印された。人柱たる扇空寺辰真が亡き今、その封印が弱まっているのは確かだ。

少なくとも、フレイの傍には元魔に匹敵する力を持つ魔が控えているに違いないだろう。

戦う以外に道はない。なぎさの能力で消耗を癒した朔羅たちは、先を急ぐべく階段を駆け上がった。

途端に、これまでとは違う異質な気配を感じ取る。

兄者よ、我らの敵はこやつらか？

そのようだな。人間どもよ、この先に進むことは許さんぞ。

重く、昏い力の気配が朔羅たちの神経を刺激する。廊下の薄闇さえ濃くなったような気がする。雰囲気は呑まれそうになり、朔羅は思わず大声を張り上げた。

「誰!？」

朔羅の声に呼応してか、召喚の魔方陣が青白く輝く。数は二つ。

気配の主が地獄の底から這い上がるかのように光のなかから顕現する。

片や、白く輝く荘厳な氷原のような毛並を持つ、巨大な狼。

片や、龍のように猛々しい鱗を持つ、先の狼より遙かに巨大な蛇。お初にお目にかかる。我が名は元魔フェンリル。ラグナロク様復活の邪魔はさせんぞ、人間ども」

「同じく、元魔ヨルムンガンド。貴様らはここで俺と兄者の前に敗れるがいい」



元魔クラスどころではない。元魔そのものが朔羅たちの前に立ちはだかった。その名乗りが偽りでないことは、そこに在るだけで肌を焼かれそうな存在感が如実に示している。

身構える朔羅たちに対し、先に仕掛けたのはフェンリルだ。その双眸が冷たい氷のような青白い光を放ち、頭上にその巨躯に匹敵する質量を持つ氷柱を形成する。この氷柱をあるうことが、フェンリルは機関銃のように連射してみせた。

絨毯爆撃の如き猛攻に、だが朔羅たちはあくまで冷静に対処する。廊下を縦横無尽に駆け回りながら氷柱を避け、反撃の目を窺う。朔羅に至っては華麗なステップを駆使してフェンリルの前に躍り出ると、鎌を大きく振りかぶった。

「そうはいかんぞ！」

だが吼えたのはヨルムンガンドである。彼が咆哮を上げると、廊下全体が波打つかのように振動した。この大地震に人間の脚力は抵抗する術を持たない。無様に転がるしかない朔羅たちを、ヨルムンガンドは更に畳み掛ける。

津波だ。大きくうねりを伴って、廊下の奥から津波が押し寄せてくる。暴れ狂う水の奔流は瞬く間に朔羅たちを呑み込んでしまう。

これを凍り付かせたのはフェンリルだ。フェンリルはその能力で朔羅たちを呑み込んだ廊下の海を氷河に変えた。

二柱はともに咆哮を上げる。氷を自在に操るフェンリルと、大地を揺るがすヨルムンガンドのそれは氷河を爆散させ、木っ端微塵に散った氷の破片が舞う廊下に朔羅たちは倒れ伏した。

圧倒的に過ぎる。元魔の力とはこれほどまでに強大なのか。

絶望に打ちひしがれる朔羅たちへとどめを刺すべく、フェンリルは氷柱を放つ。

全員が敗北と、その先の死を覚悟したその瞬間、

「扇空寺流、玖珂式 『朧蓮華』」

一閃が瞬いた。正確には何十という単位の剣戟がたった一瞬の内に繰り出され、フェンリルの攻撃の悉くを打ち払ったのだ。

「紗悠里、さん？」

現れた紗悠里の姿に全員が目をしばたたいた。彼女がなぜここに……？

「みなさん、動けますか？」

紗悠里の目配せに、朔羅たちはまともに動かすことも叶わない身体を地面から引き剥がすかのように起こした。彼女らの身体を淡い光が包む。あやめの治癒能力だ。直接触れなければ気休め程度に過ぎないが、確実にダメージは軟化していた。

彼女らの様子に紗悠里は微笑む。だが紗悠里はすぐさまその表情を消し、元魔たちに向き直る。

扇空寺流、楯の型『隴』。扇空寺流において唯一、守りに特化した型である。扇空寺流玖珂式はその型の究極系を目指した派生流派だ。こと魔との戦闘においてのそれは、完璧な防御力を備えた最強の盾と言ってしまうても過言ではない。

「私と風代さんを先頭に、穂叢さんと水輝さんは援護をお願いします。あやめ様はお下がりにください」

紗悠里の指示通りに陣形が組まれる。紗悠里は刀を手に、二柱の元魔と対峙する。

「玖珂紗悠里。参ります」

/ 4

フレイはラグナロク復活の儀式の準備を進めていた。

彼の足元には屋上の床全体に懸けて描かれた魔方阵があった。円のなかに確かな規則性を以って羅列された文字と記号の意味は彼にしか分からない。だがこれこそがラグナロクの復活を人工的に為し得る唯一の術であることは確かだ。

白のチヨークで描かれた魔方阵は、フレイが魔力を装填すれば青白く輝くはずだ。屋上の隅に丁重に横たえられた空の身体を抱え、彼女を魔方阵の中央に配置するべく歩み出した。発動した魔方阵は

彼女の身体にラグナロクを降臨させる。彼の目的はそれで果たされる。

「待ちな」

突如としてかけられた声に、フレイは顔を上げた。眼前に迫りくる刃の一撃を、フレイはその一瞬だけで避け切ってみせた。だがその一瞬が失態を招いてしまった。咄嗟の判断で身を投げ出したフレイは空の身体を手放してしまったのだ。

フレイが身を起こす最中に、刀を鞘に仕舞う音がする。彼に刃を向けた人物は空の身柄を回収していた。

整髪料で逆立った髪、研ぎ澄まされながらもどこかあどけなさを残した顔立ち。身に纏うは血染めの装束、手にする獲物は大太刀。その瞳は紅く燃えるように染め上げられていた。

「扇空寺、京太……！」

京太はフレイには目もくれず、抱きかかえた空の身体をゆっくりと降ろす。それまで気を失っていた空が目覚めます。空の覚醒に気付いた京太は、彼女へ優しく微笑んで見せた。

「遅くなっちまったな。助けに来たぜ、空」

「京太君……！」

空を庇うように自分の背後に寄せ、京太は元凶と対峙した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1091x/>

---

IRIS//RAGNAROK

2011年10月20日09時17分発行